2016 年度

法政大学国際文化学部

国際文化情報学会
プログラム

2016 年 11 月 26 日＠外濠校舎

２０１６年度国際文化情報学会概要

開催日時：２０１６年１１月２６日（土曜日）
　　１２時５０分～１３時３０分　学会総会
　　１３時３０分～１７時３０分　研究発表会
　　１８時００分～２０時００分　表彰式　懇親会
場所：　総会　学会本部：外濠校舎Ｓ４０５
　　研究発表：外濠校舎各教室　3F,４F ギャラリー
　　表彰式・懇親会：さったホール

学会総会議題
１、2015 年度会計報告
２、2016 年度の学会運営方針
３、学部叢書の寄贈について
４、次年度以降の運営方針の変更について
５、その他

懇親会＆表彰式スケジュール
１、学部長挨拶
２、乾杯、懇談
３、学部パンフレット表紙コンペ結果発表と表彰
４、FIC サロン（国際文化学部生対象就職セミナー§懇親会）のお知らせ
５、学生審査員および学会発表者への連絡事項
６、学会各部門最優秀賞、奨励賞結果発表と表彰

審査に当たる教員、院生、学生のみなさんへ
審査用紙の受け取りと提出はＳ４０５の学会本部で行ってください。
質問等も本部へ問い合わせてください。

『異文化』編集委員からのお知らせ

最優秀賞および奨励賞受賞者の論文は、改稿の上『異文化』に掲載します。その際の字数は１２０００字以内とする。

受賞者はフォーマットをダウンロードし、必要事項を記入の上、国際文化学部事務まで提出すること。

パフォーマンスや映像作品に関しては、誌面に掲載可能な形態のものに限る。（今年度から全員の発表概要の掲載をやめ、受賞者だけに絞ることにしました）

【フォーマット掲載ページ】

国際文化学部Webページ＞在学生の方へ＞2016年度国際文化情報学会の開催について

http://www.hosei.ac.jp/kokusai/NEWS/zaigaku/161003_02.html

【提出締め切り】12月12日(月)17:00(厳守)

【提出先】国際文化学部事務(jkokusai@hosei.ac.jp)

国際文化学会の教員審査の結果通知を希望する人へ

学会発表に対する教員審査員による評価を知りたい発表者は、以下の事項を書いて12 月 2 日(金)17 時までに、国際文化学部事務窓口に書類で申請するか、メール（国際文化学部事務：jkokusai@hosei.ac.jp）で申請すること。12 月 19 日(月)より、教員審査員投票用紙一式を学部事務窓口で渡す。

なお、グループ発表の場合、教員審査結果通知の申請をすることをグループ全体で確認してから、学会プログラムに出ている代表者が申請を行ってください（発表グループ内の一部のメンバーだけが知るという事態を避ける必要があります）

教員審査結果通知　申請用フォーマット見本

【直接学部事務窓口に提出する場合は、本プログラム最終頁のフォーマットに記入・切取の上、提出すること】

発表部門(いずれかに〇)	A　B　C1　C2　D
発表者名(グループ発表の場合は代表者名)	
学生区分(いずれかに〇)	学部生　大学院生
発表タイトル	
ゼミ名	
※グループ発表者のみ記入すること 教員審査結果通知の申請を行うことは グループ全体で確認済みですか？	はい　いいえ

A.論文部門（学部生・院生）

場所	時間	タイトル	発表者	ページ
外濠 S201	13:30~14:00	戦後のしない競技が残した、現代の剣道観	谷井みづき （佐々木一惠ゼミ）	1
	14:05~14:35	ブリッジング機能から見る地域活性化と多文化共生 ～栃木県佐野市のハラルフードをコンテンツとする事例から～	北野初季 （佐々木一惠ゼミ）	1
	14:40~15:10	（院）公権力による〈暴力〉は正当性をもちうるか ――北アイルランドにおけるテロ・拷問・安全保障	田島樹里奈 （森村ゼミ）	2
	15:15~15:45	（院）中国の都市部における女子大学生の就職意識の影響要因に関する	エンエンセイ	3
	15:50~16:20	（院）観光開発における「石門坎文化」 ―地域ブランドの生成過程の考察―	オウマキウン	3
	16:25~16:55	（院）日本のリトミック教育成立の過程に関する一考察― ダルクローズと小林宗作の音楽経験に視る教育の目的―	田邊美樹 （浅川ゼミ）	4
外濠 S202	13:30~14:00	（院）日中大学生の恋愛・結婚意識と文化的自己観の関連性をめぐり ――法政大学と上海外国語の学生を対象に	楊宇	4
	14:05~14:35	（院）戦後日本映画における食事シーンについて	オウユキ	5
	14:40~15:10	（院）吉行淳之介『暗室』における 3 人の女性と空間 ―「電話」から見える主人公との関係性―	茂木玖美 （川村湊ゼミ）	6
	15:15~15:45	メディアがつくる日中関係～反日・反中から相互理解へ～	石渡けやき （今泉ゼミ）	7
	15:50~16:20	ブションから見るリヨンの地域アイデンティティ	寺島裕香 （佐々木一惠ゼミ）	7
	16:25~16:55	5 年目を迎えた「SJ 国内研修」―その成果と課題	髙柳俊男教授	8
外濠 S204	13:30~14:00	現代の高麗人における宗教の多様化に見る改宗問題	崔眞僖 （佐々木一惠ゼミ）	9
	14:05~14:35	新たなソーシャルキャピタルの萌芽 ～都市型芸術祭の事例から～	下江航平 （佐々木一惠ゼミ）	9
	14:40~15:10	エシカル消費による現代日本の食生活意識 ～菜食嗜好的消費行動の事例から～	杉嵜皓 （佐々木一惠ゼミ）	10
	15:15~15:45	国民的ローカル映画としてのインド映画 ～インド映画『ボンベイ』から考察して～	田所莉歩 （佐々木一惠ゼミ）	11
	15:50~16:20	ミュージックビデオの現在 （能動的視聴者と「作品」たらしめているものとは？）	浅香健人（林ゼミ）	12
	16:25~16:55	地域活性化におけるコンテンツツーリズムの有効性	小林早恵（曽ゼミ）	12
外濠 S301	13:30~14:00	初等教育の中退をなくすために―戦前藤沢からの学び―	村山晴香 （松本ゼミ）	13
	14:05~14:35	姉妹都市 60 年の分析 ―外的要因により活発化する長野市と海外都市との交流―	大塚弘貴 （松本ゼミ）	14
	14:40~15:10	ミャンマーの非紛争地域の少数民族と民主化 ――南部ビル島のモン族へのインタビュー調査から――	幸坂悠菜 （松本ゼミ）	15

	15:15~15:45	日本の援助への異議申立がもたらしたもの——制度が持つ働き——	遠田梓（松本ゼミ）	15
	15:50~16:20	植民地時代から 18 世紀末までのアメリカ文学における対象としての自然の描写	佐藤和司 （栩木ゼミ）	16
	16:25~16:55	ASEAN からの訪日観光客誘致に向けた取り組み	武藤千佳（曽ゼミ）	17
外濠 S304	13:30~14:00	地中海難民の行方—イタリアに到来した難民はどのように受け入れられているのか—	山田光樹 （松本ゼミ）	18
	14:05~14:35	新興国から先進国への投資による環境問題 —タスマニアの森林伐採の事例から—	前田真綾 （松本ゼミ）	18
	14:40~15:10	留学生の異文化適応とカルチャーショック —8 人に対する 6 か月間のインタビュー結果から—	金子由依 （松本ゼミ）	19
	15:15~15:45	ハワイ語の復権の可能性	熊代朝子 （松本ゼミ）	20
	15:50~16:20	Toronto as Art-City My observation and Analysis	澤井薫（熊田ゼミ）	20
	16:25~16:55	ご当地キャラクターの多様な影響力	浅野ひかり （曽ゼミ）	21
外濠 S401	13:30~14:00	都市の身体化とグラフィティ：都市景観を創造する	近藤郁美 （熊田ゼミ）	22
	14:05~14:35	「平等」な社会からの脱却　～セクシャルマイノリティについて考える～	御子柴亮介 （熊田ゼミ）	22
	14:40~15:10	日本と海外とのプライバシー比較と新たな概念の提案	藤森結子 （奥石ゼミ）	23
	15:15~15:45	日本人のスピーキング力・論理性と発音の正確性の欠如 ～日本の教育のあり方を考える～	遠藤瑞歩 （奥石ゼミ）	24
	15:50~16:20	なぜ言語学習は異文化理解に必要なのか？ —サピアウォーフの仮説から考える—	大久保秀斗 （奥石ゼミ）	24
	16:25~16:55	シベリア抑留における長期抑留者の考察 ～祖父の軍歴・抑留体験を中心に～	木嶋諄 （今泉ゼミ）	25
外濠 S402	13:30~14:00	スウェーデンと日本における子育て支援政策の比較考察 —仕事と子育ての両立可能な社会へ—	宮﨑奈々 （今泉ゼミ）	26
	14:05~14:35	基地からの自立の手段としてのエコツーリズム —エコネット・美における地域の自立—	石川紗衣花 （今泉ゼミ）	27
	14:40~15:10	陸軍中野学校にみる諜報教育	広瀬絢菜 （今泉ゼミ）	27
	15:15~15:45	なぜ日本の捕鯨は強く反対されているのか	原涼馬（中島ゼミ）	28
	15:50~16:20	コリアンタウンから多国籍な街へ ～新大久保における街づくりの現状と課題～	西川結子（曽ゼミ）	29
外濠 S404	13:30~14:00	コーヒーのフェアトレード —日常の消費は新経済秩序の構築へと繋がるのか—	及川園加 （今泉ゼミ）	30
	14:05~14:35	横須賀市から見る地域と米軍基地の関係	鶴巻百門 （今泉ゼミ）	30
	14:40~15:10	倫理的消費に「おしゃれ」は必要か ～日本におけるエシカルファッションの事例から～	矢部彩香 （佐々木一惠ゼミ）	31

	15:15~15:45	黒人スポーツ商業主義～米国野球を事例に～	喜舎場洋平 （佐々木一惠ゼミ）	32
	15:50~16:20	観光大国を目指す日本における民泊の現状とその可能性	鶴岡洋乃（曽ゼミ）	33
	16:25~16:55	1970 年代デンマークポルノ映画がドグマ 95 に与えた影響	内山一文 （リービゼミ）	33

B.ポスター部門

外濠 3 階ギャラリー	13:30~15:00	インドネシアの生物多様性の現況と保全施策について	那木緩菜 （中島ゼミ）	34
		スタジオジブリと武蔵野の開発史	末竹広樹 （岡村ゼミ）	35
		AI とプログラムが作り出すコンピューターエンタテイメント	鈴木唯（重定ゼミ）	35
		国際文化をグローバルに学ぶ－私たちの留学	舘美月（熊田ゼミ）	36
	15:30~17:00	2016「高郷プロジェクト」活動まとめ	新崎椋司 （稲垣ゼミ）	37
		東京五輪 ゆるキャラプロデュース大作戦 —アンケート調査にもとづく考察—	川辺拓未 （衣笠ゼミ）	37
		次世代のガイドとしての SNS	武内美菜子 （曽ゼミ）	38
		現代のチンドン屋における活動実態とその背景 ～カルチュラル・ターンの視点からの考察～	杉嵜皓 （佐々木一惠ゼミ）	39
外濠 4 階ギャラリー	13:30~15:00	人と人とのコミュニケーションを助けるロボット	山室荘 （甲・渡辺ゼミ）	39
		心に平和の砦を ～ナガサキから学ぶ、私たちにできること～	峯村彩花 （佐々木直美ゼミ）	40
		首里城～観光イメージの裏側に見つけたもの～	髙橋洋朝 （今泉ゼミ）	41
		里山と人間の生活との持続的な関係	錦澤元汰 （島野ゼミ）	41
	15:30~17:00	「手」から始まる親子のコミュニケーション	三浦主税 （甲ゼミ）	42
		PureData によるミュージックシンセサイザーのモデリングの試み —Minimoog を例として—	小俣柚里 （大嶋ゼミ）	43
		PureData によるミュージックシンセサイザーのモデリングの試み —Minimoog を例として—	大嶋良明教授	44

C.映像部門

外濠 S307	13:30~14:00	幸福な選択	桐山紗緒梨 （鈴木晶ゼミ）	45
	14:10~14:40	SA JAPÓN	村上絢香 （田澤ゼミ）	46
	14:50~15:05	本日の主役	野明菜々子 （島田ゼミ）	46
	15:15~15:25	指宿温泉　白水館ラジオコマーシャル映像	野明菜々子 （島田ゼミ）	46
	15:35~15:45	108	栽原萌衣 （島田ゼミ）	46
外濠 S407	13:30~14:00	虎穴に入らずんば	山本陸 （島田ゼミ）	47
	14:10~14:30	台湾人 2000 人を救った日本人警察官	白鳥綾乃 （鈴木靖ゼミ）	48
	14:40~14:55	VERBS	若宮樹 （稲垣ゼミ）	48
	15:05~15:35	Lives: movie version	小島シティマイ百那 （熊田ゼミ）	49
	15:45~15:55	Wonderwall	飯野麟太郎 （島田ゼミ）	49
	16:05~16:15	国際文化学部紹介映像	飯野麟太郎 （島田ゼミ）	49

D.インスタレーション、パフォーマンス部門

外濠 S501	13:50~15:00	Value?	飯野麟太郎 （島田ゼミ）	49
	16:00~17:10	意外と知らないアメリカ～常識を疑え～	石塚蘭 （栩木ゼミ）	50
外濠 S502	13:50~15:00	Lives.	露木理久 （熊田ゼミ）	50
	16:00~17:10	昴	佐々木美佳 （甲ゼミ）	51
外濠 S503	13:50~15:00	―私たちは音楽をただ音・耳だけで聴いて／感じているのだろうか―	三輪大輝 （林ゼミ）	51
	16:00~17:10	『Se’e’cret』	山﨑　優 （森村・川村ゼミ）	52
外濠 S504	13:50~15:00	Renatus　～モノの機能～	新崎椋司 （稲垣ゼミ）	52
	16:00~17:10	パンアフリカニズムについて　～世界はアフリカだ～（Bar AFRIKA）	吹原春海 （粟飯原ゼミ）	53

A.論文部門（学部生・院生）

発表者氏名：谷井みづき
所属ゼミ：佐々木一惠ゼミ
タイトル：戦後のしない競技が残した、現代の剣道観
発表概要：
明治期に剣道は武道として整備され、学校教育にも取り入れられた。しかし、第二次世界大戦後、総司令部民間情報教育局（CIE）の意向を受け、文部省が発令した政策である「終戦二伴フ体錬科教授要項（目）取扱二関スル件」で学校教育において、剣道が軍国主義の役割を担い、軍事訓練の一部として重んぜられたことなどが挙げられ、禁止を余儀なくされた。そのため、剣道は軍事教育の結び付きから脱却した「民主化・スポーツ化」が求められた。その中で生まれたのが剣道に類似したスポーツとしての「しない競技」であった。「しない競技」はルール、用具などを検討した上で、フェンシング等を参考にして、スポーツ的な内容に変化させたものであり、全日本撓競技連盟が 1950 年に結成された。その後、1952 年に文部事務次官通知により「しない競技」が学校教育へ復活を果たした。しかし、剣道愛好者のなかで「しない競技」に対し、違和感や飽き足らぬものを感じ、スポーツ的な感覚を入れながらも今までの剣道の様式を残すべきだという動きが活発化し、サンフランシスコ講和条約締結の一か月後の 1952 年 10 月全日本剣道連盟が結成された。これを機に、学校教育で剣道が実施されるように請願し始め、また一般社会での剣道の普及活動が活発に行われるようになった。それにより、1953 年高校以上で剣道が教育課程に組み入れられることが決まり、1954 年全日本撓競技連盟と全日本剣道連盟は合併し、「しない競技」の名前は消滅した。
これまで、「しない競技」に関する研究は、しない競技を剣道の橋渡しとして捉えてきたが、今回筆者は、この「しない競技」が剣道の民主化・スポーツ化という総司令部民間情報教育局（CIE）の要望に応えるものとして生まれたのにもかかわらず、そのまま定着しなかった点に着目した。
現在、全日本剣道連盟のホームページにおいて「剣道は剣道具を着用し竹刀を用いて一対一で打突しあう運動競技種目とみられますが、稽古を続けることによって心身を鍛錬し人間形成を目指す『武道』」であるとその目標を掲げている。そのため筆者は、民主化・スポーツ化し、女性競技者も出てきた「しない競技」が消滅に追いやられたことに、剣道を単なるスポーツ化させまいとした動きがあったのではないかいう問題意識がある。したがって剣道が禁止になった 1945 年から「しない競技」誕生を経て、全日本剣道連盟が設立し、1953 年に学校で剣道が実施されるまでの期間を「戦後初期」とし、この戦後初期において剣道としない競技をとりまく歴史、文部省・総司令部民間情報教育局（CIE）・全日本剣道連盟・全日本撓競技連盟の関係性や方針を踏まえ、戦後初期のしない競技の消滅した背景を明らかにし、しない競技が残した現在の剣道観を明確にすることを本論文の目的にし、論じていく。
【参考文献】
全日本剣道連盟『剣道の歴史』、全日本剣道連盟、2003 年。
小西康裕『剣道とシナイ競技』、川津書店、1953 年。
井上俊『武道の誕生』、吉川弘文館、2004 年。
中村民雄『剣道事典―技術と文化の歴史―』、島津書房、1994 年。
キーワード：剣道、しない競技、スポーツ化、民主化、全日本剣道連盟

発表者氏名：北野初季
所属ゼミ：佐々木一惠ゼミ
タイトル：ブリッジング機能から見る地域活性化と多文化共生 ～栃木県佐野市のハラルフードをコンテンツとする事例から～
発表概要：
現在世界ではグローバル化が進行し、日本においてもその影響は多岐に及んでいる。訪日観光客は年々増加し、2020 年の東京オリンピック開催の影響から、その数は益々増えると見込まれている。中でも、ムスリムと呼ばれるイスラム教徒の観光客数が増えていることから、彼らが食すことが出来るハラルフードが近年注目を集めている。
これまで、ハラルフードに関する研究は、ハラル認証

に焦点を当てた研究が主であった。そこで発表者は、食文化の商品化［池田和子 2012］の理論を用いて、ハラルフードが日本で浸透し始めている現状を分析し、そのハラルフードがどういった展開をされているのかについて、栃木県佐野市でフィールドワークを行った。佐野市では市全体でハラルフードに積極的に取り組んでいる。今回の結果から、その取り組みの中で日本人とムスリムの間で、ハラル認証の有無を超えた信頼関係が構築されていることが分かった。

そこで今回発表者は、ソーシャル・イノベーションにおけるブリッジング機能に着目し、ハラル認証を超えた信頼関係がいかにして佐野市で構築されているのかを明らかにすることを試みる。ソーシャル・イノベーションの定義づけは困難であるが、社会的ニーズ・課題への新規の解決策を創造し実行するプロセスのことだとされる。［木村隆之 2015 年］ソーシャル・イノベーションが生じる中で、様々な人材による多種多様な価値観が存在する。そういった多様な価値観を組み合わせる機能をブリッジングと呼び、ブリッジングを果たす人材をブリッジパーソンと呼ぶ。［佐藤和枝、相原憲一 2010 年］フィールドワークの結果から、駅前でラーメン屋を営む五箇大也さんが 10 年ほど前からハラルに取り組み、市役所や在日ムスリムの人々を巻き込み、現在の佐野市全体の活動につながっていることが分かった。また、ハラル一連の取り組みから、佐野市では日本人とムスリムの間で「共生」が生まれていることも読み取ることが出来た。そこで、ハラルフードをコンテンツとしたブリッジングによる新たな多文化共生の形についても分析しようと試みる。

以上から本発表では商品化、ソーシャル・イノベーション、ブリッジングの三視点から、佐野市での地域活性・多文化共生を検証し、佐野市におけるハラルフードの実態を明らかにする。

参考文献

・池田和子「『食文化』の商品化の構築のために」2012 年、観光化学研究
・木村隆之「まちづくり研究及びソーシャル・イノベーション研究の理論的課題に関する一考察」2015 年、経営学論集
・佐藤和枝・相原憲一、姫街道ネットワーク・絆塾「ブリッジパーソン育成事業とソーシャルイノベーション～共感から協創への仕組みづくりー絆塾展開～」2010 年、経営情報学会　全国研究発表大会要旨集

発表者氏名：田島樹里奈
所属ゼミ：森村修ゼミ
タイトル：公権力による〈暴力〉は正当性をもちうるか――北アイルランドにおけるテロ・拷問・安全保障
発表概要：

本発表の狙いは、1970 年代に激化した北アイルランド紛争の際に導入された「裁判なき拘禁制度」（以下、インターンメントと略記）と、それに伴うイギリス政府などの公権力側の対応を倫理的観点から考察することにある。そのさい本発表では、公権力が「安全保障」や「治安回復」を名目としながらも、その目的を達成させるために行使する過剰で不当な力を〈暴力〉として捉える。

それが〈暴力〉であるのは、その行為が人権を一切無視する非倫理的なものであり、犯罪行為と極めて近しいからである。具体的には、当時の北アイルランド首相は、警察に対して「疑わしい行動をする者は射殺してよい」という指令を出していた。この政策は、たとえテロリストらと関わりがあるという証拠がなかったとしても、射殺行為が正当化されるものであった。また公権力側が、特別権限法を根拠に、無実の一般市民（主にカトリック系住民）に暴行を加えたり、特定の拘禁者に対して実験を含めた拷問をしたりしたりもしていた。被拘禁者たちの中には、護送のさいに治安部隊から虐待行為を受けたり、拘禁中に肉体的・精神的苦痛や屈辱を受けたりした者もいた。

そもそも「インターンメント」とは、北アイルランド政府が成立して間もない 1922 年に、IRA（Irish Republican Army）の徹底的な弾圧を図るために導入した「北アイルランド特別権限法」に始まる。特別権限法の導入により、人身保護令は一切停止され、疑わしい者は証拠なしに拘束できるようになった。さらに紛争が激化した 1971 年、北アイルランド政府は、1922 年の特別権限法に基づき、再びインターンメントを導入したのである。人身保護令は停止され、違法な準軍

事組織メンバー（実際の標的はIRA）に属している疑いのある者や彼らの支持者を、証拠や請求なしに逮捕し、無期限に監禁することが出来るようになった。つまり、公権的な判断なしに、自由な個人を無期限に拘禁可能にする仕組みを合法化したのである。本発表では、インターンメントをめぐるさまざまな様相と経緯、そして後に明らかになったイギリス軍による拷問について検討する。

最終的に発表者は、第一に、インターンメントのように、国民の安全保障を名目として合法的に導入された施策が政治的正当性（justification）を確保したとしても、実際には、安全保障の域をはるかに越えた非倫理的な行為を引き起こす可能性があること。それゆえ、この種の国家の〈暴力〉は、倫理学的には決して「善」ではないことを明らかにする。また第二に、本来的には、治安回復や安全保障を目的とした予防的な政策も、場合によっては先制的な攻撃に陥りやすく、無実の市民のうちに多くの被害者を生み出す可能性があること。それゆえ結果的には、国家の〈暴力〉は、倫理学的な考察抜きでは、法的な正義からも逸脱していく危険性があることを明らかにする。

発表者氏名：YAN WANQING（エンエンセイ）

タイトル：中国の都市部における女子大学生の就職意識の影響要因に関する

発表概要：

現在、中国では大学生の就職意識が社会の注目を集め、大きな研究課題として取り上げられている。大学生の就職意識が問題とされているのは、その就職問題との関連からであった。近年の中国における大学生の就職状況の厳しさは、「卒業イコール失業」といったキャンパス内で交わされるジョークに鮮明に表われている。（高　2014）。

中国の全国的な女性組織である全国婦女連合会が北京や上海の女子大学生や院生を対象に 2009 年に実施した調査によると、就職活動に臨んだ 9 割以上の女子学生が、いわれのない性差別を感じたという。半数近くが就職活動中、「常に」、あるいは「時々」、女性に対する偏見を感じたと答え、また、「女性は男性より就職で不利」と答えた者は 4 割に上ったことがわかった。女子学生就職難の現象は、より顕在化してきたといえる。主因は市場合理性の追求により、結婚出産で採算の取れない女性に対し、労働力市場からの閉め出しが行われたことにあるが、高等教育と産業構造の発展の不均衡も指摘されている。

2015 年 10 月 29 日に閉幕した中央委員会第 5 回全体会議（5 中全会）により、中国ですでに 40 年近く続いた一人っ子政策の廃止が決定された。すべての夫婦に第二子の出産が認められるようになった。その前、2012 年 4 月 18 日施行された(国務院令第 619 号)規定は、近年の労働環境の変化に対応し、女性労働者は妊娠中の労働時間及び産前産後の休暇等に重点が置かれ、産前産後の休暇が 98 日に延長された。女性労働者保護特別規定は元来女性の利益のために作られたが、一人っ子政策の廃止を加え、就職面で逆効果を生じうる。政策廃止前、『女子大生・OL の職業意識――日中比較』（川久保 2004）のように、中国女子大生の職業意識に関するいくつかの要因に焦点を当てた研究がこれまで行われてきたが、政策廃止後、女子大生の就職意識について、生育政策の変化などのような影響要因を加えて改めて研究する必要があると考える。

本研究の目的としては、中国都市部における女子大学生を対象とし、現在彼女たちは就職に対してどのような就職意識を持っているのかを解明し。また、政策が如何に女子大生の就職意識に影響を与えるのかを明らかにすることである。

発表者氏名：オウマキウン

タイトル：観光開発における「石門坎文化」―地域ブランドの生成過程の考察―

発表概要：

1904 年以降、イギリス人宣教師の Samuel Pollard は西南中国に位置する石門坎において、当時社会の最下層にいた苗族を中心に布教活動を行い、学校や病院を建て、多くの大学生や学位取得者を輩出するなど社会発展に大きな功績を残した。その時期の石門坎は、西南中国における教育水準の最も高い地域とも評された。しかし、国内外の戦争、政権の交替、さらに自

然災害の頻発により石門坎の環境は激変し、以降百年間の石門坎は再び貧困状態に陥った。そのような中、近年、石門坎の外国人への開放が進められ、政府主導の「石門坎文化旅行」を題する観光開発には、石門坎が「西南苗疆文化の聖地・東西文化融合の伝奇」だと宣伝されている。そこでは、「石門坎文化」は、「石門坎とそのまわりの滇東北次方言を使う苗族の伝統文化に根差しながらも、特殊な歴史背景におけるキリスト教文化との邂逅であるとともに、中国の伝統文化を吸収して形成された、総合的かつ複雑な区域民族文化だ」と定義され、地域ブランドとして打ち出だされた。

本研究では、文献研究と現地調査を通して、「石門坎文化」の形成過程と実態について検証した。

調査の結果、石門坎の多くの文化財はすでに破壊され、民族風習や苗族言語の消失も懸念されていることがわかった。さらに、「文化と歴史」の持ち主と見られる苗族は実際のところ、石門坎所在地の栄和村の人口の 15%にすぎず、石門坎の観光開発は、有名無実化した、いわば過去の栄光を文化資源としていた。

また、開発の対象とされる「石門坎文化」は、主に学者・聖地巡礼者によって構成された来訪者による定義や解釈に基づいていることがわかった。その上で、脱宗教化、エスニック・シンボルに重点を移し、定義の膨大化、というような一連の取捨選択が動いていたのである。

以上の調査結果に基づき、二つの考察が得られる。第一に、石門坎の歴史や文化を地域ブランドにする過程は、文化の客体化と並行し、一連の取捨選択による「新しい文化」の生成過程であるということである。第二に、来訪者が、石門坎の文化を定義するとともに、現地民に認められた「石門坎文化の代弁者」にもなるということである。そのため、石門坎の来訪者と現地民の関係性は、文化客体論における「ゲスト」と「ホスト」の不均衡な力関係に関する論述に当てはまらないと考える。

石門坎における観光開発の狙いは、石門坎文化を地域ブランドにすることで、もはや宗教・教育の聖地でなくなった石門坎を観光地として、再度機能させることにある。一方、華やかかりし頃の石門坎を回顧し、紹介する書物や論文によって、「石門坎文化」のイメージだけが独り歩きし、実態としての石門坎をはるかに超えて喧伝されているとも言える。

本研究の結果を踏まえ、これからは空洞化した地域ブランドがいかに現地社会に影響を与えるか、という課題とその仮説を取り上げ、今後の研究方向を示したい。

発表者氏名：田邊美樹

所属ゼミ：浅川希洋志ゼミ

タイトル：日本のリトミック教育成立の過程に関する一考察 ―ダルクローズと小林宗作の音楽経験に視る教育の目的―

発表概要：

リトミックは、スイスの作曲家、音楽教育家エミール・ジャック＝ダルクローズ（1865-1950 以下ダルクローズ）によって、19 世紀末から 20 世紀にかけて創案された一つの音楽教育のメソッドである。一方、小林宗作(1893-1963 以下小林)は、ダルクローズから直接学び、日本で初めてリトミックを教育界に導入しようとした人物である。小林はリトミックに関心を示した眞篠俊雄（1893-1979）の推薦によって成城幼稚園に招かれ、それにより、リトミックは幼児教育界に導入され、普及することとなった。このような状況から、日本ではリトミックといえば幼児教育の方法であると理解される傾向が強い。現在の日本では人々のリトミックに対する関心と知名度は広がりをみせており、幼児教育の枠を超えた様々な形態のリトミックの実践も見られる。しかし、その実態については、幼児教育と音楽教育が混在し、教育者、被教育者ともによくわからないまま実践されているという現状が指摘されている。本研究は、そのような問題意識を緩和し今後の発展の端緒となるべく日本のリトミック教育の成立の過程を明らかにすることを目的としている。ヨーロッパと日本でともに教育に生涯携わった二人であるが、ダルクローズが音楽教育界でリトミックを研究しつづけた一方で、小林は幼児教育界に転身した。西洋と日本における文化的な差異はどのようなものか、それはダルクローズと小林の教育にどのような影響を与えたのか、文化を背景とした教育目的を考察する。今回の発表では、ダルクローズと小林のリトミックに関わる音楽経験の差異に加え、ヨーロッパと日本における音楽の始原を検証し異なった音楽文化という視点から、リトミックの目的にどう反映されたかについて考察する。

発表者氏名：楊宇

所属ゼミ：なし

タイトル：日中大学生の恋愛・結婚意識と文化的自己観の関連性をめぐり ――法政大学と上海外国語の学生を対象に

発表概要：

研究背景

1.未婚化と晩婚化

日本：未婚率が上昇。より多くの女性が高い年齢まで未婚にとどまるようになっている。(厚生労働白書、平成 25 年)

中国：晩婚化が進み、独身の比率が増加している。男性が考える結婚の適齢は２８歳で、女性が 27 歳である。（蔡、2010）

2. 結婚難

山田昌弘はその著書「婚活現象の社会学」（2010）の中で、現代の日本でも中国でも、恋愛と結婚に様々なものを求めすぎるようになったため、結婚難が始まったと指摘している。

そこで結婚意思低下の現状をもたらした原因はどこにあるのかという問題を検討するために、若者の恋愛と結婚に対する価値観あるいは意識を把握することは重要である。

研究目的

本研究では、アンケートとインタビュー調査による日中の大学生の比較研究を通じて、恋愛観と結婚観に関わる心理的事象及び文化的差異について検証する。またその差異について要因を文化的自己観から解析する。

研究意義

１．先行研究から見ると，社会学の視点で日本と中国人の恋愛と結婚観を比較する研究があるが、心理学視点からの比較研究がない。

２．恋愛研究は単一の角度ではなく，恋愛と関連する要因を探る方向に向かっているため，文化は要因として恋愛との関連性に関する研究が少ない。

３．両国の大学生の意識の違いを参考し、今後両国の恋愛と結婚問題を検討する時に生かしていきたい。

研究課題

1. 日本人学生と中国人学生の恋愛観と結婚観はどのようなものか。

仮説 1：日本の大学生は「大切・必要」、「成長」、「相互関係」といった比較的ポジティヴな恋愛観、「安定性」と「将来性」を求めるポジティヴな結婚観を持つ傾向が強い。中国人大学生は「付加価値」という恋愛観と「自由の喪失」というネガティヴな結婚観を持つ傾向が強い。

2. 日本人学生と中国人学生の文化的自己観はどのようなものか。

仮説 2：中国の大学生は日本の大学生より独立自己観を持つ傾向が強い。

3. 文化的自己観と恋愛観・結婚観にどのような関連があるか。

仮説 3：相互協調性の強い人は、「大切・必要」、「成長」、「相互関係」といった恋愛観と「安定性」、「将来性」を求める結婚観が強い。独立性の強い人は「付加価値」、「自由の喪失」といった恋愛観と結婚観が強い。

4. 日本人学生と中国人学生結婚意思はどのようなものか

仮説４：独立性高い中国の大学生は日本の大学生より結婚意思が低い。

5. 国籍、文化的自己観と恋愛・結婚観の仮説が一致するのか

研究方法

（1）アンケート調査を実施する。

１．調査対象者: 法政大学学生、上海各大学学生

２．質問紙の構成

相互独立的—相互協調的自己観の測定

恋愛イメージの測定

結婚観の測定

（2）アンケート調査対象者から協力者を募り、インタビュー調査を実施する。

発表者氏名：オウ ユキ

所属ゼミ：なし

タイトル：戦後日本映画における食事シーンについて

発表概要：

・背景と目的

食事場面は映画によく見られている。映画とは、聴覚と視覚と繋がっている。と同時に、食事という行為も聴覚的、視覚的でありながら、他にも匂い、味といった映画で感覚できないものを意味している。

映画における食事シーンの機能といえば、食卓はよく、映画の装置の一つとして、人々の集まりや会話の場などになっている。その他、普通どおりの食事ができない人々の物語は、社会問題の鏡であるとも言える。

そのため、本発表では、いくつかの日本映画を取り上げ、「食事がしたい（必要がある、用意してある）のに、できない」、つまり「食事の不在」という点からそれぞれの映画における食事シーン、特に食を通して見えないものの可視化という視角から分析し、食事シーンの色々な機能、それぞれの食卓という装置の効果を明らかにする。

・研究方法

研究方法については、単数のショットでは、食事空間の構図、音声の分析を行いたい。複数のショットについては、主にグラフィックの類似（graphic parallelism）について分析する。

・発表計画

１　映画『泥の河』、『横道世之介』を通して、食事シーンは「人を集まる機能」、「前後のシーンのリンクとしての機能」を持っていることと食べ物は物語に参加し、役割として活用されているという傾向を簡単に紹介する。

２　『東京物語』と『砂の器』における食欲、
『楢山節考』や『誰も知らない』といった飢餓に関する話、
『Shall we dance?』における妻の手料理の表象、
『花とアリス』における想像の食事、
以上五つの部分から、食事の「見えないものを見えるようにする」機能を明らかにする。

３　食べ物は物語に参加し、役割として活用されているという傾向がなくても、食事の「不在」は食事の喚起を機能しており、50 年代からすでに映画の主題と繋がっており、社会問題の鏡として、関心を集めることにも役割を果たしていることがわかる。

発表者氏名：茂木玖美
所属ゼミ：川村湊ゼミ
タイトル：吉行淳之介『暗室』における 3 人の女性と空間 ―「電話」から見える主人公との関係性―
発表概要：

『暗室』(1969 年)は吉行淳之介(1924～1994)の代表的な長篇小説のうちのひとつである。作者である吉行淳之介は「性」の作家と呼ばれるほど、彼の代表作といわれるものにはいずれも「性」が主要テーマとして扱われている。

本作の主人公の中田修一は中年の独身作家であり、多加子、夏枝、マキの 3 人の女性と肉体関係をもっている。しかし中田は相手と精神的なつながりや結婚などの深い関係になることをさけており、そのことから性行為に及ぶ際には自宅や相手の部屋ではなく、必ず旅館などを使用している。しかし物語が展開するうちに多加子は結婚、マキは妊娠しニューヨークへと旅立ち、二人は中田のもとから離れてしまう。残ったのは夏枝だけとなってしまったせいもあってか、中田は夏枝の軀にだんだん溺れるようになり、当初は避けていた夏枝の部屋で関係を維持するようになる。だがそれでも夏枝の家に居つくことはなく、睡眠などは自宅でとり、また夏枝を呼び寄せることもしない。最後までいかに部屋や旅館などが中田のなかでは重要な意味をもっているのかうかがえる。

このように空間が登場人物にとって大きな役割を果たしていることは、中田に限ったことではない。よって本発表においては、多加子、夏枝、マキの身を置く空間(場所)が作中でどのような意味や作用をするのかをテクストにそって分析し考察する。また、空間との関係性を論じるにあたって中田や彼女らが互いにかけあう「電話」についても着目したい。電話というものは人と人を繋ぐものであるが、それは同時に全く別の空間を繋ぐことでもあると考える。そして電話によって「繋ぐ」というのは、当然ながらどのような意図をもって、どちらから働きかけるのかによっても、その意味や関係性は変化するだろう。つまり、まず「電話」という媒介によって登場人物同士が繋がることで、その時点での関係性を把握できる。またそこに彼らが配置される「空間」という意味作用を加えることによってより深く、立体的に物語の構造や「性」に関する描写などを理解できるようになると考える。

本作は主人公中田と多加子、夏枝、マキ、それぞれとの関係を中心に展開し、49 パートに細かく分けられている。そのなかには物語に関連付けがたいような挿話がいくつか存在し、物語としての構成を難解にさせている。よって本発表においてはそれら挿話については言及せず、主人公の自宅、居酒屋、バーの「ロコ」、旅館など直接彼らに関係する場所に限定して分析および考察を述べたい。

なお研究全体の構想としては本作を主軸に作品論を展開しつつ、吉行のこれまでの評価を整理することで、吉行作品にとっての「性」とは何かを再考する。また作品の舞台として都会(都市)が設定されることがほとんどであるため、空間としての「都会」が「性」とどのような関係にあり、かつ影響を与えているのか

を考察し、近年進展の少ない吉行作品研究への一助としたい。

発表者氏名：石渡けやき
所属ゼミ：今泉裕美子ゼミ
タイトル：メディアがつくる日中関係 ～反日・反中から相互理解へ～
発表概要：

本報告では、中国の対日意識の形成に日中両国での新聞やインターネット、テレビ番組などによる報道・広報活動がどのような影響を持つのかを明らかにすると同時に、中国のいわゆる「反日」感情形成の要因を考える。理由は日中の相互理解をすすめていく上で、メディアの報道が両国のイメージ形成に大きな影響を与えていると考え、そこでうまれる誤解を認識することでメディアに翻弄されない相互理解に近づくことができると考えたからである。

日中間の緊張が高まった近年の主な出来事の一つに、2005 年 4 月北京や上海など中国各地で起こった数万人規模の反日デモが挙げられる。主な目的は日本の国連安保常任理事国入り反対の訴えと、「新しい歴史教科書をつくる会」が編纂した扶桑社版中学歴史・公民教科書が検定を通過したことに対する抗議であった。日本大使館への投石や、日本製品の不買運動など抗議活動が相次いだ。この時の相互の世論の悪化は、両国政府の対中・対日政策にも悪影響を及ぼす恐れがあった。そこで報告者は、中国における対日世論の形成に中国メディアの報道がどのような影響を与えているのかに着目した、次の論文をもとに検討をすすめる。劉志明「第 6 章 日中コミュニケーションギャップと情報発信」、高井潔司、日中コミュニケーション研究会編著『日中相互理解のための中国ナショナリズムとメディア分析』p.106-p.131（明石書店、2005 年）によると、このような状況を招いた主な原因は歴史問題を始めとする両国の政治対立にあるが、メディアの無責任な報道姿勢が日中コミュニケーションギャップを拡大させた側面もあると述べられている。

そこで本報告では中国における新聞の対日報道の分析を通じて、各新聞社の特徴やインターネット上の情報と比較、考察する。言論統制下の中国では、新聞は党の機関紙としての役割をもつ「人民日報」に代表されるように政府の管理を受けている。一方で市場経済が発展しうまれた「大衆紙」は、商業主義的傾向が強く扇動的な内容が多い傾向にある。こういった性格の違う情報を民衆が享受し、それを自らの意見として発信する場がインターネットである。インターネット上の情報は、一方で政府の管理を受け、他方でセンセーショナリズムというメディア自体が抱える制約を受けながら大衆世論を形成している。

今後は、日本メディアの報道が「反日」中国というステレオタイプ化された姿をどのように報道し、日本の対中意識悪化に影響し、それが中国人の次なる「反日」運動へとつながっていくのかを明らかにしたい。このような“相互理解”が長い間続いてきたことが、今日の日中関係をつくり上げている一つの要因であると報告者は考える。本報告では上述のような日中間の「反日」「反中」たる理解が生み出されるプロセスを明らかにした上で、相互理解を深め友好な関係を築いていくためにはどうすればよいかについて考察する。

発表者氏名：寺島裕香
所属ゼミ：佐々木一惠ゼミ
タイトル：ブションから見るリヨンの地域アイデンティティ
発表概要：

フランスは様々な人種・民族・宗教が存在する国である。そのためフランスにおけるアイデンティティは主に、政治や移民問題、宗教、言語などといった面で研究されることが多い。清水祐美子がフランス・フランドル地方における民謡収集とアイデンティティの形成に関する研究の中で指摘しているように、19 世紀より、フランスでは民謡や昔話や諺などの民衆の口承を保存することを通じて、地域的な文化アイデンティティを形成していたことが知られている。一方、食に関してはフランスにおける地域アイデンティティとの関係で論じられることはあまり多くない。本論文では食がどのように地域アイデンティティに関わるのかを、フランスの中心であるパリではなく、フランス南東部に位置するリヨンを中心として論を進めていく。

2010 年にフランス人の食に関する「美食術」がユネスコの世界無形文化遺産に登録された。近年のグローバル化している「ナショナル」な「フランス」料理に対して、ブションは「ローカル」なリヨンの郷土料理を提供している。そのため、リヨンの伝統的な飲食店で居酒屋のような雰囲気を持つローカルな「ブション（bouchon）」を取り上げ、パリを中心とする中央の「フランス」料理との比較から、リヨンの食から見る地域アイデンティティを紐解いていく。

ブションとは 18 世紀から 19 世紀ごろにうまれたとされるリヨンの郷土料理を提供する庶民的な飲食店のことを指す。ブションは、リヨンの母と言われるブルジョワ家庭に仕えていた女性料理人たちによって手ごろな価格でボリュームのあるブルジョワ料理と家庭料理を融合させた質の高い料理で職人たちに広く親しまれてきた。

本論文では、ブションを定義する「Authentique bouchon Lyonnais」と「Bouchon Lyonnais」という 2 つのラベルの真正性と、リヨンに住む人々のブションへのまなざしに着目する。このラベルはそれぞれ 1997 年と 2012 年に出来たラベルであり、後者の新しいラベルはリヨン商工会議所とリヨン観光局が設立した協会のものである。4 年に 1 度の認定審査で内装、食材、ワインの産地など 180 もの項目をすべて通過した店にしか与えられず、現在 22 件が登録されている。このラベルによってブションが「本物」となり得るが、実際にリヨンに住む人々がこのラベルを意識しているのかなど、筆者が 2016 年 3 月～2016 年 4 月にかけて実施したアンケート結果からブションを通した地域アイデンティティのあり方を検討する。

【参考文献】

・廣田功『19 世紀におけるブルジョワ料理の展開—ブルジョワ料理から国民料理へ—』Revue japonaise de didavtique du français, vol.1,n.2,études francophones-juillet 2006
・八木尚子『フランス料理と批評の歴史　レストランの誕生から現在まで』、中央公論新社、2010 年
・マグロンヌ・トゥーサン＝サマ　太田佐絵子訳『フランス料理の歴史』、株式会社原書房、2011 年
・岩崎正弥・高野孝子『場の教育「土地に根ざす学び」の水脈』社団法人農山漁村文化協会、2010 年

発表氏名：高柳俊男教授
所属ゼミ：なし
タイトル：5 年目を迎えた「SJ 国内研修」 —その成果と課題
発表概要：

国際文化学部では、SA（Study Abroad）と並ぶもう一つの校外研修として、SJ（Study Japan）国内研修の制度を設けている。これは、外国人留学生入試で入学した留学生を主対象（必修）とし、その他の希望者も受け入れて、夏休み中の 9 月上～中旬に 8 日程度で実施している。2010 年度と 11 年度、3 泊 4 日のプレ研修を通して経験を積み、翌 2012 年度から正式実施して、今年で 5 年目を迎えた。

この報告では、5 年間における SJ 国内研修について、実施責任者の立場から振り返り、その成果と課題について考えたい。その作業を通して、学部内でもまだ知名度の低い SJ 国内研修について広く知っていただく場となることが期待される。

SJ 国内研修の最大の目的は、日本をふだん勉学の場とする東京からだけではなく、歴史・風土・自然などを異にする地方の視点からも考えうる目を養うことで、研修地は長野県南部の飯田・下伊那地方である。

過去 5 年間の成果としては、日本を多面的・重層的に理解するという目的は、法政での事前学習授業、現地でのレクチャー受講および見学・交流などを通じて、一応達成できていることが挙げられるであろう。飯田・下伊那地方には、内陸部にかかわらずさまざまな外国とのつながりがあり、また蓄積された文化への強いこだわりもあって、地方のもつ潜在力を感得することができた。また、近年は、単なる座学よりも、高校生や若者をはじめとする地元民（都会からの移住者を含む）との交流や体験学習に、より重点を置くプログラムに改編している。

一方で、この SJ 国内研修には当初、参加する留学生と同数の一般学生を同行させて、現地研修を通して外国人と日本人が切磋琢磨し、ともに問題解決に当たるという第二の目的を設定した。ただし、参加費用の問題もあり、参加した一般学生は過去 5 年間で皆無で、この第二

の目標は未達成である。

法政大学では、スーパーグローバル大学を目指して、今後留学生が急速に拡大していくことが予想される。それは、「異文化理解」や「国際社会人の養成」を掲げ、基本的に全学生が海外に留学に行くことを謳っておきながら、留学生入試の導入が大幅に遅れた国際文化学部にとっても同様であろう。そうした状況の中、SJ 国内研修もその果たすべき重要な役割を自覚しつつ、さらなる改善を進めていくことが求められる。報告では、その点についても言及したい。

発表者氏名：崔眞僖（チェ　ジンヒ）

所属ゼミ：佐々木一惠ゼミ

タイトル：現代の高麗人における宗教の多様化に見る改宗問題

発表概要：

高麗人とは朝鮮半島の政治的動乱や経済困難を逃れるためにロシア極東に移住し、後の 1937 年にスパイ疑惑によりスターリンの政策によってロシアの極東から中央アジアへ強制移住させられた歴史を持つ朝鮮民族とその子孫のことである。高麗人の多くは現在ロシア、ウズベキスタン、カザフスタンなどの CIS 諸国に居住している。2010 年度のロシアの国勢調査によるとロシアには朝鮮民族は 153,156 人いるとされ、ロシア在住の朝鮮民族の大半は高麗人である。

高麗人の強制移住に関しては、グラスノスチまで公開されることはなかった。近年、高麗人に関する情報が公開され文献も出版されているが、そのほとんどが強制移住や言語についてである。筆者はこれまで研究されてこなかった高麗人の宗教に着目し、現在、高麗人がなぜ改宗をし、改宗によって起こる問題について明らかにしていくことを試みる。

現在、高麗人が多く居住する国の一つであるカザフスタンの国勢調査の民族別信仰宗教によると、高麗人が現在信仰しているとされる宗教はキリスト教、仏教、イスラーム教などとなっている。しかし、高麗人が朝鮮半島にいた時代はほとんどの人が仏教あるいは儒教を信仰していた。つまり、相当多くの高麗人が強制移住も含めた移住により改宗を行ったのである。筆者は、今日の高麗人の間で信仰する宗教が多様化している背景と理由を明らかにするため、2015 年から 2016 年にかけて 10 代から 40 代の CIS 諸国に在住する高麗人 287 人を対象にアンケート調査を行った。さらに、サンクトペテルブルクにある宗教施設にも足を運びフィールド調査を行った。

アンケート調査結果、高麗人が現在信仰している宗教で最も多かったのがロシア正教、そして次にプロテスタントであった。また、無神論者ではないが特定の信仰宗教を持たない高麗人も多く存在した改宗の理由には歴史的要因や家族の影響などもあったが、その他の外的要因も多くみられた。

本発表では、高麗人の歴史背景や居住地などについて概略を説明したのち筆者が実施したアンケート調査をもとに、高麗人の改宗の原因と理由、改宗によって起こる問題を検証する。

【参考文献】

・鄭棟柱、高賛侑(訳)『カレイスキー―旧ソ連の高麗人』、東方出版、1998 年

・ミレ未来編集部、『在外朝鮮民族を考える―アメリカ・旧ソ連・中国・日本からの報告』、東方出版、1994 年

・山下亮、北海道大学大学院文学研究科研究論集 / 北海道大学大学院文学研究科 編『統一と同胞――ウズベキスタンの「高麗人」に関するフィールドノートから――』、北海道大学大学院文学研究科、2001 年

・柳田賢二、『タシケント郊外旧コルホーズ「ポリトオッジェル」在住高麗人 2 世の朝鮮語・ ロシア語混用コードについて』、2005 年

発表者氏名：下江航平

所属ゼミ：佐々木一惠ゼミ

タイトル：新たなソーシャルキャピタルの萌芽 ～都市型芸術祭の事例から～

発表概要：

「街作り」「都市再生」、こうした概念は現代の日本の国土政策において非常に重要視されつつある。特に戦後の「国土の均衡ある発展」の名のもと行われた国による地方介入が結果的に地方の中央依存に大きく靡いたことを受け、現代では政治、経済的ではない第三の要因を元に行う「都市再生」というワードが着目

されているのである。第三の要因としては地方の伝統芸能、伝統工芸などローカルアイデンティティとしての文化的側面が多く取り上げられるが、こうした取り組みは一時性、突発性が高く、また文化という無形の概念を取り扱うため、継続性、効果性に欠けるという難点が挙げられる。そこで本発表では都市再生において創造される資本の一例として社会関係資本、ソーシャルキャピタルに焦点を置き、このソーシャルキャピタルの循環性という傾向が、上記で述べた難点を解決する手立てとなるという仮説を立て、その実態を都市再生事業の一例である都市型芸術祭の中で考察していくことを目的とする。

ソーシャルキャピタルの第一人者、米ハーバード大学の政治学者ロバート・パットナムの言葉を借りるとすればソーシャルキャピタルには「社会ネットワーク活動」「相互信頼」「互酬性の規範」（今村、園田、金子,2010）といった特徴があり、簡潔に表現するとコミュニティ間におけるメンバーの行動によって様々な結びつきが形成され、相互信頼と自発的な協力関係が生まれやすくなるというコミュニティの共有資源と言い換えられる。ここで一つ着目したいのがこのソーシャルキャピタルという概念は、パットナムによれば異質な人や組織間を橋渡しする中で形成される「橋渡し型ソーシャルキャピタル」、そして同質的な結びつきの中で形成される「結束型ソーシャルキャピタル」の二つの類型に分類が出来るということである。二つの詳しい違いについては本論の中で述べていくが、既存研究の多くはこの二つのソーシャルキャピタルについて個々に着目されることが多かった。　　そこで本発表ではこの二つの類型のソーシャルキャピタルの相互性、ひいては循環性に着目する。都市再生事業かつ三年に一度という循環性の特徴を持つ都市型芸術祭「トリエンナーレ」、特にあいちトリエンナーレ 2016 内における長者町会場を検証のフィールドとし、主催者側、地域住民側双方にインタビューを試み、ソーシャルキャピタルの循環型構築の特徴と効果性を明らかにしていく。

参考文献

・あいちトリエンナーレ実行委員会　「あいちトリエンナーレ 2016 虹のキャラヴァンサライ　創造する人間の旅」平凡社　2016 年
・吉田隆之著　「トリエンナーレはなにをめざすのか　都市型芸術祭の意義と展望」水曜社　2015 年
・今村晴彦、園田紫乃、金子郁容著　「コミュニティのちから、遠慮がちなソーシャルキャピタルの発見」慶応義塾大学出版会　2010 年
・森司監修　坂本有理　大内伸輔　芦部玲奈編著　「アートプロジェクトのつくりかた　｛つながり｝を｛つづける｝ためのことば」　フィルムアート社　2015 年
・南条史生著　「美術から都市へ　インディペンデント・キュレーター15 年の軌跡」鹿島出版会　1997 年
・山崎茂雄著　「文化による都市再生学　創造都市の文化を考える」アスカ文化出版会　2009 年

発表者氏名：杉嵜皓
所属ゼミ：佐々木一惠ゼミ
タイトル：エシカル消費による現代日本の食生活意識
～菜食嗜好的消費行動の事例から～
発表概要：

近現代の日本の食生活には様々な変化が起こってきた。こうした変化の背景には、それを取り巻く社会環境の変化が存在した。明治期日本では、日本人の肉体改良を目的とした肉食が推奨され（真嶋 2002）、戦後初期の 1950 年代では厚生省が《バランス良く》食べる《近代的な食の常識》（角田 2011）を唱道した。そして、現代日本では五穀や農産物を主とした食生活を送るマクロビオティックをはじめとする、菜食嗜好的食生活といった新たな食生活の意識が起きつつある。本発表は日本の多様な食生活推奨の変遷とその背景を分析し、現代の菜食嗜好的食生活に対する意識を「エシカル消費」の理念を用い、考察することを目的とする。エシカル消費とは「環境保全や社会貢献」という意味を持つ言葉として使用され、倫理的な購買活動を行うことである（葭内　2013）。この消費行動はファッション、家具等様々な分野で注目されているが、本発表ではこの中で「菜食行動」を具体例として取り上げ、現代日本で、広がりを見せている菜食嗜好的食生活の中で人々が意識している点を検討していく。

先行研究では、食生活の中に環境と社会への配慮が含まれる消費行動が存在することが指摘されている。英国雑誌「エシカル・コンシューマー」では、環境に意識した食品販売を喧伝しているリバーフォード・オー

ガニック・ファームを英国企業で「最もエシカルな企業」トップ 10 の中に入れている。(三輪 2015) また、材料生産の中で、環境保全を目的とした栽培方法として、自然農法が農学の分野で研究されている。(藤山、藤田　2008) そこで現代日本の中で、菜食嗜好的食生活を推奨、提供している人はどのような意識を持っているのかを調査するために、インタビューを実施した。原宿の「菜食専門店 MOMINOKIHOUSE」オーナー兼シェフの山田英知郎氏へのインタビューから、環境や健康に配慮した食生活を求める人が増加しており、また料理教室を通し、家族間でその意識が芽生えつつあることが分かってきた。

このインタビュー結果と資料分析を用い、本発表では、日本における菜食嗜好的食生活の立ち位置を考察する。そして、現代において菜食嗜好的食生活をしている人の意識はどこへ向かっているのかを検討していく。

【参考文献】

真嶋亜有（2002）　「肉食という近代　―明治期日本における食肉軍事需要と肉食観の特徴」国際基督教大学アジア研究所

角田尚子（2011）「ベジタリアンを取り巻く日本的状況 ―食育思想と近親者からの干渉―」『佛教大学大学院紀要社会学研究科篇』第 39 号

葭内ありさ（2013）「消費者教育におけるエシカル・ファッションの有用性」『日本教育学会大會研究発表要項』72,148-149

三輪昭子（2015）「英国エシカル企業に見る連帯経済の要素」『国研紀要 145』93-116

藤山静雄　藤田正雄（2008）「生態学から見た有機農業」『信州大学環境科学年報』30 号

発表者氏名：田所莉歩

所属ゼミ：佐々木一惠ゼミ

タイトル：国民的ローカル映画としてのインド映画〜インド映画『ボンベイ』から考察して〜

発表概要：

今日、映画は世界で年 4000 本ほど制作されているが、そのおよそ４分の１が実は「インド映画」である。その数は世界の映画ブランド「ハリウッド」の年間映画制作数の優に５倍にものぼる〔杉本良男　2002〕。インドにおいて映画が大衆娯楽のなかでも大きな存在であり、歌と踊りがふんだんに盛り込まれた娯楽性の高い映画が数多く制作されている。本発表では、インド映画の歌と踊りを含む娯楽映画の形式がどのようにしてうまれ、現在まで保たれているのかの背景を考察し、国民的ローカル映画の一つであることに着目する。

国民的ローカル映画とは、国民的な規模で熱狂的に支持され、繰り返し製作されるために一つのフィルム・ジャンルにまでなるものである。こうした国民的ローカル映画に見られる一般的特徴として、観客が国内に限定されていること、多くは決まりきった筋立て物語であること、などが挙げられている〔四方田犬彦 2003〕。

今回発表者は、インドで起きた歴史的な事件であるアヨーディヤー事件（1992 年）を題材にした『ボンベイ』（1995 年）を取り上げる。アヨーディヤー事件はコミュナリズム問題から起きたヒンドゥー教徒とイスラム教徒における対立であり『ボンベイ』ではその悲惨さが描かれている。また、『ボンベイ』は興行的にも大成功を収めた作品であり〔前川輝光　2007 年〕、その評価として『ボンベイ』がインドの「多様性の統一」という理念の実現の可能性を与える映画であることが多くの文献や映画サイトの口コミで語られている〔青木保　1998 年〕。

そこで、本発表で『ボンベイ』は娯楽映画の形式を保ちつつ悲劇を扱うことに成功した映画の一つであり、それを可能にした作用として、歌と踊り、歴史的事件、ストーリーの融和性にあると仮定し物語構造分析をする。

上記のような観点から、国民的ローカル映画の枠組みの中でのインド映画の構造、また『ボンベイ』で描かれるアヨーディヤー事件の描かれ方を明らかにすることを目的とする。

【参考文献】

・　青木保『世界の片隅で 第 6 回 多様性の統一, 映画「ボンベイ」の伝えるもの』日本経済研究センター会報（807），38-39，1998-09-01

・ 四方田犬彦『アジア映画の大衆的想像力』2003 年、青土社
・ 杉本良男『インド映画の招待状』2002 年、青弓社
・ 前川輝光「マニラトナム『ボンベイ』」『亜細亜大学国際関係紀要』 16(2), 7-40, 2007 年

発表者氏名：浅香健人
所属ゼミ：林志津江ゼミ
タイトル：ミュージックビデオの現在（能動的視聴者と「作品」たらしめているものとは？）
発表概要：

「ミュージックビデオ」（以下 MV と記す）とは、商業音楽の場における楽曲セールス促進のためのプロモーション（宣伝）ビデオである。MV の始まりには諸説あるものの、そのひとつは、1960 年代にビートルズが生放送によるテレビの音楽番組に出演するのを嫌い、曲のイメージに合わせた映像作品をテレビ局に提供したことだと言われている。しかし MV がここまで一般的になった最大の要因は、1980 年代のアメリカ合衆国における音楽専門ケーブルテレビチャンネル MTV(= Music Television)の開局であろう。そして MV を放送するメディアの充実こそが、MV 制作の慣習化をうながしたと思われる。現在ではその MV を提供するメディアが拡大の一途をたどり、テレビにとどまらず、Youtube をはじめとするインターネット動画サイトや twitter や LINE などの SNS を通じても MV の視聴が可能である。現在では人々がテレビの音楽番組や CD 等を通じてではなく、映像をともなう MV を通じて新しい音楽作品に接する機会も少なくないと言える。

本論では､MV に対し二つの観点から考察を試みる。

一つ目は MV が時代の変化とともにどう変化したのかについてである。MV の視聴メディアが動画サイトや SNS などのインターネットメディア上にまで広がったため、一般視聴者が MV 作品を視聴する行為は、テレビの制作者側が選択した作品を視聴するという受動的なものから、自分で MV を選び視聴するという能動的な行為に変化しつつある。であればその結果として、MV 作品の作成側が視聴者に選んでもらうために、視聴者の求めに応じて MV をめぐって何らかの変化が起きたのかどうかを、作品の分析と比較を通して考えてみたい。

もう一つは、MV が個々の楽曲の歌詞や世界観を表現した映像作品であるという見方と、その上で MV が成立するあり方についてである。MV はアーティストの演奏録画映像とは異なり、楽曲の制作と録音を前提にした、音楽と映像が一体となったメディアである。そのような MV において、楽曲やアーティストのイメージはどのように映像として実現され、あるいは歌詞の言葉が映像として表現されるのかといったようなところについて考察を行う。例えば MV には、歌詞の意味を一つの物語として映像で再現したと考えられるものや、歌詞の意味から連想される事物ないし人物が断片的に配置されたような作品もある。ここではいくつかの作品を例に、MV の構造とそこから読み取りうる意味について考察を試みる。

本論では以上の通り、MV が時代による変化を求められたものであるということ述べた上で、MV の作品として成立する在り方について論じる。その二つを踏まえ、現状の MV どのような特性をコンテンツであるのかについて論じる。

発表者氏名：小林早恵
所属ゼミ：曽士才ゼミ
タイトル：地域活性化におけるコンテンツツーリズムの有効性
発表概要：

近年、コンテンツ作品を巡る聖地巡礼型の観光形態が流行している。特に、映画のロケ地巡り（フィルムツーリズム)、アニメの聖地巡礼 (アニメツーリズム) など物語性のある作品に惹きつけられ観光に赴く旅行者が増えている。定住人口が減少しており、交流人口を増やすことが必要とされている現在の日本において、国や自治体、企業などから注目が集まるコンテンツツーリズムの現状と課題を研究し、その有効性と今後の展望を探りたい。

先行研究では主にアニメにおけるコンテンツツーリズムを扱うものが多く、その地域を訪れる人が増えたという点で観光事業としての成功を謳うものが多か

った。確かに、新しい観光資源として注目を集めているコンテンツツーリズムであるが、本当にその土地で効果的な観光事業となるのかという点に関しては、持続性、利益還元率の面で疑問を感じた。
そこで今回、私はコンテンツツーリズムの中でも、アニメツーリズムのモデル地として東京都立川市を、ドラマ、フィルムツーリズムのモデル地として佐賀県を選定した。
東京都立川市は現在、第二の秋葉原と言われるほど、市をあげてアニメ産業を活性化させている。先導しているのは立川商工会議所の環境協会だ。同市の観光協会では数々のアニメとタイアップした商品の販売や『立川×アニメ』のイベントを 2011 年より継続して行っている。立川のアニメツーリズムで注目すべき点は、その作品数の多さである。ここ五年の間でも、立川が登場するアニメは数十種類にまで登る。なぜ立川はこれほどまでに多くのアニメの聖地になったのか。どんなアクターがこの流れを作っているのか。ここまで継続した理由はなにか。観光協会が定期的に行っている連絡協議会やイベントでのフィールドワークを基に、立川とアニメの関係性を考察する。
佐賀県は今年、爆発的にタイからの観光客が増えた。その理由は 1 本のテレビドラマである。オール佐賀ロケで撮られた『STAY』というタイドラマがヒットし、そのロケ地を巡るために多くのタイ人観光客が訪れたという。なぜ佐賀なのか、なぜタイなのか。この動きを主導した佐賀県庁にあるフィルムコミッション、そして実際のロケ地でのインタビュー調査を通じて見えてきたコンテンツツーリズムの仕組みと、経済的な利益率だけでは測れない“地域活性化”の恩恵を考察する。
また、コンテンツツーリズム学会の会長でもある法政大学大学院の増淵教授からも見解を頂き、様々なコンテンツツーリズムの事象に共通する成功要因を探った。

参考文献

岡本健『コンテンツツーリズム研究』福村出版、2015 年
増淵敏之『物語を旅するひとびと―コンテンツツーリズムとは何か』彩流社、2010 年
増淵敏之、溝尾良隆　他『コンテンツツーリズム入門』古今書院、2014 年
参考サイト
コンテンツツーリズム学会 http://contentstourism.com/　（2016 年 11 月 2 日閲覧）
佐賀県フィルムコミッション http://www.saga-fc.jp/（2016 年 11 月 2 日）
立川観光協会『立川×アニメ』http://www.tbt.gr.jp/tachikawa_anime　（2016 年 11 月 2 日閲覧）

発表者氏名：村山晴香
所属ゼミ：松本悟ゼミ
タイトル：初等教育の中退をなくすために―戦前藤沢からの学び―
発表概要：
開発途上国では初等教育の中退率の高さが大きな問題となっている。2014 年時点で、児童が最終学年まで残る割合は日本では 100%であるが、フィリピンでは 76%、カンボジアでは 66%、東部・南部アフリカでは 49%である。今でこそ初等教育の入学者全員が最終学年まで学ぶ日本も、明治から昭和初期にかけては多くの児童が中途退学していた。そこで日本での中退問題改善のプロセスを研究することで、開発途上国での問題改善に向け有用な示唆を導けるのではないかと考えた。
先行研究では日本がこの問題を解決できた理由として、進級試験制度の廃止や政府の財政支援措置など国家規模の制度改革を挙げている。しかしそれらが実際の教育現場にどのような効果をもたらし、中途退学の状況を変えたかなど、現場レベルでのミクロな視点では明らかにされていない。そこで、本研究は明治から昭和初期に中退問題を解決した神奈川県藤沢市に着目し「どのように中退問題は改善されたか」を小学校の沿革史や教員の日誌などの一次史料から研究した。結論は二点である。
　第一に地域住民や教師による寄付が貧困児童の中途退学未然防止に貢献した点である。有志者が資金を出し合い、現金の寄付や教科書、文房具等の学用品を

安価で提供するなど、経済的支援を行った。当時の史料には「保護ニヨリ義務教育セルモノ」が 40 人いた（広田 1980）と記されていることからも、地元有志者や教員による寄付が児童の継続的な就学を支えたと考えられる。

第二に、中途退学の一要因であった教育に対する「父兄の無理解」を克服するため、教師や役場の職員が家庭訪問や講演を行い、義務教育の重要性を諭すと同時に、中途退学した児童が復学しやすい環境づくりに努めた点である。当時の教員の日誌には、退学児童の家庭への訪問について「訪問の労と時間を惜しむべからず」（ibid.）と記され、教職員らが児童の中途退学に問題意識を持ち、問題改善のために尽力していたことがわかった。さらに、児童の復学を促すため、遠足や祭典などの際に退学児童を招くなどし、退学児童と同級生との関係、教員との信頼関係の維持に努めた。

中途退学問題の改善には、制度や財政面の対策だけでなく教育現場に携わる人々の理解や努力が不可欠である。開発途上国での中途退学問題改善に向け、教師や保護者が一体となって行う地域規模での取り組みを検討していくべきだ。藤沢以外の市町村でも明治から戦前のまだ豊かではなかった時代に、どのようにして中退問題が改善したか、その地道な努力と成果に関する研究を蓄積していくことで、開発途上国での中途退学児童発生の未然防止や退学児童へのより細かな支援に活かすことができると考える。一人でも多くの児童が初等教育を修了できるようにするために、こうした実証研究の積み重ねが重要である。

広田清一、広田清治　『明治後期教育日誌』広田清一寄贈、1980 年。

発表者氏名：大塚弘貴
所属ゼミ：松本悟ゼミ

タイトル：姉妹都市 60 年の分析―外的要因により活性化する長野市と海外都市との交流―

発表概要：

日本の自治体が海外都市と初めて姉妹都市提携を結んでから約 60 年経つ。姉妹都市提携とは自治体同士の友好親善を目的とした結びつきであり、提携に基づく教育・文化・経済などの幅広い交流を姉妹都市交流と呼ぶ。

現在日本の自治体の約 47%が姉妹都市を持ち市民レベルで交流が行われているが、「自治体の財源に限りがある中、行政主導で海外都市と交流をする時代ではない」と批判もあり、その存在意義が問われている。先行研究では交流をどう活発化させるかに焦点が当てられ、姉妹都市そのものを見直そうとする研究はほとんどない。そこで本研究では交流の持続性に着目し、なぜ姉妹都市との交流は続くのかを明らかにする。

本研究では時代の変化を踏まえ歴史的に姉妹都市を捉えるため 1 つの自治体を事例にとる。研究対象は①姉妹都市交流が始まった初期の 1950 年代に提携を結び、長期的に交流している②継続的かつ丹念に調査が可能である、の 2 点から長野市とした。長野市は 1959 年に米国・クリアウォーター市と、1981 年に中国・石家庄市と提携を結んだ。約 60 年分の市議会会議録を中心にドキュメント分析を行い、以下の結論を導いた。

長野市では、地方の国際化が叫ばれた 1980 年代から米国への学生派遣事業が行われ、市民の英語力向上や国際感覚の醸成につながった。石家庄市とは中国の経済成長が進むにつれて経済交流が活発になった。社会の変化に応じて地域に恩恵をもたらそうと柔軟に事業を変える長野市の姉妹都市交流は、いわば「無形の財産」として存在していた。交流の活発化をもたらす社会の変化が起きない時、交流は停滞するが、提携関係にあるための維持費は大してかからないため議会で批判の声はなかった。財政に負担を与えない無形の財産の恩恵を考えると、より多くの姉妹都市と提携しても不思議ではない。しかし、長野市は長野五輪開催時、複数の都市からの提携申入れを全て断った。業務上の負担などを考慮するとその合理的な理由がなかったためである。

姉妹都市と交流が続くのは、財政面での悪影響がなく、提携関係にあれば無形の財産としての恩恵を受けられる、かつ既存の姉妹都市との提携の解消を伴うような新しい姉妹都市との提携は不要だからである。姉妹都市交流は、先行研究で提言されるような自治体の努力や工夫によって「活発化させるもの」というよりも、ある外的要因によって「活発化していくもの」と考え

たほうが良いのではないか。時代の流れや社会に変化がない時に、自治体の限りある人材や予算を割いて交流を活発化しようとする必要は必ずしもない。姉妹都市交流を有効活用するためにも、いかなる外的要因によって交流が活発化し、いかなる機能を持つのかに着目する必要がある。

佐藤智子（2011）『自治体の姉妹都市交流』明石書店
日本経済新聞　2004 年 2 月 1 日　『姉妹都市数は増えても縁は薄く、自治体の国際交流お寒い現実』

発表者氏名：幸坂悠菜
所属ゼミ：松本悟ゼミ
タイトル：ミャンマーの非紛争地域の少人数民族と民主化―南部ビル島のモン族へのインタビュー調査から―
発表概要：

2016 年現在、ミャンマーは 20 年間以上続いた軍事政権から民政への変化の渦中にある。135 の民族がいるミャンマーでは軍政下、ビルマ同化政策や天然資源の搾取が行われ、少数民族は激しい迫害を受けていた（アムネスティ 2002）。2011 年に民主化を迎えたミャンマー最大の課題は、少数民族との和平である。既存研究では紛争地域の少数民族とビルマ族の抗争にばかり目が向けられ、目立った紛争のない地域の少数民族にはあまり関心が払われてこなかった。では、非紛争地域の少数民族は軍政下どのように生活をし、民主化後の生活はどう変化したのか。この問いに取り組み、軍政下での少数民族の暮らしやビルマ族との関係に目を向けることは和平実現後の少数民族のあり方を考えるためにも意味があるといえる。本研究では、ゼミのフィールドワークでミャンマー・モン州のビル島で島民に聞き取り調査を行った。その結果、以下の三点がわかった。

第一に、軍政や民主化による影響を島民は実感していなかった。軍政下の圧政で苦しむ声や民主化後に生活が改善したという話をはっきりとした形では聞かれなかった。一方で欧米の経済制裁などが原因となり、貨幣価値の低下による労働力コストの高騰などにより生活に支障をきたす人や、より生活が良くなった人もいた。これらは軍政による間接的な影響と言えるが、住民はそれらを軍政や民主化と結びつけていなかった。

第二に、軍政下でモン族の言語や文化が制限されたことへの不満は聞かれた。その反面、制限が解かれた民主化後でも、若者を中心に将来性のあるビルマ語を選択し、モン語話者が減少していることから、軍政だけがモン語離れの要因であるとは言えない。

第三に「支配するビルマ族・抑圧される少数民族」の否定である。既存研究では、ビルマ族が少数民族を支配する構図が指摘されていた。しかし、ビル島には出稼ぎ労働者としてミャンマー中部から島に来る貧しいビルマ族がいる反面、そのようなビルマ族を雇い、島で裕福に暮らすモン族もいた。

本論文はミャンマーの小さな島で数日間の聞き取り調査をしたに過ぎず、非紛争地域全体を語れるわけではない。一方で、小さな島の事例ではあるが、少なくともこれまで指摘されていたような対立や抑圧とは異なる関係が存在していることを明らかにすることができた。民主化により、民族間の和平が実現した後のミャンマーの民族融和を考える際に、政治的な和解だけではない視点を見出すことができた点において本論文には意義があるといえる。

アムネスティ・インターナショナル（2002）『ビルマ（ミャンマー）で迫害される人々』,アムネスティ・インターナショナル日本ビルマ（ミャンマー）調節チーム。

発表者氏名：遠田梓
所属ゼミ：松本悟ゼミ
タイトル：日本の支援への異議申立がもたらしたもの―制度が持つ働き―
発表概要：

2011 年軍政から民政へと移行したミャンマーは新たな市場として世界から注目されている。日本の政府開発援助（ODA）の実施機関である JICA は 2012 年に、ティラワ経済特別区（SEZ）のインフラ整備のため、

円借款を供与した。しかし2014年6月にティラワSEZへのODAに対して、住民がプロジェクトによって被害を受けていると、JICAの責任を追及する異議申立が行われた。異議申立は、JICAが独自に持つガイドラインを遵守しなかったことにより重大な被害が生じている、または将来重大な被害が発生する恐れがあると考えられる案件に対して行うことができ、JICA内の独立した専門家（審査役）に調査を求めるものである。異議申立の中で、審査役による現地調査が行われ、報告書が出されたのはティラワSEZのみである。

JICAの異議申立は世界銀行のインスペクションパネルを参考に作られた。先行研究では、インスペクションパネルがもたらす影響が分析され、制度の目的である遵守・不遵守判断だけでなく、プロジェクトに関係するアクターに影響を及ぼすと指摘されている（松本 2003）。一方、異議申立の研究蓄積は浅く、申立の結果、現状が改善されたのかなど、その後の経過は研究されていない。そこで本研究では、「異議申立とは何か」という問いのもと、ティラワSEZにかかわる8つのアクターに聞き取り調査を行うことで、JICAの異議申立が関係する様々なアクターに与えた影響を明らかにする。

その結果、異議申立制度は本来の目的とは直接の関係ない4点の機能を果たしていることがわかった。第1に異なるアクター同士をつなげた点である。住民の生活に対して問題意識を持った個人が組織を通して他のアクターと接点を持つようになった。第2に住民が意見を出しやすくなった点である。異議申立により社会から注目を集め、自らの発言力に気づいた住民は、企業や政府に直接会うようになった。第3にJICAの責任が以前より問われるようになった点である。JICA自身が調査結果を出したことで、それに不満を持つ住民から責任を問われるようになった。第4に問題を洗い出しやすくなった点である。住民が直接意見を言えるようになったことで、問題を共有しやすくなった。しかし、問題を解決する仕組みがないのが現在の問題点である。

このように、異議申立制度は遵守・不遵守の判断をするだけではなく、その後のアクターの動きを左右することで、プロジェクトに影響を与えている。その結果が異議申立の制度としての評価につながるのではないかと考えた。

松本悟（2003）『被害住民が問う開発援助の責任：インスペクションパネルと異議申し立て』 築地書館

玉懸光枝、(2016)「共創への道しるべ～ミャンマーの日々～第33話　ティラワSEZ住民移転」

発表者氏名：佐藤和司

所属ゼミ：栩木玲子ゼミ

タイトル：植民地時代から18世紀までのアメリカ文学における対象としての自然の描写

発表概要：

アメリカは植民地時代以降、人間と自然の関係における変化を経験してきた。ソローを嚆矢としたアメリカのネイチャーライティングの系譜は、程度の差はあれども、自然を人間の対象に押し込めるのではなく、自然の主体化が可能になるように人間を描いてきた。それでは、ソロー以前のアメリカ文学はどのような自然と人間の関係を描いてきたのであろうか。

先に述べたことを踏まえると、ソロー以前のアメリカ文学において、人間は自然を対象としてみなしてきたということになる。しかし、自然が対象として扱われるとしても、どのような対象であるかという点については何かしらの違いが存在するはずである。つまり、異なる自然観が時代に応じて用いられたと推測できる。本発表では、植民地時代から18世紀末の間に、アメリカ文学では自然がどのような対象として描かれ、それが変化したかという点についての考察を示す。

植民地時代は、それがアメリカ建国の神話と見なすことができる通り、ピューリタンの予型論的なウィルダネスがアメリカの自然描写を占めている。不毛のウィルダネスは彼らの努力と神の摂理によって楽園化されるという見方である。しかし、そのような自然観のみが存在したわけではない。上記のウィルダネスの周縁に属するが、キャプテン・ジョン・スミスは自然を実利的な面で描写し、トマス・モートンは自然をそのまま美しい楽園のように描写した。

17世紀後半になると、徐々に聖書的なウィルダネスはその求心力を失い始め、世俗化が進んだ。そのころ

から美的なサブライムへと人々の趣味は変わり、18世紀に入ると理神論の影響で人間そのものが重要となった。それゆえ、人間は神の存在を介さずに、自然を対象化するようになったのである。また、アメリカの自然は対象としてその実利的価値や美的価値を強めた。美的な価値を欠いているが、ベンジャミン・フランクリンが稲妻のメカニズムを解明したことは、人間が神の存在を通さずに自然を見るようになった一例と言えるだろう。また、『ウィーランド』の語り手クララが神の存在を考慮せずに、美しい自然の中で安らぐ場面もそうした自然観と自然が美的価値を得たことを背景にしていると言える。そして、この両者がフィラデルフィアで活動したことは、ニューイングランドの自然観が中心ではなくなったこと示しているのではないだろうか。加えて、同時期にウィリアム・バートラムが南部の自然を美しく描写したことも、そのような状況を指し示しているかもしれない。

対象としてのアメリカの自然に、人間は多様な様相を見ており、そしてそれは様々な機会において表出するのだと言えよう。

発表者氏名：武藤千佳

所属ゼミ：曽士才ゼミ

タイトル：ASEAN からの訪日観光客誘致に向けた取り組み

発表概要：

近年訪日観光客の増加が著しく、国土交通省は 2016 年に日本を訪れた外国人旅行者数が、10 月 30 日までで既に 2000 万人を超えたと発表した。政府はさらに東京オリンピックが開催される 2020 年に 4000 万人、2030 年には 6000 万人という目標を掲げており、今後日本が世界的な観光大国となる日も近いかもしれない。

そのカギを握るのが、最近の経済成長と政治的安定、若年層の多さから更なる成長市場と呼ばれ、日本国家としても誘致に力を入れている「ASEAN（東南アジア諸国連合）」である。ASEAN は近年著しい経済成長を遂げており、すでにシンガポールやマレーシアでは 1 人当たりの GDP が＄10,000 ゾーンを越えている。また、2025 年にはタイのような国々が＄5,000 ゾーンを抜け、＄10,000 ゾーンの水準に達することが予想される。さらに、ベトナムやインドネシア、フィリピンといった国々も＄5,000 ゾーンに迫り、その結果として海外旅行ブームが起こるということも予想されている。

こういった現状を踏まえ、今回は ASEAN を対象にした訪日観光促進の取り組みについて、実際に ASEAN にターゲットを絞って訪日観光をＰＲしている企業へのインタビューやその企業が開催しているセミナー、日本よりも一足先に ASEAN からの観光客数増加に成功した「韓国」の政策についての文献等をもとに、課題や将来性について論じる。さらに、そこから見えてきた日本が観光大国となる上で必要とされる具体的な取り組みについて自身の目線から探っていく。

参考文献

田中公子「日本の美容サロンの“特殊性”と“優位性”」『Beauty Business Review』 ビューティビジネス Vol3.No.2,2014 年

楠智也・三浦祐介・宮嶋貴之「ASEAN 観光客誘致政策の日韓比較」

『みずほ総研論集』（みずほ総合研究所）3 号,2014 年

みずほ産業調査部「訪日観光需要の極大化に向けたインバウンド戦略」『みずほ産業調査』みずほ銀行産業調査部 Vol53.No1,2016 年

ASIA Click

http://asiaclick.jp/

ASEAN 主要 3 カ国じゃらん訪日インバウンド調査

http://jrc.jalan.net.file/researches/researches040.pdf

（株）リクルートライフスタイル ホットペッパービューティーアカデミー調べ

http://hba.beauty.hotpepper.jp/search/trend/4262/

日本政府観光局（JNTO）

www.jnto.go.jp/jpn/

発表者氏名：山田光樹

所属ゼミ：松本悟ゼミ

タイトル：地中海難民の行方 ―イタリアに到来した難民はどのように受け入れられているのか―
発表概要：

本研究はイタリアの難民受け入れの実態について現地調査を通じて追ったものである。アフリカから地中海を渡りヨーロッパを目指す人々、「地中海難民」についてはその数が急増した 2011 年以降マスメディアでもたびたび報じられてきた。難破事故が起きるたびに注目を浴びる一方で、ヨーロッパにたどり着いた難民のその後に関してはあまり注目されてこなかった。地中海難民の多くは地理的な理由からイタリアに流入するため、地中海難民の増加はイタリアの難民受け入れ負担の増加に直結する。2015 年には 14 万人以上が地中海を渡って流入し、そのうち 83,245 人が庇護申請を行った。イタリアは大量難民の流入への対応を迫られている。

イタリアは一般的に難民受け入れに消極的であるといわれてきた。実際に、G7 の中では日本に次いで難民受け入れ数は少なく、難民認定率が低い。先行研究でも、1990 年代に大量難民が流入した時代からイタリアの難民受け入れの姿勢が批判されてきた。例えば、Nufer and Trummer（2013）は受け入れ体制の不備を指摘し、難民の人権が侵害されていると述べている。ではそのイタリアはどのように地中海難民の流入に対応しているのだろうか。筆者は現地で参与観察とインタビュー調査を行い、難民受け入れプロセスを追った。調査対象は地中海難民にとってイタリアの「入口」であるランペドゥーサ島の住民、一次受け入れ施設、裁判所での庇護申請審査である。

結論は以下の通りである。先行研究で批判されていたイタリアの難民受け入れ体制は改善されている。民間企業や団体に受け入れを委託することで、不足していた受け入れ施設数が拡大した。施設に入ることで難民は衣食住など生活面への援助や、イタリア語の授業など社会統合に向けた支援を受けることができる。その一方で、難民受け入れが民間に委託されたことによりビジネスの側面を持つようになり営利目的で受け入れを行う施設が生まれたこと、受け入れに関わる人も急増し十分な専門性を持たない民間支援団体や裁判官が難民援助や庇護申請審査に関わっていることにより難民間の不平等が生じている。

民間のアクターを難民受け入れに取り込むことでイタリアの受け入れ体制は改善した。今後の課題は庇護申請審査を行う審査委員/裁判官の教育、通訳者の質の向上や支援者の育成、受け入れ施設間の不平等の是正など新たに難民受け入れに関わることになった人々の専門性を高めることである。

Nufer, Seraina., & Trummer, Muriel. Asylum procedure reception conditions in Italy. Ed. Swiss Refugee Council. Trans. Claire Gorden-Kühl., and Muriel Trummer. Bern: Swiss Refugee Council SFH, 2013.

発表者氏名：前田真綾
所属ゼミ：松本悟ゼミ
タイトル：新興国から先進国への投資による環境問題 ―タスマニアの森林伐採の事例から―
発表概要：

21 世紀に入り新興国から先進国への投資が急増し、先進国が投資側、新興国・途上国が受入側という従来の投資形態が変化しつつある。先進国の投資が招く問題については数多くの研究があるが、新興国から先進国への投資による影響や課題に関する具体的な研究はほとんど行われていない。そこで筆者は、1 年間留学していたオーストラリアで新興国企業の投資によって環境破壊が引き起こされた問題を研究した。

一般的に、先進国は環境配慮のための法規制が適切に運用されているため、環境保護意識が低いと指摘されている新興国の企業が投資先の先進国で環境問題を引き起こすとは考えにくい。この前提を覆す事例が、上記に挙げたオーストラリア・タスマニア州における新興国企業の投資による環境問題である。この問題には、違法な森林伐採を行なっていた国内企業が環境保護団体や世論の強い非難を受けて撤退した後に新興国の同業社がタスマニア州に参入したという背景があった。今もなお現地住民や生態系に被害をもたらしているこの問題が解決に向かう兆しはない。なぜ法制度上の環境配慮が十分行われている先進国で新興国の投資による環境問題が発生するのか。この問いに取

り組むため、国内企業撤退後から新興国の投資による森林伐採問題が発生するまでのプロセスを明らかにする文献研究と、環境保護団体やオーストラリアの法律に詳しい専門家へのインタビューを行った。

文献研究とインタビューから導かれた結論は以下の通りである。タスマニアの事例ではオーストラリアの法規制自体が環境問題の発生を左右した直接的な原因ではなく、投資側の新興国企業に対して環境配慮への取り組みを促す環境保護団体や世論の圧力の大きさが関係していることがわかった。タスマニア州政府に誘致された新興国企業が国内企業に比べて現地で影響力を持ったこと、活動方針の違いから環境保護団体が分裂したことなどにより、国内企業を撤退に追い込んだ環境保護団体や世論による反対運動が新興国企業に対しては十分に行われなかった。つまり、環境配慮への取り組みを促す圧力がうまく機能しなかったのである。このことから、先進国で新興国の投資により環境問題が引き起こされる原因は新興国の不十分な環境保護意識や環境配慮政策だけではなく、先進国側にも責任の一旦があることがわかる。

今後も新興国から先進国への投資の増加が見込まれているため、投資による開発と環境保護の両立に向けて、新興国の投資の受け入れに対する先進国側の認識や体制を改める必要があると考える。

参考文献

World Bank. (2011) *Global Development Horizons 2011 Multipolarity: The New Global Economy*. Washington DC.

発表者氏名：金子由依
所属ゼミ：松本悟ゼミ

タイトル：留学生の異文化適応とカルチャーショック
—8 人に対する 6 か月間のインタビュー結果から—

発表概要：

本研究の目的は、インタビューをもとに留学生支援について考察することである。

日本に来る留学生の数は「留学生 30 万人計画」が策定された 2008 年から 2015 年までに約 10 万人増加した。筆者は「カルチャーショック」に悩む留学生と出会った経験から、留学生の心理的負担を減らし、帰国後も日本語の勉強を続けてほしいと思った。留学生はどのようにカルチャーショックに陥り、そして克服するのか。

調査方法は法政大学で学ぶ留学生 8 人に対する 6 か月間の継続的なインタビューである。 異文化適応が「過程」として絶えず変化する心理的な状態であることから、定期的なインタビューに意義があると考えられる。

カルチャーショックの発生に関する調査結果は以下の通りである。第一に「文化の違い」について先行研究を踏まえると、日本と文化が似ているアジア文化圏出身の留学生はカルチャーショックを受けにくいと推察できる。その一方で、文化の違いが影響を与えないという研究も存在する。インタビュー対象者は、出身地の文化にかかわらずカルチャーショックを受けていた。アジア文化圏出身の F.X.さん（中国）は寮母が現金を与えたことにカルチャーショックを受けた。それ以外の国出身の留学生では R.M.さん(アメリカ)、S.R.さん（オーストリア）、G.C.さん（チリ）が日本人とのコミュニケーションにカルチャーショックを受けた。 第二に「言語能力」に関して、先行研究によると言語能力を備えていない場合にカルチャーショックは発生する。他方で、適応と言語能力に相互関係がないとする研究もある。この点を検証した結果、言語能力にかかわらず、カルチャーショックが発生するとわかった。言語能力が高い S.R.さんは日本人に日本語の発音を笑われて以来、「日本人と話したくない」と感じていた。第三に、滞在先がどこであっても発生するカルチャーショックが存在する。G.C.さんは家族と離れて暮らすことにカルチャーショックを受けた。先行研究によると他者からの物理的、心理的支援である「ソーシャル・サポート」がカルチャーショックの克服を助ける。インタビューでは日本人、留学生と同じ国出身の人、その他の国出身者それぞれが適応に良い影響を与えるとわかった。先行研究では重要視されなかった、その他の国出身者のサポートが重要な役割を果たしていた。S.B.さん（ドイツ）は台湾人留学生から日本の生活に必要な情報を得た。

日本人や同じ国出身の人は良い影響を留学生に与える一方で、カルチャーショックの原因になりうる。日

本語で話したい留学生と、英語で話したい日本人学生の思いがすれ違っている現状がわかった。
本研究は、一個人が適応に良い影響を与えることやカルチャーショックの原因になることを明らかにした。留学生の心理的負担を減らすために、一人ひとりが留学生を助けるという意識を持ち、留学生と接することが重要だ。

発表者氏名：熊代朝子
所属ゼミ：松本悟ゼミ
タイトル：ハワイ語の復権の可能性
発表概要：
国連教育科学文化機関（ユネスコ）によると、もし何も手立てを打たなければ、世界で話される 6000 言語のうちの半数が今世紀の終わりまでに消えてしまう。アメリカ文化への同化によって話者数が激減したハワイ語もその一例である。しかし、1970 年代初めからハワイ語の復権運動が始まり、現在に至るまで復権への動きが続いている。減少傾向にあった話者数も増加に転じた。今後もこの動きは続くのであろうか。
松原（1995）はハワイ語の復権運動の要素に（1）ハワイアン・ルネッサンスは、(2）マーオリ の影響、（3）ハワイ語のイマージョン教育プログラムによる母語教育の 3 点を挙げている。ハワイ語の今後の存続に関わるのはイマ -ジョン教育のため、筆者はその教育プログラムの 1 つであるプーナナ・レオ（就学前教育機関）で参与観察し、保護者へのインタビューを行った。その結果、母語教育だけではハワイ語話者は限定されるため、復権の動きの継続にはハワイ語話者のコミュニティの広がりがカギだと考えた。コミュニティ拡大の要因として、外国語としてのハワイ語教育である公教育の中のハワイ語必修学習に注目した。この学習を経験し、ハワイ先住民族との血縁関係の有無、ハワイ語運用能力の差に違いがある 20 代の 2 人にインタビュー調査を行った。この結果から外国語としてのハワイ語教育は、ハワイ先住民族のアイデンティティの維持に繋がる可能性があるとわかった。また先住民族ではなくても、その教育によってハワイの文化や言語の保存に肯定的な態度を持つようになった。このような人々は、イマージョン教育プログラムを受けハワイ語を母語とする人々をコミュニティの中心と考えると、そのコミュニティの末端を担っている可能性があることがわかった。これまで外国語としてのハワイ語教育は、ハワイ語が生き残るレベルの運用能力を育てることが出来ないため、ハワイ語の復権には繋がらないと批判されてきた。しかし、ハワイ語を母語とする人々により多くのハワイ語使用の場を与えたり、話すことはできずともハワイ語を肯定的に受け入れたりすることでコミュニティがより外へと広がることがハワイ語の復権には重要である。Kachru (1985) は英語話者の層の広がりにおいて Expanding Circle(外国語としての英語話者層)の存在を述べている。これはハワイの事例にもあてはまると考えられる。多民族社会であるハワイにおいて、母語話者としての先住民族だけでなく「外国語としてのハワイ語話者」の存在を巻き込まなければハワイ語復権運動の広がりは限定的なものとなる。

発表者氏名：澤井薫
所属ゼミ：熊田泰章ゼミ
タイトル：Toronto as Art-City My observation and Analysis
発表概要：I introduce public art of Toronto in this essay. I divided this essay into three chapters; my discovery, the history of public art in Toronto and present state including features.
The experiences in my study abroad in Toronto gave me a base of this essay. I had studied abroad in Toronto for four months. The period four months was enough for me to get used to local life. During that time, I visited many places from sightseeing spots to local areas in Toronto.
Throughout my life in Toronto, I noticed that a lot of public art works are scattered. Their shape or color or size are various, all of them are depending on newest modern art. Some are colorful and others are bronze. Some are big and others are small. Some are concreate and others are abstract. Each art work is not associate each other but most of all had something attracting us. These public art works seem to be new for tourists like

me so that we took photos and gaze at them. However, I felt, for the local people these works are not novel things but parts of usual landscape. I did not care the significance and role so I simply regarded them as an object at that time. But since entering Kumata seminal class, opportunities to touch on art have increased. I came to be interested in the role of public art works, why there are a lot of public art works and how they influence on town people or city of Toronto. Therefore I determined to write this essay.

In the first chapter, I state my observations like mentioned above. In the second chapter, I describe the history of public art and policy in Toronto. City of Toronto has put up the policy on public art, invested much money and promoted public art. In the third chapter, I would like to check the current art scene of Toronto, in order to say that public art works spread continuously in the city and give the city more charms.

発表者氏名：浅野ひかり
所属ゼミ：曽士才ゼミ
タイトル：ご当地キャラクターの多様な影響力
発表概要：

近年、日本全国各地にご当地キャラクターが出現している。その発端は 2006 年の「ゆるキャラブーム」だと言われており、有名なご当地キャラクターの経済効果は絶大なものである。その反面、その収益が地元に還元されていないと指摘を受けている地域もある。成果を出しているご当地キャラクターがいる一方で、芳しい成果を残すことができていないご当地キャラクターもいるのはなぜか。ご当地キャラクターを管轄している部署の違いがその影響力の差を生み出していると仮定し、管轄部署の異なる三種のご当地キャラクター（ひこにゃん、チーバくん、唐ワンくん）を対象に調査を行った。その結果、ご当地キャラクターの活用目的は一様ではなく、経済利益という一つの尺度だけで評価していることのほうが問題であることがわかった。

ひこにゃんを管轄している滋賀県彦根市産業部観光企画課の中村氏によると、観光客誘致に向けた市外でのキャンペーンと、彦根城入山者へのおもてなしが現在のひこにゃんの主な活動内容であり、来年行われる「国宝・彦根城築城 410 年祭」とタイアップした PR 活動も予定されている。このような外向けの活動を主眼としていることから、観光客誘致における活躍を期待してひこにゃんは活用されていると考えられる。

チーバくんを管轄する千葉県庁総合企画部報道広報課千葉の魅力発信戦略室の高橋氏は「チーバくんの PR ではなく千葉県の魅力を伝えることが主旨だ」と述べており、千葉という土地が周知されていないことから国内だけでなく海外でも PR 活動を行っている。千葉県という土地自体を知ってもらうためのツールがチーバくんであり、今後はインバウンドを重視した活動を展開していくという。したがって、千葉県庁報道広報課は千葉県の知名度上昇を念頭にご当地キャラクターを活用していると考えられる。

佐賀県の NPO 法人唐津市子育て支援情報センターが管轄している唐ワンくんは、9 つの市町村を合併してできた現唐津市のシンボルとして誕生した。その名前には“唐津をひとつに”という思いが込められており、地域の幼稚園や小中学校での挨拶運動等、地域に根付いた活動を行っている。このことから、管轄部署は地域の一体感醸成を願ってご当地キャラクターを活用していると考えられる。

調査結果により、ご当地キャラクターの活用目的は一様ではなく、それぞれが求められている成果はその管轄部署の施策に左右されると判明した。全国には 2000 体以上のご当地キャラクターがいると想定されており、活用目的はもっと多様かもしれない。本論でたてた仮説（3 つの類型）をもとに、今後も調査を続けていきたい。

参考文献

石井良一・得田雅章『彦根市観光に関する経済効果測定調査報告書』滋賀大学社会連携研究センター　2014 年
高橋輝子『ご当地キャラクターを活用した地域活性化～千葉県マスコットキャラクター「チーバくん」を事例として～』千葉県総合企画部報道広報課　2013 年

発表者氏名：近藤郁美
所属ゼミ：熊田泰章ゼミ
タイトル：都市の身体化とグラフィティ：都市景観を創造する
発表概要：

アメリカやヨーロッパ、日本でも、壁や地下鉄といった公共空間に描かれた/書かれた落書き、グラフィティを見ることができる。グラフィティはとらえられ方が複雑である。一般的には違法行為であるが、その完成度の高さにアートとしてみなされているものもある。したがってそれは犯罪、ヴァンダリズムとして研究されていると同時に、ひとつの文化、あるいは芸術性があるものとしても研究されている。本論文では世界中にあるグラフィティの中でも特に大きな現象と考えられるニューヨークのグラィティを中心に、それを文化として様々な角度から考察し、その意義は何か、何を表現しているのか、について研究することを目的とする。

グラフィティ文化とは1960年代から80年代にかけてニューヨークで起きた文化である。この論文で述べるグラフィティとは、単なる落書きを指すのではない。グラフィティ文化とは簡単に言うと自分の名前を壁や地下鉄に描く/書く行為である。その歴史は深く、多くのグラフィティライターが自分の名前を有名にするために長年にわたってスタイルを進化させ、その名前を拡散させてきた。しかし、これはグラフィティを一つの文化としてとらえているが、それは犯罪ととらえられることもある。反対に、アートとしてとらえる運動もある。一章では、このようなグラフィティ文化のさまざまなとらえ方を考察し、グラフィティ文化とは何なのかについて論じる。

二章では、スケートボーディングと比較し、グラフィティ文化と都市の関係について述べる。スケートボーディングはグラフィティと似た、アメリカで起きたローカルチャーのひとつである。二つの文化の共通点はたくさんあるが、中でも都市の使い方への批判という点を中心にとりあげる。都市は国家の成長や生活の質の向上によって、ますます便利に発展を遂げた。そのような世の中において、グラフィティやスケートボードは都市で行われることによってどんな意味を持つのか、何を表現しているのかを考え、論じる。

三章ではグラフィティとその他の壁画の関係について論じる。公共空間にある壁に何かを描いて/書いて表現する行為は、グラフィティ以外にも、そしてニューヨーク以外の世界中に数多く存在する。また、それらはグラフィティより前の時代のものもあれば、グラフィティ文化の要素を持ちつつ新しく誕生したものまでさまざまである。古代壁画や、バンクシーの作品がその例である。このように、グラフィティとグラフィティ以外の壁画を比較し、それらにどのような関係があるのかを考察する。

発表者氏名：御子柴亮介
所属ゼミ：熊田泰章ゼミ
タイトル：「平等」な社会からの脱却 ～セクシャルマイノリティについて考える～
発表概要：

異なる文化を持った人々と出会った際、もともと持ち合わせていた文化と異なる文化が影響し合い、私たちの中に新しい価値観が生まれる。しかし多文化や異文化と発言される際、国籍が異なる人々が所持するものだと連想され易いが、これらは彼らだけが所有するものではなく、私たちの生活の身近なところにも存在する。本発表では「普通」の人々からした異文化である、セクシャルマイノリティの人々に対する社会の問題に焦点を当てる。

多文化共生が目指される現代社会では、多様性を認め、異なる文化を受け入れられることが前提条件となる。なぜなら「人間は生まれながらにして平等である」ため、互いを尊重しなければならないからだ。しかし、この「平等」という言葉を当たり前のように、そして容易に繰り返すために、本来そこにあるはずの差別が不可視化されてはいないだろうか。つまり私たちは社会に存在する差別を、意識的であれ、無意識的であれ無視し、あたかも社会が平等であるかのように生活している。例えば、昨今のテレビ番組では、「オネエタレント」をよく目にするようになった。彼/彼女らの存在で同性愛者への理解は進んでいるだろう。しかしこの状況だけでは問題の解決に至っていない。現在の日本で俳優やモデルが自らを同性愛者と公言する者は少なく、同性愛者がメディアで活躍できるのは、「オ

ネエタレント」という枠組みのみである。なぜなら、社会は「普通」と異なる「オネエ」像を求めているからだ。マツコデラックスがメディアで活躍するのは、「私たちの普通の感覚」とは異なる面白い言動をする「オネエらしさ」を再生産しているからである。加えて、自らの性をカミングアウトする際も、「受け入れる側」と「受け入れてもらう側」という不平等な関係に分けられてしまうのが現状だ。このように、私たちは「こちら側」と「あちら側」という線引きを日常的に行っている。それにも関わらず、一般の人々が普段自らを差別者であることを認識することがないのは、「人々は平等である」という耳あたりのいい「常識」と、「私は差別者ではない」という思い込みが、社会が孕む問題を不可視化させているためである。つまり、差別を生み出すのは、マイノリティに対し直接的な攻撃を行う者だけでなく、それが成り立つ社会であることを黙認している私たちでもある。初等教育で学ぶ「差別はいけない」を口にするが、同じく初等教育で学ぶ「差別を見過ごすことも同罪」という現実からは目を背けている。

私たちは「こちら側」と「あちら側」の二項対立から脱却し、「こちら」も「あちら」もない一つの社会を成立させなければならない。しかしそれを創りだすためにはまず、他でもない私たちが差別を社会に生産し続けている当事者であることを自覚しなければならない。この現実を受け入れ、日常生活の細部に混在する差別を見つめ直し、認識してもらうため論文を発表する。

発表者氏名：藤森結子

所属ゼミ：輿石哲哉ゼミ

タイトル：日本と海外とのプライバシー比較と新たな概念の提案

発表概要：

1. はじめに

本発表の目的は日本と欧米とのプライバシーの概念を比較し、日本でのプライバシーの新たな概念「真の双方向性に基づくプライバシー」を提案することである。主にプライバシーと深く関わりを持つと考えられる人間関係の構築、住居におけるプライバシー、そして個人主義の3点から日本と欧米の比較をしていく。

本論では、まずプライバシーの概念から説明していく。アメリカの弁護士である Samuel D.Warren(1980)らはプライバシーを「the right to be let alone」と定義したが日本では佐藤幸治によって自己情報コントロール権としてプライバシーを解釈するようになった。

2-1. 親密性“intimacy”

自己情報コントロール権でのプライバシーは親密さと深い関係があると考えられる。Damon(1983)は青年期の友好関係は内的体験の共有や友人に対する親密性が中心となると述べており、相手との親密性の確認をとるためには内的体験などの自己開示の交換 の確認が必要になると主張している。この主張は両者の情報の確認を行うのでより双方向であると考えられ、この点において情報開示のための質問とその対応に欧米と日本の差異がある。

2-2. 住居

プライバシー保護に関して Solove(2008)は、侵入から私的領域を保護することの重要性を強調している。現在日本人が生活を営む住居の多くは、公私分離されたものである。しかし、北浦(2004)の調査によると子供部屋を与える目的は日米共に子供の自立心を養うためであるのに対し、子供部屋の管理を米国は子供が、日本は親がするという傾向がある。これは日本が「世話型」で、米国が self-esteem を培う「会話型」の養育態度であることが背景だと考えられている。よって、米国と比べ日本の住居にはプライバシーが尊重されにくい一面があるといえる。

2-3. 個人主義

プライバシーと個人主義に関して、ルークスら(1987)は、個人主義はプライバシーの観念と結びつき、それは個人が有する至高な価値の一つだと述べている。夏目漱石は、英国は自己の自由と共に、他者の自由も尊重する個人主義的であるのに対し、日本は国家主義的であり、自己の自由も、他者の自由も尊重されていないと主張していた。カー(2002)によると、現在の日本も、人と違うことを拒む傾向や、和を重んじて自己主張を遠慮する風潮があり、個人主義的とは言い難いとされている。このことから、現在の日本にはプ

ライバシーに必要な要素である個人主義が充分でないと考えられる。

3. 結論

以上３点から、日本のプライバシーは主に自己を保護する単方向的な特徴があると考えられる。そこで我々は、日本でのプライバシーの新たな概念「真の双方向性に基づくプライバシー」を提案し、プライバシーの保護は自己と他者の双方向で尊重されるべきであることを論じたい。

発表者氏名：遠藤瑞歩

所属ゼミ：輿石哲哉ゼミ

タイトル：日本人のスピーキング力・理論性と発音の正確性の欠如 ～日本の教育のあり方を考える～

発表概要：

１　私たちの主張

日本人の TOEFL のスピーキングスコアが低い要因は数多く考えられるが、今回は論理性の欠如と発音の不正確さに着目した。本論では、自分の意見を論理的に発言する機会を増やし、教育の重要性をより深く理解する必要があると主張したい。

日本人の TOEFL スコアの中でも特にスピーキングスコアが低い。TOEFL スピーキングの評価基準は大きく分けると論理性（文章の構成力）・発音・流暢さ・文法や語彙であるが、基本的な文法や語彙を習得させる教育は既に行われていること、流暢さは個々人の会話の実践により培われることを考慮し、今回は今後改善の余地がある論理性、発音の２つの評価項目に着目し、日本の教育のあり方を考える。

２　先行研究

・国語教育における論理的思考育成不足

小学校における現行の学習指導要領によると、教育目標は「思考力や想像力を養い」「国語を尊重する態度を育てる」ことである。また、授業の具体的な内容は作品の登場人物の心情を読み取ることや、漢字や敬語の知識を学ぶ比重が高い傾向にあり、伝統的言語文化に重点を置いている。一方、論理的思考育成についてはあまり触れられていない。NGA と CCSSO によると、アメリカでは生徒の自主性や論理的な発言を求めるような授業が組み込まれている。日本の生徒は教養的な知識をつけるだけに留まり、論理的に話す訓練が少ない。

・英語教育における発音の軽視

英語の母音数は日本語の倍程度あり、子音の発音形式も異なる。発音が綴りに対応せず、融合、脱落、同化、連接といった音韻変容が激しい。音節構造、音韻構造も異なる。日本語話者にとって英語の発音は容易ではないが、発音の仕組みを説明し訓練する学校はほとんどない。この原因は、読み書きを主とした試験制度と教職課程における英語音声学の欠如にある。教師自身も英語音声学を学んだことがなく、発音指導法が分からないことが多い。

３　先行研究の検討，可能な対策の検討

具体的な対策としては以下のことが考えられる。:

・英語圏では、文章を書く際にブレスト、アウトライン化、要約等を徹底して指導するが、同様のやり方を日本の教育においても取り入れる。

・発音教育に力を入れる（音韻レベルでの指導を行う。異音レベルでの細かい指導をすると、英語嫌いの増加を招きかねない。音声レベルの間違いについてはあえて指摘せず、あくまで意思疎通に支障をきたさないレベルを目標とする）。

・教職課程において英語音声学を必修とする。

結び

スピーキングスコア向上のために、国語教育においては論理的に思考し意見を述べる機会を増やすこと、英語教育においては音声教育を充実させることが必要だ。

日本の国際化が進み、文化の異なる人々と接する機会は増えていく。より多くの日本人が国際人としての意識を持つために、日本の教育の在り方を継続的に考えていく努力が必要である。

発表者氏名：大久保秀斗

所属ゼミ：輿石哲哉ゼミ

タイトル：なぜ言語学習は異文化理解に必要なのか？
―サピアウォーフの仮説から考える―

発表概要：　本論の目的は、言語が思考に影響するという考え方（一般的に Sapir-Whorf の仮説と呼ばれる。以下 SW と略）についての賛否両論を再検討

し、その意義を考察、今後の異文化間コミュニケーションの在り方について考察する。

グローバル化の進展により異文化間で交流を行う機会が増えている。そこで重要な異文化理解には言語の学びが必要である理由を考察するためにSWの妥当性について、文献を読み検証した。

はじめに、SWを端的にまとめると、思考が必ず言語を用いてなされるものであるならば、思考はその言語の影響を受けるという考え方だ。その中でも言語のない思考など存在し得ないという強い仮説(言語決定論)と言語が思考の内容に一部影響するという弱い仮説(言語相対論)の二つが存在する。ウォーフ(1978)は異なる言語話者間におけるコミュニケーションの難しさを主張した。しかし、SWは賛成派と反対派がいくつも存在する。

例えばSWの賛成派には、その一つとして外山(1976)の日本人の言語コミュニケーションに関して、話す相手によって日本人は第一人称を変える事が挙げられる。文法面から見ると、福田と福田(1990)から、文法面で見受けられる日本語と英語の持つ概念体系が私たちの思考パターンに影響を与えている事が分かる。これらの事象により言語が思考に影響を与えるという支持が出来る。

しかし、このSWに対して反対意見もある。例えば、宮岡（1996）はズニ語にある特定の色を示す言語がなくても色彩認識の差異がないと主張をし、語彙の有無は社会的文化的関心度が影響していると述べている。

研究を進めていく上でこの SW は様々な解釈により賛否両論があることが分かった。そこでFishman（1960）の方法でSWの実験を分類した。その結果、空間や色彩認識の違いで言語が思考に影響を与える主張の実験には批判が多いが、文法の相違における実験には批判が少ないことも分かった。さらに人間の認知能力で言語学を捉える認知言語学において言語が認知に影響を与えることがFillmore(1975)らによって主張されている。

つまり、言語のない思考など存在し得ないという強い仮説は異論が多いものの、言語が思考の内容に一部影響するという弱い仮説の事実は文法の相違を比較した実験から正しいと考えられる側面があるようである。

結局、SWの妥当性について、現時点で決定的なことは言えない。しかし、一般的に研究からSWの強い仮説、言語決定論には問題があるように思われるが、SWの弱い版の言語相対論はそれに沿った事実が分かった。従って、言語が思考に影響を与えることから、私達、異文化を学ぶ者として言語学習の重要性をわきまえ、その文化の思考様式に言語が影響を及ぼしている可能性を常に自覚する必要があると考える。この自覚こそが異文化コミュニケーションに重要なBennett(1993)のDMISの容認(acceptance)への一歩となるのではないかと思われる。

発表者氏名：木嶋諄

所属ゼミ：今泉裕美子

タイトル：シベリア抑留における長期抑留者の考察〜祖父の軍歴・抑留体験を中心に〜

発表概要：

本報告では、ソビエト社会主義共和国連邦（以下、ソ連）によるシベリア長期抑留を、祖父・稲津満雄（1919-1998）の長期抑留体験、主にハバロフスク第16収容所第1分所での生活に焦点をあてて考察する。そして、祖父のように長期抑留体験を話さなかった意味を明らかにし、戦争を知らない「戦後」世代がシベリア抑留問題を知る意義を考える。

アジア・太平洋戦争の終戦時に関東軍特種情報部隊に所属し、新京（長春）を駐屯地として解読活動に従事していた

シベリア抑留とは、満州・朝鮮・樺太地域にいた約60万の日本人がシベリアなどの収容所に送られ、強制労働に従事させられたことを指す。大多数の抑留者が1949 年末までに帰還したが、この時点で帰還できずに、長期抑留者となり、最長で1956年まで帰還を待たなければならなかった人びとがいた。彼らはソ連により「戦犯」と見なされ、裁判によって20年や25年の有罪判決を受け、再び強制労働収所に収容された。ソ連は戦時中に特務機関や対ソ諜報活動に従事していたことを、取り調べや味方につけた日本人による密

告から根拠にし、彼らにはソ連に対する反革命罪の罪があると主張し、主にソ連刑法典 58 条を適用した。刑が確定した者の多くはハバロフスクの収容所に集められた。

終戦時、関東軍特種情報部に所属していた祖父は、ソ連により満洲の通化で武装解除された。劣悪な収容所で強制労働に従事させられていた祖父は、抑留中の1950 年に裁判によって 20 年の有罪判決を受け、ハバロフスク第 16 収容所第 1 分所へ収容された。したがって、祖父は長期抑留者となり、1956 年 12 月 26 日の最終引揚げまでの期間をこの地で過ごしたと思われる。そして、引揚げ後も、抑留中の話をすることは一切なかった。

ハバロフスク第 16 収容所第 1 分所は、1955 年に日本人抑留者 769 名が、ソ連当局に対して抵抗運動を行ったハバロフスク事件が発生した場所である。病人が続出していたにも関わらず、無理やり病人までも労働に駆り出すソ連当局に対して、長期抑留者らは待遇改善を訴えていた。改善策を講じないソ連当局に耐えかねた長期抑留者は、12 月 19 日の朝に作業拒否のストライキを決行した。しかし、ソ連当局は武力鎮圧という手段で鎮圧し、ストライキの指導者であった石田によれば、1500 名もの兵が動員されたという。

シベリア抑留研究を行った若槻泰雄は、第 16 収容所第 1 分所がハバロフスク事件に至るまでの動きを、多くの体験記を参考にしながら考察している。しかし、同収容所で伊東六十次郎を中心とした民族運動についての記述は見られない。

以上から、祖父の長期抑留体験をハバロフスク第 16 収容所第 1 分所の出来事を中心に考察し、伊東が行った民族運動が収容所とハバロフスク事件、及び祖父の生活に与えた影響を分析する。そして、祖父が抑留体験を話さなかった意味を明らかにし、戦争を体験していない「戦後」世代にとっての、シベリア抑留問題を知る意義を考察する。

発表者氏名：宮崎奈々

所属ゼミ：今泉裕美子ゼミ

タイトル：スウェーデンと日本における子育て支援政策の比較考察 ―仕事と子育ての両立可能な社会へ―

発表概要：

本報告では、日本における女性のワーク・ライフ・バランスのための取り組みを仕事と子育ての両立という観点からスウェーデンと日本の政策を比較し、日本の課題を分析する。その際、両国の社会的背景、特に戦後の復興の仕方や政治体制の違いを明らかにした上で、「女性が働きやすい国」、かつ「子どもを産み育てやすい国」として知られるスウェーデン社会の取り組みが日本社会でどのように活かすことができるのか否かを考察する。

日本ではワーク・ライフ・バランスを論じるにあたり、スウェーデンのワーク・ライフ・バランスの実態や社会制度をモデルにする傾向がある。近年の議論の傾向として、スウェーデン国家主導の仕事と子育ての両立支援制度やそれに伴う男性の積極的な育児参加に注目しているものが多い。例えば育児支援政策は、育児休業が子供 1 人につき 480 日間取得でき、そのうち 390 日間は収入の 80%、残りの 90 日間は日額 180 クローナ（約 2,000 円）が保障されている両親保険制度や、子ども 1 人につき子どもが 12 歳になるまで年 120 日間取得でき、収入の 80%を支給される一時看護休業制度が挙げられる。また、公的保育については保育料が公立・民営にかかわらず 93%が公費負担の「就学前学校」がある。更には、コミューン（kommun）と呼ばれる地方自治体は学校法により申請のあったすべての子どもに 3～4 か月以内に公的保育を提供する義務を負っており、待機児童はほぼいない。男性の育児参加を促した要因としては、1995 年に父親・母親がそれぞれパートナーに譲れない育児休業期間を 30 日間設けた「パパの月、ママの月」がしばしば取り上げられる。これは双方がそれぞれ 30 日以上育児休業を取得しないとその分の受給期間が減ってしまうというもので 2002 年には 60 日間に、2016 年には 90 日間に延長されている。このような充実した育児支援及び両立支援制度が、スウェーデンを仕事と育児の両立がしやすい社会へと導いた大きな要因として指摘でき、ここから日本が学べる点は少なからずあるだろう。

しかし、スウェーデン社会で採用される政策を日本社会へそのまま適用することは可能であろうか。高負

担・高福祉国家と呼ばれるスウェーデンには、子育て支援を含め世界最高水準の福祉を国民に提供できる社会システムがあり、その基盤は 1932 年から 40 年間にわたり長期政権を執ったスウェーデン社会民主労働者党を中心に戦前から築き上げられていた。日本がスウェーデンから学ぶ上では、そういった社会的背景の違いを踏まえて論ずるべきだと考える。また、日本においても戦後独自の女性政策や 1990 年代以降少子化対策としての両立支援を行ってきた。それらの支援にはスウェーデン社会が取り組んできたものに倣ったものもある。本報告では、日本のこれまでの支援施策を踏まえ、今後日本が採用すべきスウェーデンの両立支援を検討する。

発表者氏名：石川紗衣花
所属ゼミ：今泉裕美子ゼミ
タイトル：基地からの自立の手段としてのエコツーリズム ―エコネット・美における地域の自立―
発表概要：

本論文は、沖縄県名護市の東海岸に位置するエコネット・美で行われている「基地に頼らない自立の地域おこし」の取り組みに焦点を当て、環境保全・地域振興・観光振興を重視するエコツーリズムが、環境問題や基地をめぐる様々な問題を解決する手段としてどのように活用できるのかを明らかにし、地域の自立の在り方を考察する。

現在沖縄では基地をめぐるさまざまな問題が発生している。基地建設による海やサンゴなどの環境破壊、産業形態やそれにともなう地域社会の変容、米軍基地や復帰後の振興策がもたらした深刻な経済的自立の問題などは今もなお沖縄の人々の生活を打撃している。

名護市の東海岸側、嘉陽という地域にエコネット・美は位置する。1997 年の海上基地建設受入れをめぐる住民投票をきっかけに、基地に頼らない自立の地域おこしのためのエコツアーグループ「エコネット・美」として 1998 年に設立した。自然を切り売りし基地を建て、そのお金で生活するのではなく、基地から自立した地域社会をつくらなければならないという想いから、「地域おこし」「自然保護」「基地に頼らず命の自立」の３つを目的として掲げている。2015 年 9 月に筆者は初めてここを訪れ、体験した来訪者は自然への興味関心を出発点として、環境保全や地域振興、沖縄においては基地問題へとその関心を広げていく可能性があると実感した。理念として「基地に頼らない自立の地域おこし」をかかげているエコネット美でのエコツーリズムを検討することを通じて、嘉陽という地域の自立から、沖縄における基地経済からの自立がいかにして可能なのか考察したい。

エコツーリズムとはもともと、中南米を旅する旅行者が環境を傷つけない旅をしようと「エコツアー」を始めたことからその考えが広まった。当時は豊かな環境資源をもちながらも経済的貧困のために資源の保全を図ることができず、資源の切り売り生計をゆだねざるをえない地域が多くあった。生活のための手段が自然保護を脅かすという問題を解決するため、ビジネスである観光事業を自然保護に活用するという発想から 1980 年代初頭にエコツアーが提唱されたのであった。世界自然保護基金（WWF）ではこの観点から、エコツーリズムを①保護地域のための資金を作り出し②地域社会の雇用を創出し、③環境教育を提供することにより、自然保護に貢献する自然志向型の「観光」と、定義づけている。

真板昭夫はエコツーリズムにおける「資源」とは、自然や歴史、生活文化、産業、それらを守ってきた人々の技や知恵であり、それらを経済利用しつつも持続的な発展をはかるためには、観光客が地域の人々の長い歴史を通じた資源との関わり合いを追体験することが重要だと分析する。

以上のような研究から本報告では、まずエコネット・美の設立経緯を追い、その根底にある自然や自立に対する思想を分析しながら、エコツーリズムが「地域の自立」にどう活かされるのかを考察したい。

発表者氏名：広瀬絢菜
所属ゼミ：今泉裕美子ゼミ
タイトル：陸軍中野学校に見る諜報教育
発表概要：

本報告では戦前日本陸軍の諜報教育機関であった陸軍中野学校に焦点を当て、学校の存在や個人の経験を秘匿するという特殊な条件下で行われた、同校卒業生

などから「自由」と評された教育とはどのようなものであり、それが戦時中の日本軍の諜報活動にどのように活かされていったかを明らかにする。

陸軍中野学校とは、1938 年に設立された、旧日本陸軍の秘密戦教育の学校である。防諜・諜報・謀略・宣伝を通じた戦争を秘密戦と言い、第一次世界大戦を通じて、戦争の形態が総力戦に変わったことを機に広まっていった。軍事力だけではなく国民の心理や社会の状態が勝敗に大きく影響するため、情報の分析が重要な時代になったのだ。第二次世界大戦に向かう時期には、日本の軍部においても秘密戦に関する専門教育機関の必要性を感じるようになった。

陸軍内において、秘密戦分野への対応が見られたのが 1936 年ごろである。防諜においては、諸列強同様の取り組みを日本でも行っていたが、諜報についても、特務機関などの戦争の経験を持っていた秋草俊らを中心に、諜報の重要性が訴えられていった。そして 1938 年 7 月に設立されたのが情報勤務のスペシャリストを育てる後方勤務要員養成所であり、翌年これが陸軍中野学校となった。教育内容は、さまざまな国の語学、文化、歴史を学ばせる一方で、諜報活動に必要な暗号解読法や変装術、開錠術などが教えられていった。

ここで報告者が注目したのが、当時日本の国内では総動員で戦争に向かい、さまざまな統制がある中で、陸軍中野学校の教育が「自由」な空気の中で行われていたとの卒業生などによる評価である。卒業生が書いた学校史である、中野校友会編『陸軍中野学校』（原書房、1978 年）や、卒業生の手記や聞き取りを中心に日本の諜報活動の歴史をまとめた文献である畠山清行著・保阪正康編『秘録 陸軍中野学校』（新潮文庫、2003 年）からは、教育の一環として、天皇の批判などの自由な言論が認められていたことや、授業の前後の自由時間に制限がないことなどから、当時の日本社会や軍学校とは結びつかない「自由」さが強調されている。

その一方で、当時情報機関を持つ国々の立場から見れば、山本武利「陸軍中野学校の秘密戦教育」『新潮 45　2015 年 11 月号』（新潮社、2015 年）にある「天皇制批判の自由があったという人がいるが、一見自由主義とされるものは、生徒にブレインストーミングという頭の訓練をさせる一種の兵棋訓練である」というように、諜報員の教育として当然だとする評価も理解できるだろう。

当時国内での国家総動員法や治安維持法など様々な統制がある中で行われた諜報教育としての「自由な教育」にはどんな意味があるのだろうか。この「自由」のなかで学んだ技術や語学、考え方は、卒業後の諜報・謀略活動にどのように活かされていったのか、列国の諜報員と何が違うのかを考えることで、日本の戦時中に行われた諜報教育の特徴を明らかにしたい。

発表者氏名：原涼馬

所属ゼミ：中島成久ゼミ

タイトル：なぜ日本の捕鯨は強く反対されているのか

発表概要：

①捕鯨国 vs 反捕鯨国の言説の比較

捕鯨問題を知るための対立構造を説明する。

捕鯨国は古代から鯨を利用しており、鯨を食用と非食用資源として用いてきた。非食用資源として、鯨の骨粉でできた畑の肥料や鯨のヒゲでできたからくり人形のゼンマイの仕掛けの部分、稲の害虫を殺すために水田に散布する農薬（鯨油）など様々なクジラ製品が作られた。日本は戦後の食糧難を南極海の商業捕鯨で解決したが、元捕鯨国であり、当時南極海で捕鯨をやっていた英、豪、NZ は自国の利権が脅かされると思い、日本の南極海捕鯨に反対した。そして、現在の日本の調査捕鯨は類似商業捕鯨に該当するとして批判されている。

反捕鯨国はもともと捕鯨国であり、日本と同様に蝋燭や石油となる鯨油採取を目的に捕鯨産業を行っていた。しかし、1960 年代以降、米国がベトナム戦争で使った核廃棄物や枯葉剤の未処理による環境破壊に対する反省を機に、捕鯨国から反捕鯨国へ転換する。

②国際司法裁判所の判決

ここ数年の捕鯨問題で、日本が打撃を受けた事例を紹介する。

2010 年、豪州は日本の南極海調査捕鯨が商業目的にあたるとして国際司法裁判所に提訴した。例えば、日本は鯨類の科学的研究のために内臓に蓄積されて

いる汚染物質を調べる致死的調査を推進するのに対し、豪州は非致死的調査を行うよう主張している。しかし、2014 年、日本は調査捕鯨だとは認められず敗訴し、翌年 2015 年には日本は捕鯨を行わない鯨類資源調査を開始した。

しかし、日本がこの判決に敗訴した理由は日本の調査捕鯨は商業捕鯨の再開に向けた科学的研究であると断言できる根拠の不十分さや日本人のコミュニケーション力の不足であり、これが日本の捕鯨が世界から強く反対される原因であることを述べる。

③今後の展望

日本の調査捕鯨と沿岸捕鯨は継続できるか否かを述べる。

ドキュメンタリー映画「ザ・コーヴ（2009 年公開）」は日本のイルカ漁の残酷さを描いているため、世界中から反捕鯨の声があがっている。しかし、この映画の問題点は、反捕鯨団体の主張や行動に焦点を当て過ぎているため、和歌山県太地町のイルカ漁を営む住民の声が少なく、本来のイルカ漁のメリットがわからず、一方的にイルカ漁の悪行として表現している。つまり、反捕鯨団体の主観的な考えがあるかもしれない。

そのような主観性を排除し、反捕鯨国が主張した環境破壊が鯨類資源の減少へ陥れる意見が本当かどうかを確かめるために、鯨類資源調査以外に水質が汚染されているか否かを調べる必要がある。したがって、徹底的な分析力の有無が今後の捕鯨継続を左右する。

発表者氏名：西川結子

所属ゼミ：曽士才ゼミ

タイトル：コリアンタウンから多国籍な街へ ～新大久保における街づくりの現状と課題～

発表概要：

1. 調査目的

「コリアンタウン」というイメージが定着している新大久保の街で、近年変化が起きている。東南アジア系の住民が増加し、彼らが経営する店が増加している。しかし、彼らの大半は、日本人や韓国人とは交流を持っておらず、地域のイベントにも参加していない。これらの問題を解決し、「多国籍な街」として街づくりを行うためには、どうすればよいのか。新大久保の街づくりに関わる人々にインタビューを行い、考察していきたい。

2. 現状

2016 年 10 月現在、新宿区には 1 万 325 人の東南アジア系の人々が暮らしている。2003 年 10 月の統計 2764 人と比べると 7561 人増えている。この統計は 1 万 4 千 645 人の中国人の人口に続き第 2 位である。2003 年 10 月に一番人口が多かった朝鮮・韓国人は現在、1 万 246 人で中国や東南アジア系の人口増加とは異なり唯一減少傾向が見られる。この人口の変化は新大久保駅周辺の飲食店の出店数にも反映している。2001 年と 2016 年の新大久保駅周辺の地図を見比べてみると、以前に比べ、東南アジア系レストランが増え、多国籍化していることがわかる。コリアンタウンとして知られていた新大久保だが、現在はさまざまな国の人でにぎわっている多国籍の街になってきている。

3. フィールドワークでのインタビュー対象者

①伊藤節子さん（新大久保振興組合 理事長）

新大久保振興組合…大久保まつりや新大久保の年末イルミネーション、路上ライブコンサートや天使のフラッグなどの監修

②山本重幸さん（共住懇）

共住懇…1992 年に発足した「多文化共生まちづくり」を掲げ新宿区内を拠点に活動する市民団体

③呉さん（韓国商人連合会）

韓国商人連合会…2014 年発足した団体

新大久保を走るシャトルバスや新大久保映画祭を運営

④カトリーさん（ネパール）（飲食店 ホットチリ）

⑤デビさん（ネパール）（食材店 Barahi）

⑥ファワリさん（インド）（食材店 GREEN NASCO）

⑦ネパール人シュレスタさん（ネパリ・サマチャー）

在日ネパール人向けに、ネパールと日本のニュースを掲載した新聞を発刊

4. インタビューの分析

インタビューを行った結果、新大久保商店街振興組合の伊藤理事長や、韓国商人連合会の呉会長は、「東南アジア系の人々にも新大久保まつりにスタッフとして参加してほしい」「コリアンタウンではなく、多国籍な街として知られるようになりたい」と考えていることがわかった。しかし現状は、様々な問題を抱えている。それらの問題を解決する方法を考察し、これからの新大久保の街づくりについて考えたい。

5. 参考文献・参考 URL

稲葉佳子（2008）『オオクボ都市の力－多文化空間のダイナミズム』学芸出版社

濱田国佑（2006）「地域住民の外国人との交流・意識とその変化：群馬県大泉町を事例として：第 4 章 共生に関する展望と町に対する意識」『調査と社会理論』

22 号 p.31-57
「住民基本台帳人口　外国人住民国籍別男女別人口」（新宿区ホームページより）
http://www.city.shinjuku.lg.jp/kusei/file02_00029.html

発表者氏名：及川園加
所属ゼミ：今泉裕美子ゼミ
タイトル：コーヒーのフェアトレード ―日常の消費は新経済秩序の構築へと繋がるのか―
発表概要：

本報告では、コーヒーという一次産品に焦点をあて、コーヒー生産国とコーヒー消費国との不公正な貿易が生じてしまう社会的構造を明らかにする。そして、日常の消費を通し、公正でオルタナティブな貿易を行うフェアトレードは、貧困や抑圧のない新しい経済秩序の構築に繋がるのかを、日本において南北の民衆同士の繋がりを重視する民衆交易を行うオルター・トレード・ジャパンの取り組みを通し考察する。

コーヒーは、今や世界中で愛され飲まれている飲み物の一つであり、世界でも多く取引されている一次産品の一つだと言われている。しかし、コーヒーはその特質がゆえに、国際貿易によって南のコーヒー生産者は利益のほんのわずかな取り分しか手にすることが出来ず、利益の大半は北の消費国のグローバル大手企業が手にする。コーヒー生産者たちの生活は豊かになることはなく、数多くのコーヒー生産者が貧困に苦しみ、日々の生活を生きのびることに精一杯という状況だ。最貧国とよばれる国（特にアフリカに多い）では、国の経済をコーヒー豆の貿易に大きく依存している国も多い。大航海時代以来の歴史的な流れのなかで生み出されてきた南北間の格差の構図は、1980 年代に新自由主義の流れが世界に広まったことで、さらにその格差を拡大させた。コーヒー産業においては、巨大多国籍企業と呼ばれる焙煎企業が生産から流通まですべてを自社で行うことで世界市場を支配し、その莫大な利益の裏で立場の弱い南の生産者たちが苦しめられている。

このような現状に対し、南の諸国にとって公正な取引を行い、適正な価格を継続的に支払うことで、南の弱い立場にいる生産者の暮らしを守るのがフェアトレードである。現代世界の不平等な南北関係を是正するうえで、フェアトレードは期待しうる手段といえる。しかし、フェアトレードを評価する声がある一方、その問題点や矛盾を指摘する声があるのも確かだ。例えば、フェアトレードラベルである。フェアトレードラベルができたことによって、多くの企業がフェアトレードのマーケットに参入し、その結果消費者のフェアトレードに対する認知度は高まった。しかし、北の消費者の趣向を重要視するあまり、消費者資本主義に対抗するためのものであるフェアトレードが、むしろこの流れに乗ってしまっていると懸念されている。フェアトレードが目的になってしまうのではなく、不平等を生じさせている構造を変えるための手段となるにはどうしたらよいのか。そのヒントを日本のフェアトレードの先駆的な存在であり、生産者と消費者とのつながりをつくり出している組織、オルター・トレード・ジャパン（略称：ATJ）という企業の取り組みから考察したい。ATJ が行うコーヒーの民衆交易から、生産者と消費者との顔の見える貿易の意義を考えたい。

発表者氏名：鶴巻百門
所属ゼミ：今泉裕美子ゼミ
タイトル：横須賀市から見る地域と米軍基地の関係
発表概要：

本報告では第二次世界大戦以前から、日本海軍最大の拠点として栄え、現在はアメリカ合衆国海軍(以下、米海軍と略)第七艦隊の拠点である米横須賀海軍基地を有し、軍港としての機能を担う「基地の街」である横須賀を事例に、地域の中に外国の基地が存在することの意味を問う。

神奈川は米軍施設数、米軍専用施設面積ともに全国三位と本土随一の「基地の街」である。なかでも横須賀は市が二〇〇八年に実施した市民アンケートで市民による横須賀のイメージに「基地」が上位に位置するなど、いまなお「基地の街」のイメージは根強い。

『新横須賀市史』から横須賀に「基地の街」としてのイメージが根付くに至った歴史的背景が読み取れる。横須賀は旧日本海軍の鎮守府が置かれていたこともあり、古くから軍港として栄えてきた。しかし、日

本の敗戦後の一九四五年八月三〇日に占領軍が横須賀鎮守府に進駐・占領し、旧帝国海軍が解体していくなかで、「海軍の町」であった横須賀は新しい途を探らねばならなくなったのである。そこで横須賀は旧日本海軍に全面的に頼った軍港都市から、民需を主にした工業、貿易・商業・漁業を主にした港湾、東京、横浜に隣接する地理的優位性を活かした観光、さらには旧軍の諸学校を利用した高等教育機関の誘致などを計画することで「平和産業港湾都市」を目指していくことになる。

しかし、平和産業港湾都市を志向しながらも、朝鮮戦争やベトナム戦争の勃発など国際情勢の影響により、米軍基地や自衛隊とともに存在しなければならない状態も生じていた。そのようななかで横須賀市が最も影響を受けたのが、一九七三年、原子力空母ミッドウェーの横須賀の事実上の母港化であると考えられる。なぜなら、それ以後アメリカはこの母港化により、横須賀基地が「ポスト・ベトナム」へ向けた新しいアジア戦略体制のなかで不可欠な要素となったことを認めたからである。

以後、横須賀市と米軍基地両者は思惑の一致から歩み寄りとも取れる姿勢を示してゆくこととなる。すなわち、横須賀基地を手放したくなく、それゆえに軍事的・政治的要素を見えづらくすることで地域住民からの反発を避けたい米軍の思惑と、平和産業港湾都市を志向するうえで米軍基地は大きな障害であり返還を望みつつも、横須賀基地が中枢基地と位置付けられた以上、返還への道のりは困難を極めると判断し共存を探る形で観光資源化へと舵をきろうとする横須賀市側の思惑である。

これら歩み寄りの結果、栗山が『神奈川と米軍基地』のなかで指摘するように現在では米軍基地は横須賀市民にとって「見えない」存在となった。そこで本報告では米軍基地が市民にとって「見えない」存在と指摘されるほどに地域に溶け込むことの問題点を明らかにし、今後いかに横須賀が基地と向き合うべきかを考察する。

発表者氏名：矢部彩香

所属ゼミ：佐々木一惠ゼミ

タイトル：倫理的消費に「おしゃれ」は必要か ～日本におけるエシカルファッションの事例から～

発表概要：

私たちは商品を購入する際どんなことを考え、選択しているだろうか。消費は生活を送る上で欠かせないものとなっている。消費社会についてはT.B ヴェブレンの「見せびらかしの消費」、J.ボードリアールによる「記号的消費」などによってこれまで研究されてきた。本発表では新たな消費の形態として現代にみられる「倫理的消費」に焦点を当てる。倫理的消費の定義は一つに定まっているとは必ずしも言えないが本発表では「自分の消費行動における背景や影響を考慮し商品を通して課題解決を行う消費行動」（葭内,2013)とする。身近なものとしては、熊本地震での倫理的消費がある。震災後に復興支援のため「熊本を応援しよう」といったキャッチコピーの商品がスーパーなどに並び商品を購入することで応援しようという動きは記憶に新しい。また、消費庁による消費基本計画に倫理的消費が取り込まれ、２０１５年には「倫理的消費」調査研究会が発足されている。このような取り組みからも今後注目すべき項目として倫理的消費がとらえられていることがわかる。

倫理的消費における既存研究では、消費によるアイデンティティ形成意識と社会的意識が相乗することによって倫理的製品の購入が促進することが明らかになっている(玉置,2014)。そこで本発表では、古くから消費によるアイデンティティ形成に用いられるとされてきた衣服(玉置,2014)を取り上げ、倫理的消費の例としてエシカルファッションを用いる。また、エシカルファッションを取り巻く現状について把握するため、中板橋にある「エシカルライフスタイルショップ　One Drop」店長の山口裕子さんから聞き取り調査を行った。この聞き取り調査の結果と資料分析より、「エシカルファッション＝おしゃれなもの」として確立していこうという流れが存在していたことが浮かび上がっていた。

そこで本発表は、エシカルファッションが商品の購入を通して課題解決をおこなうという倫理性のみでなくファッション性や美意識を組み込み、作り上げられている点に着目する。なぜそのように作り上げられ

ていく必要があるのか、なぜ以前は「エシカルファッション＝おしゃれ」として確立していなかったのかについて消費とアイデンティティ、ソーシャル・プロダクト・マーケティングという二つの視点から検討し、倫理的消費の特徴を明らかにする。

【参考文献】

デルフィス・エシカル・プロジェクト(2012.3)「まだ"エシカル"を知らないあなたへ：日本人の11%しか知らない大事な言葉」産業能率大学出版部

野村尚克, 中島佳織, デルフィス・エシカル・プロジェクト(2014)「ソーシャル・プロダクト・マーケティング：社会に良い。信頼されるブランドをつくる3つの方法」産業能率大学出版部

間々田了(2014)「倫理的消費におけるアイデンティティ形成意識と節約意識の影響」『流通経済』16巻3号

葭内 ありさ (2013)「消費者教育におけるエシカル・ファッションの有用性」日本教育学会大會研究発表要項 72, 148-149

発表者氏名：喜舎場洋平

所属ゼミ：佐々木一惠ゼミ

タイトル：黒人スポーツ商業主義 ～米国野球を事例に～

発表概要：

今日、私たちが見るスポーツは、人々の間に存在する様々な壁を取り除く役割を果たすものと賞揚されている。その壁の一つに人種がある。一昔前までは、「人種の壁」はとても強固なものであり、白人は黒人と手を取り合うことはなかった。だが、その壁を破り、黒人と白人の共存が可能になり得た分野とされるのがスポーツである。つまり、スポーツは白人と黒人を繋ぐ橋渡し的な存在としても捉えられている。ただ、このスポーツがもたらす作用が表向きで言う「人種の壁」撤廃とは裏腹に、スポーツが商業化する過程で「人種搾取」を促していた面もあった。

そこで本発表では、白人リーグに初の黒人野球選手ジャッキー・ロビンソンが入団した事例をアメリカ合衆国におけるスポーツのビジネス化との関係から分析していく。とりわけ、ニグロ・リーグと白人リーグの興行面に焦点を当て検討することで、白人プレイヤーと黒人プレイヤーが同一の組織でプレーする機会が人種差別撤廃であったとする考えの裏側にあった、スポーツ商業主義の台頭との関係について明らかにしていく。

①ニグロ・リーグが誕生したのは 1885 年である。南北戦争後、かつて奴隷であった黒人は大農園の白人地主の下で、過酷な生活を強いられた。そのような環境を生き抜くための娯楽として始まったのが、アマチュア野球であった。チーム数が増えると同時にプロ化が図られ、リーグ制も結成されていった。しかし、白人リーグからは隔離されたものとなった。そのため、黒人はマイノリティ集団としてのニグロ・リーグの活性化を図り、1940 年代には白人リーグよりも盛り上がりを見せるようになった。

②ニグロ・リーグが盛り上がりを見せる中、白人リーグは異なる様相を見せた。白人リーグは黒人リーグと異なり、昼間の試合や、ゆったりとした試合運びであったため、盛り上に欠けていた。また、第二次世界大戦中はゴムやガソリンの不足により、選手や観客の車での移動が厳しいものとなった。低迷する観客動員数の増加や白人リーグの人気向上のために、1947 年に白人リーグのブルックリン・ドジャーズに初の黒人プレイヤー、ジャッキー・ロビンソンが入団することとなった。

本論では、ジャッキー・ロビンソンの白人リーグへの入団の事例の分析から、黒人と白人のスポーツでの融合が単なる「人種の壁」撤廃が目的であったわけではなく、観客動員や資金を集めるためのスポーツの商業化の台頭と密接な関係があったことについて論じる。

【参考文献】

等々力賢治　1987　「アメリカ黒人とスポーツ：人種差別の実態とその経済的・社会的背景」　長野県短期大学紀要

川島浩平　2008　「『ダーウィンズ・アスリーツ』のその後 10 年ーアメリカにおける人種とスポーツの間ー」　武蔵大学

佐山和夫　2002　「野球から見たアメリカ」　中央公論新社

佐山和夫　1994　「黒人野球のヒーローたち『ニグ

ロ・リーグ』の興亡」　中公新書

発表者氏名：鶴岡洋乃
所属ゼミ：曽士才ゼミ
タイトル：観光大国を目指す日本における民泊の現状とその可能性
発表概要：
2020 年に開催される東京オリンピック・パラリンピックに向けて、さらに増加が見込まれる外国人観光客の受け入れに民泊を活用するということが話題になっている。明確なルールがない中で急速に増加した民泊は問題点も多く、世間ではマイナスのイメージが強い。一方で、民泊は宿不足の解消だけでなく日本のおもてなしを体験してもらえる良い機会となりうると期待されはじめている。本研究では観光大国を目指す上でのカギとも言える民泊の実態と可能性を探る。
現在日本では旅館業法によって個人は営業目的で不動産物件を宿泊施設として運営することができない。その中で国家戦略特別区域の民泊特区として東京都大田区と大阪府が民泊を条例化している。しかし、大田区では「6 泊 7 日以上の宿泊者」しか受け入れることができないなど運営するための条件が厳しい点、申請手続きに時間がかかる点から、実際は 9 月現在で 23 件しか認定されていない。また、2016 年のマイナビの調べによると民泊の普及に賛成が 42.5%、反対が 57.5%となっており、反対している人々の主な理由は近隣住民に対するごみや騒音問題であった。近隣住民からの理解を得ることも民泊を運営する上で欠かせないものである。
一方で、個人が手軽に空き家・空き部屋を使って、利用者を泊めることで収入を得る民泊ビジネスが世界的に注目されており、そのマッチングサービス最大手が Airbnb である。ホストがゲストに空き部屋を提供し、ゲストのみでその部屋を利用する「丸貸し型」、宿泊施設を提供するホストと部屋に泊まるゲストが同じ建物内に同居する「ホームステイ型」と大きく 2 つに分けられる。さらに、Airbnb ではホストに対しゲストが口コミをするという制度があり、その評価によってアクセス数の伸びが変動し、評価が高いホストは「スーパーホスト」に認定される、というホスピタリティを格付けするものがある。ホストもゲストも手軽に民泊を運営・利用できるこのサービスは、日本では法的に認められていないにも関わらず、急速に広がってきている。
今回われわれは大田区役所に民泊に関してのお話を伺い、また Airbnb のホストの方々のミーティングへの参加、ホストの方の家に訪問するなどのフィールドワークを行い、民泊の現状を探った。本発表では調査から見えてきた民泊の現状と可能性を論じる。
民泊は旅館やホテルよりもホストとゲストの距離が近く、活発な異文化交流を可能とする。アトキンソン氏は日本の曖昧なおもてなし文化よりも観光資源を世界に発信していくべきだと述べているが、民泊が日本でさらに受け入れられていけば、発信していく価値のある日本人のおもてなし精神を高めることができると考える。よりリアルな日本の生活に触れることができる宿泊形態、民泊は身近な異文化交流を通じて日本に対する海外からのイメージを上げ、また日本を訪れたいと思ってもらえるような環境を作り出すことができうる点から日本が観光大国になるためのカギとなるだろう。
参考文献
デービット・アトキンソン 『新・観光立国論』 東洋経済新潮社 2015 年
宮崎康二『シェアリング・エコノミー：Uber、Airbnb が変えた世界』日本経済新聞出版社 2015 年

発表者氏名：内山一文
所属ゼミ：リービゼミ
タイトル：1970 年代デンマークポルノ映画がドグマ 95 に与えた影響
発表概要：
本研究の目的は、1970 年代デンマークポルノ映画の変遷から 1995 年に始まった映画運動・ドグマ 95 に与えた影響を検証していくことである。
CiNii や国立国会図書館サーチを用いて日本のデンマーク映画研究を調べると、映画史初期のカール・テオドール・ドライヤーやベンヤミン・クリステンセンの時代、1990 年代に始まった映画運動ドグマ 95 の研究が主となっている。しかしながら、この 2 つの時代

の狭間である約半世紀に関してはほとんど研究されておらず、文献でもごく僅か程度しか述べられていない。

1970 年代ポルノ映画史に関して、日本では小松弘が『北欧映画完全ガイド』にて僅か 1 ページにまとめているに過ぎない。2016 年に長澤均が書いたポルノ映画史に関する文献『ポルノ・ムービーの映像美学』でもほとんど言及されていない状況である。しかし、1970 年代には日本で 15 本のデンマークポルノ映画が公開された。また当時日本で公開されたデンマーク映画は 1979 年に公開された『奇跡』という作品を除き総てポルノ映画である。つまり、デンマークポルノ映画は社会的・国際的地位を獲得していたにも関わらず、日本のデンマーク映画研究では軽視されていた。これほどまでに成功を収めたデンマークポルノ映画は、後世のデンマーク映画史に何らかの影響を与えた筈である。現に 1970 年代デンマークポルノ映画研究を行ったモーテン・シングは『DANSK PORNO/DANISH PORN』で、ラース・フォン・トリアーの作品に影響を与えたと言及している。ならば、彼が始めた運動・ドグマ 95 の作品群にも影響を与えたのではないだろうか。

ドグマ 95 とは、1995 年にトリアー監督がトマス・ヴィンターベアと共に立ち上げた映画運動。「純血の誓い」と呼ばれる 10 の制約下で映画を製作した。『セレブレーション』や『ミフネ』などといった作品が国際的に評価され一世を風靡したが、2002 年に事務局が閉鎖し、わずか製作本数 35 本で幕を閉じた。

本研究では、デンマークで敢行されている文献・論文、デンマーク映画協会(DFI)による解説を中心に研究を行った。また実際に 1970 年代デンマークポルノ映画及びドグマ映画を鑑賞し分析した。

その結果、1)ドグマ 95 は従来の映画の批評を基に生まれた運動　2)国内外に普及したデンマークポルノ映画が持つ実験性の伝播　3)両時代に共通する「規則による自由さ」 の 3 つの側面からドグマ 95 が 1970 年代デンマークポルノ映画に影響を受けていることが分かった。

本研究は、注目されることのなかった 1970 年代デンマーク映画史を明らかにすると共にドグマ 95 を捉える新しい視点を提示することができた。今後、1969 年デンマークポルノ映画解禁前後の作品分析を行い、1970 年代デンマークポルノ映画史をさらに明らかにしていきたい。

B.ポスター部門

発表者氏名：那木緩菜、林彩葉、市川京、染野瑞希、山本紗弓、木内真穂、小川滋、栃木真優、深井蒔子
所属ゼミ：中島ゼミ
タイトル：インドネシアの生物多様性の現況と生物施策について
発表概要：今、この瞬間でさえも、インドネシアで数々の動植物が絶滅の危機にさらされていることをご存知だろうか。もし、それはみなさんが毎日使用する紙やシャンプーが原因の一つだとしたら？

大小の島々からなるインドネシア。かつてはうっそうとした熱帯雨林に覆われたこの国の島々でも、今では広く森林の伐採が行われ、原生の姿をとどめている場所はきわめて希になっている。日本もまた、インドネシアから大量の木材を輸入する国の一つ。中島ゼミでは、インドネシアの生物の現況と保全施策について発表を行う。

インドネシアの面積は地球の地表の 1.3%に過ぎないが、世界に残存する熱帯雨林のおよそ 10%がインドネシアにあり、そこでは役 325,000 種の野生動物が生息するといわれている。しかし今、インドネシアの豊かな生物多様性は急速に失われ、大きな危機にさらされている。特に、スマトラ島では、かつて島の大部分を覆っていた熱帯雨林が、1980 代以降急速に失われてきた。とりわけ、減少が著しいのは、島の東部に広がる低地の熱帯雨林で、今のまま伐採が進んだ場合、2050 年までにはこれらの森が全滅する恐れがある、と指摘されている。
横行する違法な森林伐採、ヤシ油を採るためのプランテーションの建設、また紙パルプの生産を目的としたアカシアの植林など、スマトラ島の熱帯雨林では、さ

まざまな形で森林環境が脅かされ、そこに住む住民の生活にも大きな影響がでてきている。トラやゾウ、オランウータンなど数多くの希少な野生動物も、絶滅の危機に追い込まれており、人と野生動物の間で悲劇的な遭遇事故も頻発している。この問題を解決するには、野生動物が人の集落に近づくのを食い止めるだけではなく、地域の人たちが安心して暮らせる環境を作りながら、野生生物が生きられる自然を保全しなくてはならない。そのため、様々な施策が行われているが、まだまだ解決の目途が立っていない。

そんな、インドネシアの現状と生物多様性保全施策、これからの課題について、1.生物多様性の概要、2.保全地域の管理状況、3.保全地域外での保全施策、4.生物多様性保全施策の課題の 4 つのトピックで発表を行う。

発表者氏名 :末竹広樹、稲富梨奈、大山一輝、小田茜、久貝大介、古池萌、金野有紗、佐伯茜、園本樹、中村亮仁、山田未来、吉田恵美佳
所属ゼミ：岡村民夫ゼミ
タイトル：スタジオジブリと武蔵野の開発史
発表概要：「武蔵野を除いて日本にこのやうな処がどこにあるか。北海道の原野にはむろんのこと、那須野にもない、そのほかどこにあるか。林と野とがかくもよく入り乱れて、生活と自然とがこのやうに密接して居る処がどこにあるか」。これは明治時代の小説家、国木田独歩の代表作『武蔵野』(1898)の一節である。広辞苑では、武蔵野を「武蔵野とは埼玉県川越以南、東京都府中までの間に広がる地域」と定義している。また、旧武蔵野国全域が今の武蔵野であるともいわれている。国木田が生きた時代の武蔵野は先述の一節からわかるように人間の生活と自然が適度に共存した、日本で唯一の地域であった。しかし、時代が進むにつれて、その理想郷は人間の手によって破壊されつつある。

国木田が没してから 77 年後の 1985 年。吉祥寺駅の近くに、あるアニメ制作会社が設立された。株式会社スタジオジブリである。スタジオジブリは宮崎駿や高畑勲を中心に、『天空の城ラピュタ』や『となりのトトロ』など様々な代表的な作品を世に送り出した。また、2001 年に公開された『千と千尋の神隠し』は第 75 回アカデミー賞でアカデミー長編アニメ映画賞を受賞するなど、スタジオジブリの作品は国内だけでなく、世界中に多大なる影響を与えた。

スタジオジブリの作品のほとんどには、モデルとされた町や建物、風景が存在している。これは宮崎駿や高畑勲の書籍やインタビュー、それらに基づくフィールドワーク等によって知ることが出来る。例えば『となりのトトロ』の主な舞台となる緑豊かな集落は、聖蹟桜ヶ丘、神田川、所沢、秋田などといった様々な風景が入り混じったものから発想を得ていると宮崎駿は述べている。また、『平成狸合戦ぽんぽこ』は多摩ニュータウンが、『耳をすませば』は聖蹟桜ヶ丘が舞台となっている。これら二つの作品には実際に多摩に存在する学校やマンション群の描写がちりばめられている。その他の作品にもそれぞれモデル地が存在しており、聖地巡礼として様々な人々がその地を訪れている。私たちは、作品考察を通して、これらの聖地が武蔵野に集中していることに気づいた。

この発表ではスタジオジブリの作品『となりのトトロ』、『平成狸合戦ぽんぽこ』、『耳をすませば』を取り上げ、武蔵野の開発について、実際に行ったフィールドワークと共に考察する。『となりのトトロ』では 1953 年、『平成狸合戦ぽんぽこ』では 1960 年代、そして『耳をすませば』では 1994 年の武蔵野の姿が描かれている。上記の作品を比較すると、年代が進むごとに自然描写が少なくなっていることに気づく。これは、20 世紀の武蔵野における人間の都市開発が背景にある。私たちは、上記三作品から武蔵野の開発という問題に着目した。これら三本のスタジオジブリの作品を通して、武蔵野の開発によって失ったものについて考え、人間と自然の共存、そして今後の開発の在り方について見つめ直していく。

発表者氏名：鈴木唯、三浦峻、村田まりな
所属ゼミ：重定如彦ゼミ
タイトル:AI とプログラムが作り出すコンピューターエンタテイメント
発表概要：重定如彦ゼミでは、それぞれの個人研究を

1つにまとめて発表する。
「ぷよぷよ」における「連鎖」の研究（鈴木）
・制作動機
今回、私は、私が幼少期から遊んでいるゲーム「ぷよぷよ」を模したアプリケーションを制作した。私が今回本ゲームを制作した動機は２つある。1 つは、ゲームを自分の手で制作することで、そのゲームにおけるプログラムをより深く理解できると考えたこと、もう 1 つは、周囲の人にぷよぷよの面白さを知ってもらいたいと考えたことである。
ぷよぷよは、フィールドへ落ちてくるブロック「ぷよ」を積み上げながら、同色のぷよを 4 つつなげて得点を稼いでいく対戦型パズルゲームである。つながったぷよが消える性質を利用して、次のぷよを消す「連鎖」を組むことができる。この連鎖がゲームの勝敗の鍵を握る。今回私が本ゲームの AI を制作するにあたり、この連鎖を多くつなげられるようなプログラム（階段積みや、とりあえず積んでみてその跡に崩していくなど）を、アルゴリズムが紹介されている web ページを参考にしながら複数作成した。
人物当てゲームの裏側のプログラム（三浦）
・制作動機
今回の私の研究はアキネーターの再現である。前回はゲーム用の AI を組んでみたので今回はより本格的な AI の制作をしたいと考え､それを分かり易く紹介する為にこのプログラムを選んだ。
・アキネーターとは
アキネーターとはネット上で遊べる人物当てゲームのことで、コンピューターがプレイヤーに質問していき、プレイヤーが思い浮かべている人物やキャラクターを当てるゲームのことである。このプログラムの形式はエキスパートシステムと呼ばれるプログラムに類似している。エキスパートシステムとは AI の一種で、専門知識を体系化してコンピューターに記憶させ、推論や問題解決をさせるプログラムである。主に質問しながらその回答に基づいて適切な解を提示するプログラムをさす。
・難しかった点、工夫した点
本プログラムではデータベースを作成して質問を通じてキャラクターを当てるのだが、質問を自動で答えるプログラムを組み立てることと SQLite のプログラムを組み込むことに苦労した。工夫した点は質問の優先順位を随時変更し、表示する質問を変えられるようにした点である。
情報教育の導入をエンターテイメントから（村田）
・制作動機
情報教育の若年化が進み、早期からプログラミングを学ぶ現状がある中で、将来情報科教員を目指す者として生徒がよりコンピューターの奥深さに興味を引く学習のきっかけとしてゲームというエンターテイメントに注目してみようと考えた。
・作品紹介
冒険ゲームは VisualBasic を使用して制作したキー操作によるゲームである。全体は 2 つのステージに分かれており、左右の移動やジャンプを中心とした動きの中で、第 1 ステージではアイテムを取得しながら障害物や動くブロックを乗り越える仕組み、第 2 ステージではプレイヤーが攻撃可能な仕組みを作成した。

発表者氏名：舘美月、菊池麻里、馬可欣
所属ゼミ：熊田ゼミ
タイトル：国際文化をグローバルに学ぶ－私たちの留学
発表概要：　熊田ゼミでは、「身体性と多文化共生社会」を大きなテーマとしています。2015 年度派遣留学生として、渡欧した 3 名で「身体性」を通して得られる実感、体験を発表します。
「フランスの大学で地域文化活動を学ぶ」（舘美月）
派遣留学制度で、フランス・アンジェの西部カトリック大学で、そこの文化活動に実際に参加して、実態を調査するために留学してきました。まず、フランス全体の話として、フランスが起源の "journées européennes du patrimoine" を紹介します。9 月第 3 週末は、「ヨーロッパ文化遺産の日」となっており、歴史的建造物やミュージアムに無料または、割引額で入ることができます。また、通常開放していない貴重な部分も、見学できるのがこの取り組みの特徴です。次に地域へ目を向けると、アンジェでは、"accroche cœurs"という取り組みがあります。街をアートのためのキャンバスに見立てて、至る所でアートイベントを

開催するというものです。このように、フランスでの文化活動体験を発表します。

「オーストリアの大学で文化の融合を学ぶ」（菊池麻里）

ヨーロッパの中心に位置するオーストリアには、東西南北の国々から多くの影響を受けた文化が成立しています。ウィーンに留学をした一年間で、実際に自分の目で見て、経験し、学んだことの中から、特にオーストリアの食文化に焦点を当てて、オーストリアでの文化の融合について発表します。食事は生きる上で誰にとっても必要不可欠なものですが、それだけではなく、その土地の料理からは、その国の歴史や、ほかの文化に対する寛容性をも知ることが出来ます。例えばウィーナーシュニッツェルは、もともと北イタリアのミラノからもたらされたものであると言われていますが、現在ではオーストリアの有名な料理となっています。このように、オーストリアでは様々な国や文化から影響を受け、融合した食文化を人々の日常の生活の中に見ることが出来ます。

「イギリスの大学で MA Intercultural Communication を取得しよう」（馬可欣）

今回のポスター発表に於いて、本学部の学生たちに進路の一つとして、「イギリスの大学院に進学する」可能性を提示したいです。主に紹介したいのは、本学部の SA 先として馴染みのあるリーズ大学の Professional Language and Intercultural Studies MA コースです。コースの概要、入学条件、卒業要項などの基本的な情報の他に、カリキュラムから幾つかの授業をピックアップして、詳しく参加者に説明したいと思います。さらに、ヴォーリック大学、マンチェスター大学などの、MA Intercultural Communication を持つ大学の例を挙げます。

興味のある方は、こちらで用意する各大学の WEB の QR コードをスキャンしたり、食文化の写真や文化活動の動画をパソコンで閲覧したりすることで、「身体性」をより身近に感じていただけると思います。

発表者氏名：新崎椋司、米川昌杏、濱口彩華、西山梨菜、武田花梨、小松玲菜、福原知佳、栗原邑珠、今井奏、土方日向、小林彩采未、坂井桜、玉井瑛理、中西真由佳、福田愛、山口万柚子、青木優里香、磯野志保、河田智大、若宮樹、和泉亜里紗、阿部早也香

所属ゼミ：稲垣ゼミ

タイトル：2016「高郷プロジェクト」活動まとめ

発表概要：毎年稲垣ゼミの活動の一環として福島県喜多方市高郷村小土山集落の地域活性化に協力してきた。2016 年度もこの取り組みに参加することができたため活動記録としてポスターにまとめ学生をはじめ、多くの方に広くゼミの活動を知ってもらう機会とする。今年度の活動内容としては、たかさとウォークの一環としてウォーキングコースに設置する絵画をゼミで制作し、また小土山集落からの依頼を受けてゼミ生一人ひとりがロゴマークやその他プランを考案した。これらにについてポスター形式にて詳しい発表を行う。

発表者氏名：川辺拓未、並木彩乃、伊藤茉優、江澤大貴、大隈颯人、司馬賢一、飯塚麻里子、堀川貴生、大谷彩夏、岩本陽菜、山本絵里加、遠藤莉子、佐渡祐実、仲座猛、村岡広規、八ツ星和音、山内光琴、山田愛、山根美咲

所属ゼミ：衣笠ゼミ

タイトル：東京五輪 ゆるキャラプロデュース大作戦 –アンケート調査にもとづく考察–

発表概要：現在の日本では、キャラクターが大きな経済効果を生み出し、それは世界へと広がっている。日本で今年 7 月に配信された「ポケモン GO」は、アメリカ、韓国、イギルス、ドイツなど、世界各国で人気となったが、その元となるキャラクターを作り出したのは日本である。また 2011 年に「地域」「日本」に貢献するキャラとして誕生した「ゆるキャラ」は、土産物で使用されるなどして人気を集め、特に「ゆるキャラグランプリ」では大きな経済効果を生み出した。そのキャラクターはどれも親しみやすいものばかりだ。たしかに海外でも大学やスポーツチームなどにキャラクターは存在している。だが海外と日本のキャラクターを比較すると、後者のほうがより親しみやすさに重点を置いているという違いがあるのではないだろうか。そこでわたしたちは、外国人と日本人を対象にしたアンケートを実施し、その結果にもとづいて、4

年後に開催を控えた「東京五輪」のゆるキャラとして、外国人と日本人のそれぞれが好むであろうものを作成することにした。
アンケートは、外国人と日本人、各 54 人を対象とした。内容は、2015 年に行われた「ゆるキャラグランプリ」の１位から１０位までのキャラクターから一番気に入ったものを選んでもらい、その理由を聞くというものである。具体的には、ゆるキャラの一番気に入った部分を選んでもらうと同時に、回答者が「日本」と聞いて何を思いつくかを尋ね、五輪開催地である日本の特徴と見なされたものをキャラクターに取り入れることにした。

アンケート結果から明らかになったのは、日本人はキャラクターの気に入った点に関して全体的な印象から抽象的に述べるのに対して、外国人は耳や色、背景など、部分をピンポイントに絞りこむ傾向があると言うことである。

このように今回の発表では、アンケート結果を分析し、日本人と外国人のそれぞれが気に入ったゆるキャラの部分、ないしはゆるキャラを気に入った理由を総合して、両者それぞれにとっての日本の印象を取り入れた「東京五輪のゆるキャラ」を作成し、この二つのキャラクターを比較、考察する。それと並行して、日本人と外国人がキャラクターのどこに好印象をもつかその相違点を探る。日頃から街中で目にしているキャラクターが日本で親しまれる理由を考えると、ある共通点が生まれてくるかもしれない。

発表者氏名：武内美菜子、有川博隆、伊藤恵理、岩田正則、高橋由希、豊田柊、茂木しおり
所属ゼミ：曽士才ゼミ
タイトル：次世代のガイドとしての SNS
発表概要：1. 研究動機
2020 年に向けて一層増加が見込まれる観光客数から、私たちは今後多くの観光ガイドが必要になると予想した。しかし、昨年訪日外国人にアンケートを実施したところ、半数以上が「ガイドは不要」と回答。これはインターネットの発達により観光情報の収集方法が変化したことが一つの要因だと考えられる。これを裏付けるように、今年行った同様のアンケートでは、86. 8%がソーシャルネットワーキングサービス（以下 SNS) を利用して観光の情報収集を行うと回答があった。ここでは観光とメディアという観点から SNS の特徴について述べる。
2. 観光におけるメディアの変遷
日本の観光における利用メディアは時代ごとに異なり 1.江戸時代中期以降、2.明治期以降における大衆観光時代、3.現代～の 3 つの時代に区別できる。日本の旅ブームは江戸時代の伊勢参りを機に、名所図会といった紙媒体を利用していた。その後、1900 年代に入りガイドブック等に加えて映画、そして後にテレビというメディアが登場し、そこで見た場所を訪れる旅行が定着した。これらの事実からも観光メディアは絵図や写真、映像を中心とした視覚伝達であるビジュアルコミュニケーション（以下 VC）が中心となっていたことが分かる。さらに、平成に入りインターネットの普及により観光におけるメディアは大きな変化を遂げた。具体的には、ブログや口コミサイトが登場し、情報を受信するだけのメディアは、旅行者自身が発信者にもなり得るようになった。そしてスマートフォンが普及した現在、今までの VC の流れを汲みつつブログや口コミ要素を含む新たなメディアとして SNS が現れた。
3. SNS の特徴
口コミサイトやブログはジャンルが特定されるため、目的意識を持ってアプローチする必要があり、これはガイドブックや書籍と同様だと言える。一方、SNS は無意識での受動的なツールであり、幅広い分野を扱う。無意識に広範囲の情報収集を行える点で、テレビや映画と共通するが、テレビや映画との決定的な違いは相互に情報を送受信でき、より信頼度の高い情報を身近に感じられる点である。これはデジタルマーケティングにおいて「AISAS」という一連の流れとして捉えられている。この一例として、SNS で話題となり、有名になった観光地として千葉県君津市にある濃溝の滝を挙げることができる。写真家の yuzoooo さんが Instagram に写真を投稿したのがきっかけで有名となった。幻想的な光景が人気アニメを連想させると、週末には 1 日 5000 人が訪れるほどの人気の観光地となった。これらを踏まえて、本発表では観光分野で近

年急速に広まった SNS が次世代のガイドとしていかに有効であるかを検証していく。

参考文献
遠藤英樹・寺岡伸悟・堀野正人『観光メディア論』ナカニシヤ出版、2014 年
株式会社オプト(山田智恵・小川由衣・石井リナ)&できるシリーズ編集部『できる 100 の新法則 Instagram マーケティング～写真 1 枚で「欲しい」を引き出す技術』株式会社インプレス、2016 年

発表者氏名：杉嵜皓、坪倉圭吾、松井一樹、土屋麻梨恵、佐々木葵、中野佐紀、影山沙樹、柏木菜々子、森西綾美
所属ゼミ：佐々木一惠ゼミ
タイトル：現代のチンドン屋における活動実態とその背景～カルチュラル・ターンの視点からの考察～
発表概要：今日、新聞、雑誌、ラジオ、テレビ、インターネットなど広告媒体の多様化が顕著となっている。その中でも江戸時代に起源を持つ広告媒体としてチンドン屋が今もなお活動し続けている。チンドン屋とは、人の目をひく容姿と演奏で商店街や地方のイベント、祭り等で活動する請負広告業者である。（籠谷 2013）依頼された店舗やイベントの宣伝を、パフォーマンスを通して発信するメディアとして、チンドン屋は地位を確立している。

チンドン屋の活動は、1950 年代頃にピークを迎えたのち、新聞広告、テレビ等の情報媒体により活動が落ち込んでいることが先行研究でも明らかにされている。（近藤　2004）さらに昭和の終わり頃は、チンドン屋はストリートアーティストとしての側面が強まったとされる。（吉見、北田　2007）本発表では、現代のチンドン屋の活動の意識、及びその背景を考察することを目的とする。

そこで、まず、我々は現在のチンドン屋における活動内容の調査を行うため、代表例として、2000 年に開催されたチンドン博覧会の実行委員長である有限会社「東京チンドン倶楽部」社長の高田洋介氏と、高田氏が設立した学生団体「早稲田チンドン屋研究会」のメンバーをインタビュー対象として取り上げる。その中で、既存の研究で示唆されているように、チンドン屋博覧会の開催、コンサートやパレードの参加、さらには講演会の実施など観客へのパフォーマンスに従事していることが分かった。また、早稲田大学のチンドン屋研究会でのインタビューにおいても、大道芸の一種である南京玉すだれの実施や老人ホームでの演目講演など、従来の宣伝のために”人々の注目をひくパフォーマンス”から、”観客へ見せるパフォーマンス”へと変貌を遂げていることが分かった。

これらの調査と資料分析から本発表では、こうした現代におけるチンドン屋の新たな特色に着目する。そして、チンドン屋の過去と現在の活動の変化の実態と、それが発生した背景を考察することを目的とし、カルチュラル・ターンの視点から明らかにしていく。

【参考文献】
吉見俊哉、北田暁大（2007）「路上のエスノグラフィ―ちんどん屋からグラフィティまで―」せりか書房
籠谷真奈（2013）「現代に生きるチンドン屋」『日本文化論年報』16,（61）―（82）
近藤隆二（2007）「街廻りにおけるチンドン屋と観客とのコミュニケーションに関する研究」『環境システム研究論文集』32,411－418
吉見俊哉(2003)「カルチュラル・ターン、文化の政治学へ」人文書院

【参考ウェブサイト】
東京チンドン倶楽部 http://www.tokyo-chindon.com/
ちんどん通信社
http://www.tozaiya.co.jp/history.html

発表者氏名：山室荘、井上芳美、児島芽衣、崎山茜
所属ゼミ：甲・渡邊ゼミ
タイトル：人と人とのコミュニケーションを助けるロボット
発表概要：　私たちのグループは人と人とのコミュニケーションに焦点を当て、それをより円滑に進めてくれるようなロボットを考案、提案する。私たち甲・渡邊ゼミはコミュニケーションや人の感情、人工知能を含むロボットなど幅広く扱っており、その中でもコミュニケーションに興味関心のある 4 人が集まり、話し合いを進めた。今までのゼミ活動では人と人とのコミ

ュニケーションに関する文献も読んできていた。しかし、それに関して実践的な調査や研究を行ったことはなく、学会を期に我々のコミュニケーションを改めて見つめなおし、何か問題点はないか、より円滑に進められるよう改善できる点はないかを調査することに決定した。

そこで私たちは全年齢を対象に、他人とのコミュニケーションに関するアンケートを行った。アンケートでは、会話の相手との共通点がわからず一番難しいと考えられる初対面の相手とのコミュニケーション、およびそれに付随する会話についてのいくつかの質問に回答してもらった。その結果、初対面の人とのコミュニケーションは 60%の人が苦手に感じていることがわかった。その他にも、会話が困難に感じる特定の年齢差はないこと、同性との会話よりも異性との会話のほうが苦手意識を持っている人が多いこと、会話人数は一対一の 2 人きりよりも 3 人または 4 人の会話のほうが話しやすいと感じる人が多いことが判明した。また会話を続かせるテクニックとして、会話相手との共通点を探すことを挙げている回答者もいた。

以上のアンケート結果から、過半数の人が初対面の人との会話に苦手意識を持っていることがわかったため、人と人とのコミュニケーションを円滑にするにあたって、初対面の場でロボットを使って手助けすることができるのではないか、という考えにいたった。具体的には、統計的に話しやすいとされる 3,4 人の会話環境を作るために、ロボットに会話の手助け役として加わってもらうという案である。このロボットには事前に話者のプロフィールが記録されており、会話で詰まった際に音声で手助けをしてもらえるというものである。今回の学会ではその実際のシステムと実験内容、結果を発表させていただく。

発表者氏名：峯村彩花、秋谷穂奈美、井口小雪、市來芳佳、遠藤謙、大藤朝香、金田優輝、華原叡美子、河村慎也、久保井あかり、久間翔子、佐藤亜紀、関真由香、田代眞悟、濱野結以、松田美里、松永拓也、渡邊有咲

所属ゼミ：佐々木直美ゼミ

タイトル：**心に平和の砦を**

～ナガサキから学ぶ、私たちにできること～

発表概要：“原爆”と聞いて先ず思い浮かぶのは広島だろう。世界遺産としても有名な原爆ドームのある広島の方が、もう一つの被爆地である長崎に比べ原爆が落とされた都市としてのイメージが強く、世界的にも知名度が高い。実際、長崎における原爆資料館の来場者数は、広島の半分以下である。さらにそれを示す象徴的な出来事が、アメリカのオバマ大統領の広島訪問だ。今年の 5 月 27 日、オバマ氏は現職大統領として初めて被爆地を訪問し、日本、そして世界に感動を与えた。しかし、オバマ氏自らが折ったことで話題になった 4 羽の折り鶴は、広島平和記念資料館にて小・中学生 2 人に渡されただけで、長崎に向けて折り鶴が送られることはなかった。

実は、そんな長崎にも広島の原爆ドームと同様、壮大な被爆遺構が存在していたことをご存知だろうか？――浦上天主堂、現在のカトリック浦上教会である。もし現在も取り壊されずに残っていたら、世界遺産にも登録されていたのではないだろうか。

本発表は、被爆遺構が撤去されてしまった長崎で、被爆体験を継承するためにどのようなことが行われているのか、またどのような問題が付随しているのかを調査したうえで、被爆体験者ではない私たちにもできることは何かを考察し、呼びかけることを目的として行う。今回、私たちは生の声を聞くことを重視したため、長崎へフィールドワークを行った。現地では以下の 4 つのグループに分かれ調査を実施した。カッコ内はインタビュー協力先である。

Ⅰ 資料館班（長崎原爆資料館）

Ⅱ キリスト教会班（旧浦上天主堂）

Ⅲ 語り部班（長崎平和推進協会）

Ⅳ 平和教育班（時津町立鳴鼓小学校）

この中でも特にⅢとⅣの 2 つの継承手段に着目した。Ⅲでは長崎での語り部の現状や問題点をまとめ、Ⅳでは長崎と被爆地でない関東の平和教育を比較し、その違いを子どもたちの声と共に具体的に示した。そして、それぞれの活動内容とインタビュー協力者の意見や熱い想いから、私たちは以下のことを提言したい。

長崎には被爆遺構はなくとも、被爆体験を継承しようと尽力している。私たちは、これらの取り組みを被爆

地だけに留まらず全国に広めるべきだと考える。唯一の被爆国であるからこそ、日本全体で自ら世界に発信していかなければならない。
そのために被爆体験者ではない私たちにできることとしてそれぞれのインタビューから共通して得た答えがある。「まず戦争への恐怖・平和への意識を持ち、普段から常に関心をもって過ごしてほしい。」といった言葉だ。当たり前にできているつもりでも、案外できていない人が多いのではないだろうか。
戦後 71 年もの月日が経過した今、戦争や核兵器の危険を忘れてしまってはいないだろうか。他国だけでなく日本までも核政策の動向に揺れる中、戦争体験者・被爆体験者は年々減っていくばかりだ。そんな中私たちが今やるべきことは、平和への意識・関心を持つことから始めることである。

発表者氏名：髙橋洋朝、高崎由梨、阪本由布、小林穂波、赤司佳澄
所属ゼミ：今泉ゼミ
タイトル：首里城～観光イメージの裏側に見つけたもの～
発表概要：みなさんは沖縄と聞くとどんなイメージを思い浮かべるだろうか。法政大学の学生 100 人にアンケートを取ってみると、約 15%の学生が戦争や基地問題と答える一方で、約 80%の学生がリゾート、琉球文化のイメージがあると答えた。沖縄が 1972 年に本土復帰を果たして以後、沖縄を舞台としたドラマや健康長寿の島といった「沖縄ブーム」が観光地としてのイメージを定着させた。しかし、そのような観光イメージの裏には、あまり語られていない、知られていない事実がある。
　その語られていない、知られていない事実を見ようと行った沖縄でのゼミ合宿では、観光イメージとは異なる沖縄が見えてきた。
　訪れた場所のひとつである首里城は、観光地として有名だ。しかし、その「赤い城」というイメージだけからは見えていない部分がある。首里城は 1400 年頃に建てられ、かつては琉球王国の文化・政治の中心であったことは、良く知られている。しかし、その首里城に戦時中日本軍の司令壕が設置され、米軍の攻撃により焼失したことはあまり知られていないのではないだろうか。戦後には、消失した跡地に琉球大学が設立され、現在の首里城の姿は 1992 年に復元されたものである。これらの事実を知り、私たちがこれまで抱いていた色彩豊かな城、といった観光イメージの裏にあまり語られていない、知られていない歴史があると感じた。
　今までとは違う視点から捉えなおすことで、気づかなかった事実や特徴、問題点が見えてくることを、首里城を例にみなさんと考えたい。そこで戦時中・戦後・復帰後の大まかな三つの時期に分けて首里城を捉え直したい。
　　一つ目の戦時中は、日本は本土決戦のための時間稼ぎとして、沖縄での地上戦を長引かせた。首里城地下には日本軍の司令部が置かれ、その司令部の行動が沖縄本島南部の住民被害を拡大させる分岐点になった。
　二つ目の戦後には、沖縄は米軍の占領下に置かれ、首里城の跡地には米軍によって沖縄で初めての大学となる琉球大学が設立された。高等教育機関がほしかった沖縄の人びとの希望が叶えられたが、同時に琉球大学設立にはアメリカ軍の意図も含まれていた。
　三つ目の復帰後には、首里城が沖縄の本土復帰 20 周年記念事業として 1992 年に復元された。この 20 周年の復元には沖縄の人々にとって特別な意味合いがあったが、そこには一部の住民の反発もあった。
　　本土出身の私たちにとって観光地に過ぎない首里城だが、時代によって与えられた役割が異なり、戦時中・戦後・復帰 20 周年の各時代に、本土や米軍との関係に左右されながらも、乗り越えてきた沖縄の歴史が見える。今自分が見えていない部分に目を向けて新たな視点を手に入れるきっかけをつくるために、ゼミでの学びをもとに紹介する。

発表者氏名：錦澤元汰、吉田拓真、渡邊奏
所属ゼミ：島野ゼミ
タイトル：里山の自然と人間の生活との関係性
発表概要：里山と人間の関係は、生態系サービスや生物多様性の維持だけではなく、環境教育の場として、里山が重要な役割を果たしている。里山を「原生的な

自然と都市との中間に位置し、集落とそれを取り巻く二次林、それらと混在する農地、ため池、草原などで構成される地域」とここでは定義する。
第二次世界大戦以前の日本社会において里山は燃料、建築材、肥料、飼料などの供給源となっていたが、戦後、工業化と経済成長に伴い徐々にその役割を失っていった。
里山が人間に与えるメリットとは、生態系が人々に与える恵みつまり生態系サービスであり、その生態系サービスは主に 5 種類（供給サービス、調節サービス、文化的サービス、基盤サービス、保全サービス）に分けられる。
他方、人間が里山に与えるメリットは、人間は里山の持続的な活用のために、適切な維持管理をしていることである。この維持管理が、里山における生態系の保全、多様化を支えている。
このような里山あるいは里地と人間の関係の主な事例として、雑木林と水田がある。これらは人間の生活に対し、資源の供給、周辺環境の調節、環境教育としての場などの役割を果たす。一方、下草刈りや導水路の整備といった人間の管理活動によって、生息環境が維持される動植物が雑木林や水田には沢山生息している。
里山と人間は互いに恩恵を被っているのであり、どちらか一方の役割が弱まるあるいは失われると、持続的な活動ができなくなるため、里山と人間は相補的関係である。
この里山と人間のつながりを真に理解するためには、実体験を伴う体験学習が不可欠であり、実体験を通じたエコツーリズムや、学校と地域の連携による自然学習を推進することも、ひとつの方法である。
里山と人間の関係が崩れた時に起こる一番大きな問題として里山環境の荒廃がある。それによって生物多様性の低下、景観それ自体の喪失が引き起こされる。加えて、植物根の喪失によって、土壌流亡あるいは、土砂崩れなども起こりやすくなる（生態系サービスの喪失）。
里山と人間の相補的関係が失われる原因は、地域社会の発展によるものと地域の人間生活の衰退によるもの、その他の三つに分けられる。高度経済成長期以降、里山が使われなくなったことで里山が荒廃した。地域の人間生活の衰退は高齢化、人口減少であり、過疎化による担い手不足から生じる農業不振とともに、里山の管理不足を引き起こした。その他には外来種の繁殖源となった例や、里地の管理不足による病害虫の食害など、農業生産の被害に繋がった例がある。
成功事例には、エコツーリズム、地域の学校での環境教育、特産品の販売、環境創造型農業、草本緑化への着手がある。
里山の価値は、これらの成功事例など、あるいは、里海とあわせた地域全体の資源を考えるなど、持続可能な社会にとって今後ますます重要となるであろうと考える。

発表者氏名：三浦主税
所属ゼミ：甲洋介・渡邊日出雄ゼミ
タイトル：「手」から始まる親子のコミュニケーション
発表概要：甲ゼミでの研究目標として「言葉で伝えるコミュニケーションの限界を超えたい」というものがある。これまで、この目標のもと道具を考案したり、実際にモノづくりに挑戦したりしてきた。我々の班ではそのテーマに沿い、「人々の関わりを豊かにするモノづくり」の発表を行う
我々はゼミの活動の中で、「子供の成長の場」について学んだ。
その中でも、「子供の成長の場」としての社会の最小単位である「親子、家族」に着目することにした。
着目した理由としては数年前と比べた現代の親子関係、家族間のコミュニケーションを取り巻く環境の変化が挙げられる。両親が共働きする家庭が増え、親が子供の行動や感情を把握することが難しくなってきている。それを補う手段のひとつとして親が子供に携帯電話を持たせる事が多くなった。
親が子供に携帯電話を使用させる理由は、親子がどこでも連絡を取り親が子供の所在地を把握できるからである。
しかし、これだけでは親子間の問題の一部が解決しているに過ぎず、コミュニケーションが完全に円滑になったとは言えない。

さらに、現代では子供たちにガラパゴス携帯電話ではなく、スマートフォンを持たせる家庭が増えてきた。スマートフォンのメリットはガラパゴス携帯電話よりも圧倒的に使える機能が多彩で、より便利になった事だと言えるであろう。スマートフォンができ、普及し、社会の情報化はますます加速している。
しかし、その一方で従来のガラパゴス携帯電話にはなかったデメリットも増えた。スマートフォンを本来連絡手段としてのみ使用するために持たせたにも関わらず、スマートフォンという高機能なものが与えられてしまったために、結果的に「子供がスマートフォンに没頭することによる親子間の会話の減少」という良くない事態を生む事となった。ここでいう「没頭」とは長時間のネットサーフィンや動画サイト閲覧、ゲーム、簡単にメッセージを送り合えるメッセージアプリや SNS に夢中になってしまう事である。
こうした現代の家庭における問題の解決を支援したいという想いから、今回の研究を行うことになった。そこで実際に支援を形にするにあたり、「没頭」を減らしつつ、親子間の会話を増やす事が重要点として挙げられた。
そして、このような現状を改善する手助けとなるモノやシステムはないだろうか、と我々は考えた。
そこで考案したのが「手の形をしたロボット」である。「手」に着目した理由は、普段我々がコミュニケーションにおいて手を様々に使うことで意思疎通を図るからである。例えば握手やハイタッチ、手をふる、写真を撮る時のピースサインなど、単純なアクションで想いを表現したりメッセージを送ったりしている。
また、既存のコミュニケーションロボットは、高機能で複雑な設計のものが多い。しかし、高機能のロボットを作ると再び「没頭」を招いてしまう。そこで、我々が考案するロボットには、「没頭」する事を防ぐために余計な機能を付けない。あくまでロボットが親子間の会話の「きっかけ」を与え、その先の親子の相互理解を深めていく助けをするロボットのデザインを提案する。

参考文献

小学生の携帯所有率
http://dual.nikkei.co.jp/article.aspx?id=8418
青少年のインターネット利用実態調査
http://www8.cao.go.jp/youth/youth-harm/chousa/h27/net-jittai/pdf/sokuhou.pdf
子供にパソコンを使わせるメリット・デメリット
http://www.garbagenews.net/archives/1917340.html
子供に携帯・スマホをもたせた理由
http://www.rbbtoday.com/article/2016/04/26/141688.html

発表者氏名：小俣柚里
所属ゼミ：大嶋ゼミ
タイトル：PureData によるミュージックシンセサイザーのモデリングの試み―Minimoog を例として―（1）
発表概要：1.研究概要

本研究は Pure Data プログラミング環境において演奏可能なミュージックシンセサイザーを実現するものである。そのモデルとして Minimoog Model D を参考に各機能の実装を通じて楽器としての特長と操作性を検討した。

2.研究の背景と問題解決の検討

われわれの研究室では、オープンソースのソフトウェアであるプログラミング環境 Pure Data とその拡張版である Pd-extended（以下 Pd と総称的に略す）による楽器、音響機器、メディアアートの制作を目指している。Pd はプログラムで音響や映像を作成することができ、特にメディアシステム構築とそのプロトタイピングに適している。とくにプログラム構造の視覚的表現が特徴で、直感的なプログラミング環境である。またネットワーク環境でのマルチプラットフォームな機器の相互運用なども可能である。
これまでわれわれは Pd 環境でのオルガンやリズムマシンなどの電子楽器や音響エフェクトの製作などを行ってきたが、これらの経験をもとに今回はあらたにシンセサイザーの製作に取り組んだ。なかでもアナログシンセサイザーの古典的名機といわれる Minimoog Model D の構成原理のモデル化とその今日的な拡張に注力した。

Minimoog Model D は 1970 年に Moog 社から発表

されたが、それまでは実験的電子音響機器としての色彩が強かったシンセサイザーの各モジュールの機能が提供する音作りの自由度を大きく犠牲にすることなく、ライブ演奏に適した一体型のハードウェアとコンパクトな制御インターフェースで実装することで楽器としてのシンセサイザーの地位を確立した先駆的製品であった。その特徴的な音は現代においても衰えぬ人気を誇り近年に製造が再開された。各種 DTM へのプラグイン実装や iOS 版の再現アプリなどもサードパーティから発表されている。しかし Minimoog 実機やエミュレータの出力波形の比較や聴感実験だけでは各部機能の何がどのように実現（再現）されているのかを知る事は困難である。またそれぞれの機能を実機の性能限界を越えて駆動した際の音色作りの可能性についても知る事ができない。

その点 Pd ではプログラムによる各部機能の実装を通じて Minimoog の特長を理解し、シンセサイザーの設計思想についての知見を得ることが可能となる。またスライダーやスイッチなど制御オブジェクトにより楽器としての操作性の検討にも適している。

さらに実機の Minimoog はその装置規模からモノフォニックであるが、これをポリフォニックに拡張すること、各種制御パラメータや各部の接続関係を MIDI 信号やフィジカルコントローラにより外部制御を実現することなど、より今日的な楽器としての機能追加やインターフェースの拡張や改良も可能である。

3.研究内容とまとめ

Minimoog Model D のマニュアルをはじめとする各種文献を参考に、各機能単位を Pd で実装して演奏可能なシンセサイザーを製作した。また楽器としての操作性を考慮して MIDI による制御機能を追加し、音色設定に必要なパッチデータのいくつかをプリセットとして作成した。

発表者氏名：大嶋良明

所属ゼミ：大嶋ゼミ

タイトル：PureData によるミュージックシンセサイザーのモデリングの試み—Minimoog を例として—（2）

発表概要：1.研究概要

本研究は Pure Data プログラミング環境において演奏可能なミュージックシンセサイザーを実現するものである。そのモデルとして Minimoog Model D を参考に各機能の実装を通じて楽器としての特長と操作性を検討した。

2.研究の背景と問題解決の検討

われわれの研究室では、オープンソースのソフトウェアであるプログラミング環境 Pure Data とその拡張版である Pd-extended（以下 Pd と総称的に略す）による楽器、音響機器、メディアアートの制作を目指している。Pd はプログラムで音響や映像を作成することができ、特にメディアシステム構築とそのプロトタイピングに適している。とくにプログラム構造の視覚的表現が特徴で、直感的なプログラミング環境である。またネットワーク環境でのマルチプラットフォームな機器の相互運用なども可能である。

これまでわれわれは Pd 環境でのオルガンやリズムマシンなどの電子楽器や音響エフェクトの製作などを行ってきたが、これらの経験をもとに今回はあらたにシンセサイザーの製作に取り組んだ。なかでもアナログシンセサイザーの古典的名機といわれる Minimoog Model D の構成原理のモデル化とその今日的な拡張に注力した。

Minimoog Model D は 1970 年に Moog 社から発表

されたが、それまでは実験的電子音響機器としての色彩が強かったシンセサイザーの各モジュールの機能が提供する音作りの自由度を大きく犠牲にすることなく、ライブ演奏に適した一体型のハードウェアとコンパクトな制御インターフェースで実装することで楽器としてのシンセサイザーの地位を確立した先駆的製品であった。その特徴的な音は現代においても衰えぬ人気を誇り近年に製造が再開された。各種 DTM へのプラグイン実装や iOS 版の再現アプリなどもサードパーティから発表されている。しかし Minimoog 実機やエミュレータの出力波形の比較や聴感実験だけでは各部機能の何がどのように実現（再現）されているのかを知る事は困難である。またそれぞれの機能を実機の性能限界を越えて駆動した際の音色作りの可能性についても知る事ができない。

その点 Pd ではプログラムによる各部機能の実装を通

じてMinimoogの特長を理解し、シンセサイザーの設計思想についての知見を得ることが可能となる。またスライダーやスイッチなど制御オブジェクトにより楽器としての操作性の検討にも適している。
さらに実機のMinimoogはその装置規模からモノフォニックであるが、これをポリフォニックに拡張すること、各種制御パラメータや各部の接続関係をMIDI信号や Arduino とフィジカルコントローラなどによる外部制御を実装すると、より今日的な楽器としての機能追加やインターフェースの拡張や改良も可能である。
3.研究内容とまとめ
Pdによる Minimoogのモデル化を例として各部の詳細化を検討した。また操作面での観点からMIDI信号や Arduino とフィジカルコントローラによる外部制御を製作した。

C.映像部門

発表者氏名：桐山紗緒梨、小磯浩平、瀬戸光、佐和田伊吹、小山祐季、松浦茜、市川明希、若菜郁、面川梨夏、新見菜月、東あゆみ、清水萌、赤坂雄太郎
所属ゼミ：鈴木晶ゼミ
タイトル：幸福な選択
発表概要：久々に再会した親友の順風満帆な様子を見て、「もしもあの時、別の道を選択していたら」と嘆く主人公・美咲。そんな中、突如目の前に現れた謎の男・最下（もしも）によりパラレルワールドへ。過去の選択を後悔し、上手くいかないことを環境のせいにしていた主人公の成長物語。

＜制作にあたって＞
鈴木晶ゼミ最後の短編映画制作ということで、ゼミ生１３名全員で取り組みました。学生から社会人になろうとしている今の私たちだから描けるものを作ろうと、テーマやストーリー構成に議論を重ね、人生の分岐点・選択をテーマとしました。
「もしもあの時～していたら」と過去の選択に後悔したり、自分の置かれている環境に不満を抱く主人公・美咲の不安や葛藤は、あなたが日頃感じている気持ちに近いものもあるかもしれません。
「大事なのは選択や環境よりも、その選択の後、決められた環境のなかでも、自分がどう行動するかである」というメッセージを込めています。将来に対して前向きな気持ちになっていただけたら嬉しいです。

＜脚本・構成の工夫点＞
作品に込めたメッセージを伝えるため、全てのカット、セリフ、表情が意味を持つように意識しました。短編映画では、観客に、短い時間で登場人物の性格・人柄を把握してもらう必要があります。そのため、それぞれの人物の話し方、言葉選びにこだわりました。
また観客に、主人公・美咲の気づきを他人事ではなく、自分自身にもあてはめて考えてほしいと思い、エンディング後のシーンを加えました。主人公の気づきとともに、物語のキーとなる小道具（オフィスの小物やパワーポイントの資料、会社のロゴ等）の制作にもこだわりました。

＜撮影の工夫点＞
通常撮影は三脚を使ってカメラを固定します。この作品では、観客が見ていて飽きないよう「パン、ドリー、ティルト、ズーム」等のカメラワークを用いてカメラを動かし、バラエティに富んだ映像を撮影しました。映画全体を通して、登場人物が映像の中で移動するカットでは、スタビライザーやドリーを使ってカメラを被写体に合わせて移動させ、手ブレがない滑らかで躍動感のある映像に仕上げました。また、クレーンは高さや奥行きを表現する際に効果的で、ドリーと組み合わせて使いました。

・主観ショット
主人公が最下に出会うシーンでは、最下の主観ショット（最下が見ている世界）が用いられています。撮影する際はカメラが演者の立場になるので、板を使ってもしもの影を演出しました。また、主観ショットは人の目線なので、敢えてカメラを手ブレさせることにより、他の映像とのメリハリをつけました。

・ズームアップ
主人公がオフィスで親友の作った資料を見て、親友の直向きな努力に気付くシーンでは、ドリーを使い、カメラを被写体に段々と近づけていく「ズームアップ」を用いました。徐々に被写体を強調することで、観客の関心を高め、シーンを盛り上げる効果を演出しました。撮影では被写体にカメラを近づけるため、同時にレンズのピントを調節しなければいけないことが難易でした。

発表者氏名：村上絢香、野尻大斗、
平田愛佳、荒井健吾、中野拓人、川島結城、佐藤純綾、安里幸一、佐藤万里、小菅玲奈、元木雛子、原田光汰、澤田昂佑、東野菜月
所属ゼミ：田澤耕ゼミ
タイトル：SA JAPÓN
発表概要：私たち田澤ゼミは、スペインの東北部に位置し、バルセロナを含むカタルーニャ州の言語、カタルーニャ語研究の第一人者である田澤耕先生のゼミである。そんな私たちのゼミは、選考時にスペインへ留学後程度のスペイン語能力を持っているという条件があるため、ゼミ生は全員 SA スペインの学生である。そのため私たちのゼミでいつも話題になるのがスペイン留学で新たに発見し驚いた日本とスペインの違い、ギャップであった。机に向かってスペインの言語や文法を学んでいただけでは知り得なかった、留学を経たからこそならではの現地の発見が留学を終えてもなお強く印象に残っている。
本発表では逆にスペイン人が日本留学をしてこそ感じた驚き、発見の生の声を共有することを目的としており、撮影の方法としては、知り合いのスペイン出身で一定期間日本へ留学している人とコンタクトを取り、平日の学校や放課後の様子や休日の様子を撮影させてもらうというものである。日本に滞在しているスペイン人留学生とコンタクトを取り、大学や寮へ足を運び、普段の生活に密着した。この密着中に、電車の中など実際に生活の中で気づいた驚きを撮影し一つの動画に編集した。
この撮影をした結果、私達がスペインへ留学した時と同じようにスペイン人留学生も日本留学での新しい発見や驚きは数えられないほどあったようだ。
また留学生の驚きを密着しながら感じたことは、私たちが普段当たり前のようにしていることが彼らにとってはとても不思議で、自分の国では考えられないような事だということと、そのような、無意識な“日本人らしい”行動や慣習に撮影している私たちが改めて気づかされる良い機会になった。

発表者氏名：野明菜々子、小笠原彩生、近藤喜一、砂原建斗、菅間隆之真、伊藤翔
所属ゼミ：島田雅彦ゼミ
タイトル：本日の主役
発表概要：メンバーが日々の生活で撮った、その日の主役をまとめました。
人だけでなく動物や景色、美味しかったご飯、街中で出会ったもの。
自分が見ている世界で他のものを主役と捉えることは難しいですが、日常生活の中でカメラを回し続けることで普段の生活で見落としがちなものがくっきりと浮かんで見えてきます。普段のなんともない生活も実は様々なものに囲まれていることがわかります。ぜひぼーっと見ていただきたいです。

発表者氏名：野明菜々子、小笠原彩生、近藤喜一、砂原建斗
所属ゼミ：島田雅彦ゼミ
タイトル：指宿温泉　白水館ラジオコマーシャル映像
発表概要：この作品はもともと鹿児島県にある指宿温泉の白水館という旅館の 1 分間のラジオコマーシャルでした。ラジオコマーシャルを聞いて自分たちがイメージしたその世界観を映像化してみました。普段は耳だけで聴いて頭でイメージして楽しむものですが、あえて映像化することで一つの解釈を楽しんでいただけたらと思います。

発表者氏名：栽原萌衣
所属ゼミ：島田ゼミ
タイトル：１０８
発表概要：人間には 108 の煩悩があると言われています。煩悩によって私たちは迷い苦しみ、時に挫折を味

わいます。島田ゼミ 3 年生は今回そんな煩悩に焦点を当てました。

そもそも 108 の煩悩とはなんでしょうか。煩悩とは、嫉妬や自己中心的な考えなどから生まれる、人の苦しみの原因です。そして人間には視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触感、意識の六感があり、それぞれの感覚に対し、18 の煩悩が存在すると言われているのです。みなさんは大晦日の夜の除夜の鐘が 108 回聞こえてくることを知っていますか？あれは自己の中にある 108 煩悩を消すためにならしているのです。

さて、今回の作品で私たちは 108 の壁を撮り続けました。

壁とは自分自身とその対象を隔てる役割を持ちます。壁によって物理的にも精神的にも外からの危険から自己を守ろうとします。常に傷付かないように心にバリアを張りながら日常生活を送ってきました。例えば、苦手なものや逃げたいものに直面した時、壁を作り自分を守ろうとします。私たちは自己の中にある煩悩を認識すると、その度に壁を作ります。つまり 108 の煩悩を持つ私たちには 108 の壁があるのです。

私たちの中にあると言われている 108 の煩悩。その煩悩によって起こる行動から自分自身が傷付かないように張っていた壁はもしかしたら自分自身の表れなのかもしれないのです。

つまり、常に私たちが見てきた外界はもしかしたら壁、つまり自分自身の内界なのかもしれません。
壁にはその煩悩ごとに、カラフルな壁や穴だらけの脆い壁、鉄の分厚い壁など様々な壁があるでしょう。
私たちは自分の中に煩悩を見つける度に壁を作り、自分自身から分け隔てようとしてきました。

この作品はそんな壁を集めました。
108 の煩悩と 108 の壁。

発表者氏名：山本陸、百瀬聡亮、上霜圭央、小泉　堯史、田村　莉沙、澤邉司、大場郁美、飯野麟太郎
所属ゼミ：島田雅彦
タイトル：虎穴に入らずんば
発表概要：あらすじ
舞台は東京。大学、恋愛、就職活動と、私生活が全くうまくいかない大学生トオルが、友人アカミヤから「幸福の薬」について聞かされ、それを使用することで引き起こされる様々な人間模様を描いたコメディです。「幸せ」とは何か、どのようにすれば人は幸せになれるのか、なぜ幸せを追い求めるのか、そして「薬」を使って幸せを求めようとすることは本当に正解なのか、ということについて深く描いた作品になっております。
役紹介
班田　超（ハンダ　トオル）社会に不信感を抱いている。ネガティヴで八方美人な性格
青木　龍也（アオキ　タツヤ）主人公の一番の友人。明るく、とてもポジティヴな性格
玄野　武（クロノ　タケシ）友達想いで常識人、優しいが少し性欲強めな性格。
朱宮　雲雀（アカミヤ　ヒバリ）好奇心が強く、冷静で落ち着いた性格。
楊　彩妃(ヤナギ　サキ)　感情的で、恋愛体質な性格。
構成
本作品は、ゼミ生がスタッフ側（カメラマン・脚本・美術等）にまわり、キャストを
ほとんど、外部からスカウトしました。その結果、映像制作側と、キャスト側に分業し、集中して取り組むことが出来た為、より良い作品を作ることが出来ました。キャストの方々には、感謝の念が強く、感無量です。また、スタッフ内でも、役割を完全に分業したことのより、各々を信頼し、信用することで、制作が進むに連れて、さらに深い友情を深めることが出来ました。
作品の意図
コンセプトは「感情破壊」。悲しみ、喜び、恐怖といったさまざまな感情を 20 分の中にギュッとつめた作品になっています。主人公、視聴者、すべての感情を壊したいと思っています。
本作品を描く上で、私達が作りたかったものは、2 つ

あります。
１つめは、誰もが「うらやむもの」を通した世界観を作りたかったという事があります。「幸せ」を簡単に手に入れることが出来たら、世界はどれほど豊かに彩られるのだろうか、という発想から映像に映し出したいと思うようになり制作しました。
2 つめは「麻薬」が引き起こす人間関係を映したかったという事があります。現代社会において、年間約 15000 人の人々が薬物犯罪を起こし、法政大学も例外ではない難しい問題です。本作品を通して、もう一度、薬物の危険性、友人や彼女の尊さについて考え直してもらいたいという意図で制作いたしました。

発表者氏名：白鳥綾乃
所属ゼミ：鈴木靖ゼミ
タイトル：台湾人 2000 人を救った日本人警察官
発表概要：世界一親日的といわれる台湾。日本政府観光局(JNTO)の調査によれば、2015 年度日本を訪れた台湾人は 3,677,075 人。台湾の総人口が約 2,350 万人であるから、昨年度は全人口の 15.6%、およそ 6 人に 1 人が日本を訪れたことになる。台湾人の全訪日外国人数の 18.6%に当たる。一方、日本からも昨年度は 1,627,229 人が台湾を訪れている。
しかし両者の間にはいま正式な国交はない。1972 年、日本と中華人民共和国の国交正常化によって、日本と台湾との国交は絶たれてしまったのである。
そんな中、いまも台湾の人々に「神」として祀られている一人の日本人がいる。廣枝音右衛門である。台湾では戦後 71 年経ったいまも、彼を偲ぶ慰霊祭が行われているのである。
廣枝は大学を卒業後、軍隊や小学校教諭などの職歴を経た後、競争率 100 倍といわれる難関を突破して台湾総督府巡査になった。台湾に渡った彼は 38 歳の若さで警部になるが、太平洋戦争の戦線拡大により、台湾で結成された海軍巡査隊の総指揮官に任命され、総勢 2000 名の台湾人部下を率いて、当時日本の占領下にあったフィリピンのマニラに渡った。戦況が悪化する中、軍は兵士ではない巡査隊に対しても玉砕の命令を下した。しかし、廣枝はその命令に従おうとはしなかった。そして、最後の決断を迫られたとき、彼は部下たちにこう言ったという。
「お前たちは台湾から来た者だ。家には妻子父母兄弟が待っているだろう。台湾に連れて帰れないのが残念だが、お前たちだけでも、行ける（生ける）ところまで行け（生け）。俺は日本人だから、責任はこの隊長が持つ。」
この言葉を最期に、彼は自ら拳銃の引き金を引き自決した。部下たちは彼の言葉に従い、連合軍側に投降し、戦後無事台湾に帰還することができた。
廣枝の部下であった劉維添氏らは、彼の事績を後世に語り継ごうと、戦後、元同僚たちとともに廣枝を偲ぶ活動を始めた。これがいまも続く慰霊祭である。
　私たちはこの慰霊祭の現状を調査するため、今年 9 月台湾を訪れた。台北駅から車で 3 時間のところにある獅頭山に廣枝の位牌は祀られていた。2013 年に劉維添氏が亡くなった後、在台日本人の渡辺崇之がその遺志を継ぎ、今年も日本と台湾の多くの有志が集まり、盛大な慰霊祭が行われた。
慰霊祭の後に訪れた劉維添氏の家ではその子、その孫たちが私たちを歓迎してくれた。廣枝が自らの命にかえて守った部下たちの命が、いま台湾に多くの幸せな家庭を遺しているのである。
　軍命に従うべきか、それとも若い部下たちを守るべきか。戦争という究極の状況の中で、一人の日本人が下した決断が、戦後 71 年という歴史と民族の壁を越えて、いま日台の人々の間に共感の輪を広げているのである。
　本作品では、こうした廣枝の生涯とその事績を語り伝えようする人々のようすを通じて、本学部がめざす「国際社会人」とは何かについて考えてみたい。

発表者氏名：若宮樹、土方日向、栗原邑珠、中西真由佳、西山梨菜、小林采未、礒野志保、武田花梨
所属ゼミ：稲垣ゼミ
タイトル：VERBS
発表概要:私たちの 1 日はいくつもの動詞たちーverbsーによって形成されている。動詞たち無しでは私たちは生きていく事は出来ないといっても過言ではない。この映像作品ではゼミ生一人ひとりが好きな動詞を 1 つテーマとして選択し、日常生活におけるその"verb"

をあらゆる場面で撮影し、記録している。私たちが普段何気なく過ごしている毎日にはあなたが思っていたよりもたくさんの動詞たちが存在しているかもしれない、また、自分のボキャブラリーの中には存在しないような動詞と毎日を共に過ごしているかもしれない。この映像作品を通して、動詞という新しい切り口から自分の毎日を見つめ直してみたら何か新しい発見があるかもしれない。

発表者氏名：小島シティマイ百那、柏瀬将吾、露木理久、鈴木理美子、江川玲
所属ゼミ：熊田ゼミ
タイトル：Lives: movie version
発表概要：熊田ゼミは「身体性」と「多文化共生社会」をテーマに、今年度の学部学会では様々な部門にて作品の出展を行います。この『Lives: movie version』は、今年度インスタレーション部門に出展する『Lives』内で上映予定の映像です。インスタレーションという、空間を切り出して創り上げる作品を映像に残すことで、一過性の作品となりがちなインスタレーションを残し続けたいという思いから、映像部門に出展しました。

発表者氏名：飯野 麟太郎（イイノ リンタロウ）
小泉堯史　澤邊司　田村莉沙　山本陸　百瀬聡亮　大場郁美　上霜圭央
所属ゼミ：島田ゼミ
タイトル：Wonderwall
発表概要：映像作品を作るにあたり、最近注目を浴びることが多くなったミュージックビデオを制作することに決めた。Oasis の代表曲である、Wonderwall にストーリー性のある映像をつけることに決まり、歌詞を読み込んでいった。その中で、この曲の持つ意味がかなり抽象度が高いことに気づき自分なりの解釈を表現した。

物憂げに歩く女。ヒールとその心に残る男の影は未だ彼女の足取りを阻んでいる。
時間と距離が精神の上で比例するならば、どこか遠くへ行ってしまいたい。いっそあの頃の時を殺して綺麗さっぱり乗り換えられたならどんなに楽だろうか。自分の前後に緩やかに流れる今。なぜか、それだけが人生のように感じて、一時の衝動に身を委ねたくなる。黄色いハンカチは落ちてはいないし、ガラスの靴は大抵合わない。
気づくのが遅かった。
でも女はどこかで歩き出す。地に足をつけて。

今回工夫した点として、記憶の部分の描写を異なるアスペクトのカメラを使って撮影し、それをそのまま採用することで作品の中での時間軸と感情の差別化を図った。

発表者氏名：飯野麟太郎
所属ゼミ：島田ゼミ
タイトル：国際文化学部紹介映像
発表概要：もともと、自分がこの学部に所属していて感じたことを踏まえて映像を作ろうと思っていました。兎にも角にもホームページに眼を通しておこうと思い、掲載されている栩木玲子学部長のメッセージを拝見させて頂いたところ自分がこの学部に対して思うことと重なる部分があり、この作品の軸にさせて頂きました。

D.インスタ部門

発表者氏名：飯野麟太郎
所属ゼミ：島田ゼミ
タイトル：Value?
発表概要：金欠で困っているので何かカネを題材に作品を作りたいと思い制作した。普遍的な感情かもしれないが、昔からカネに対して一定の嫌悪感があり、かといってそれなしでは生きていけないしそれに助けられ時には頼って生きていることがなんとなく悶々としていて、目的の前に手段として立ちはだかりあたかもそれが目的だったかのように思わせてしまったり、他人や自分の親切でさえ汚く見せてしまうことがあるこの存在をどうしてやろうかと思っていた。そんな時、今自分が興味を持つ、人間の装いと社会の関係について学んでいる中で、貨幣の弊はヌサであり布だ

ということを知り、今私たちが使っている紙幣などもその役目において死ぬ日が来るのではと思い制作した。流動的な価値を改めて考える機会となればと思う。

発表者氏名：石塚蘭、本田圭、入倉真之介、須田彩花、門脇ゆうり、柳田有希奈、山﨑佳奈
所属ゼミ：栩木ゼミ
タイトル：意外と知らないアメリカ～常識を疑え～
発表概要：　私たち日本人が、一般にアメリカについて抱いているイメージ（ステレオタイプ）は、主に「多国間の紛争に頻繁に介入、強い軍事力、ヒーロー、世界の警察」などである。では、なぜ“ヒーロー”であるアメリカで、ドナルド・トランプ氏が次期大統領に選ばれたのか。彼は人種主義的発言や女性差別の発言も多く見受けられ、さらに他国には介入しないと明言している。これは私たちの抱くアメリカのイメージにそぐわない。つまり、そこには私たち日本人の知らないアメリカの姿があるということだ。彼がアメリカ国民に望まれたのはなぜか。その理由のうちの一つとして、アメリカの裏側とでもいうべき姿を研究し、発表したいと思う。この発表を通して、来場者が抱くアメリカについてのイメージに新たな視点を与えることが私たちの発表の目標であり、栩木ゼミで私たちが日々目標にしている、“常識を疑う”視点を皆さんにも体験してもらいたいと思っている。

発表の手順として、まずアンケートを元に作成した、一般のアメリカについての世界の警察的イメージを銃や写真や絵を使い提示する。次に、そのイメージが形作られた一因であろういくつかのヒーロー映画を提示し、さらに実際にアメリカが“正義”の名のもと他国に介入してきた歴史も挙げていく。このことにより、皆がアメリカについて抱く世界の警察的イメージは正しく、確かにアメリカの一部であることを示す。そこで、ではなぜトランプ氏が選ばれたのか、という投げかけをし、アメリカの裏側の説明に入る。そこでは主にアメリカの孤立主義について説明する。孤立主義とは他国の紛争などには介入しないという政策で、世界の警察、つまり国際主義とは真逆の政策であり、実は孤立主義はアメリカの歴史においてずっと国際主義とともに揺れ動いてきた思想であることを示す。最後にトランプ氏が選ばれた背景として、現在アメリカはプア・ホワイトと呼ばれる貧困に陥った白人が増えており、よってトランプ氏の掲げる保護主義の思想に、多くの民衆が同意したことを示す。この保護主義と、他国よりアメリカ優先という孤立主義の思想が合致しており、トランプ氏も孤立主義であることから、アメリカはただ世界の警察であるだけでなく、孤立主義的一面も持っていることを示す。これにて“みんなの知らないアメリカ”は、世界の警察とは真逆の孤立主義であることを示し、発表を終える。

発表者氏名：江川玲、露木理久、小島シティマイ百那、柏瀬将吾、御子柴亮介、完倉舞、舘美月、菊池麻里、馬可欣、奈良春花、塩田優香、金子綾花、鈴木理美子大沢愛絵、伊東伸彦、高橋沙樹里、東明香里、布上果歩、田中遙香、近藤郁美、澤井薫、藤本卓也
所属ゼミ：熊田ゼミ
タイトル：Lives.
発表概要：クマゼミは「身体性」と「多文化共生社会」の二つをキーワードにインスタレーション発表をします。日頃私たちは“五感”という「個々人」の身体性を使い、様々な情報を得ます。しかし“文化”とは無意識に日本文化とアメリカ文化、フランス文化とイギリス文化と「国別」に分けて考えていませんか。このような「国」で区切ることは、私たち一人一人の個性を見ないで、ただ乱暴に大きな枠として区切ることになっていないでしょうか。乱暴な区切りで私たちを区切るために「〇〇文化」と言うのは、やめにしませんか。私たちがこの世界のいたる所で国境を越え生きている私たちの文化をもう一度見つめ直してみましょう。このインスタレーションでは電車に乗る、大学へ通うなど私たちの日常生活と戦争、過疎地域などあまり直面しないような非日常生活の映像を流し、スピーカーからは普段聞いているようなアラーム音、食器の合わさる音、話し声などの生活音を流して、そしてもう一度すべてに対して五感を鋭敏にして、同時刻・違う場所・違う人間一人一人の異なった／同じリアルでこの世界は成り立っているということを自ら感じ取る機会にしたいと思います。見慣れた日常と異空間

で見る非日常を合わせて見る、聞くことで私たちは多様な活動を通して共に生きていることを実感します。生きているから体を動かし、音を出し、五感を使い身体性を行使できます。生きるという身体性の行為は多文化の中に身をおくことなのです。今年のゼミ活動を通して学んだナム・ジュンパイクやクリスチャン・ボルタンスキーに関する論文や作品にインスパイアされ今回このようなインスタレーションを行うことにしました。この作品を学部学会における「第一回クマゼミ・アニューレ」の一つとして発表します。他の作品も「身体性」「多文化共生社会」の二つのキーワードをもとに作成しています。皆様にはクマゼミの作品をたどって見て回ることをお願いします。

発表者氏名：佐々木美佳、吉冨真由、泉名恋
所属ゼミ：甲ゼミ
タイトル：昴
発表概要：気温が下がり秋めいた風を感じ、あなたはどんな情景を思い浮かべるだろうか。放課後の校庭、部活動の練習風景、帰宅途中の道、人によって多様な思い出や感情が存在するであろう。ところで、その浮かんだ情景や感情と、五感を含めた感覚との結びつきを、普段意識することはあるだろうか。私たちは、その結びつきに着目し、“感情を生み出す空間”をテーマに研究を始めた。しかし、“空間”という概念はとても抽象的で、様々な事柄をひっくるめて“空間”という言葉でごまかしていたことに気が付いた。そのため、空間の要素の一つである“五感”という感覚に着目し、それが我々の感情に与える影響について予備調査を行った。結果、視覚からの情報量は非常に多く、他の感覚に比べ決定的なものであるが、他の感覚器官からの情報を加えることで、記憶がより鮮明に思い起こされることが確かめられた。そこで私たちは、思い起こされる記憶と、五感すべてとの結びつきを意識することにより、思い出がさらに鮮やかなものになるのではないかと考えた。今回のインスタレーションでは、この考えを踏まえた上で発表を行う。五感と感情との結びつきをより意識することにより、参加される方が今後より豊かな記憶体験をするきっかけとなれば幸いである。

発表者氏名：三輪大輝、浅香健人、石川晏里、井口真弓
所属ゼミ：林ゼミ
タイトル：―私たちは音楽をただ音・耳だけで聴いて／感じているのだろうか―
発表概要：　表象文化演習「ポピュラー音楽の系譜」では、前期の演習時間にゼミ所属メンバーのそれぞれが、ポピュラー音楽の歴史をジャンルごと調べ、発表を行なった。そのように私たちにとって身近なポピュラー音楽の成立の仕方について学ぶうち、今日に至るポピュラー音楽について、ゼミ生一同で気付いたことがあった。それは「私たちはポピュラー音楽をただ音だけで体験しているわけではないのではないか？」ということだ。私たちがポピュラー音楽の楽曲を聴く時、その傍らに何らかのビジュアル的要素があり、音楽をそれらとともに体験する機会は非常に多いと言える。

「音楽をビジュアル的要素の例を挙げると、アーティストの外見（ルックス）やレコード（CD）アルバムのジャケットや、メディア上にあふれるアーティストの写真や映像が挙げられる。それらは現在人々がポピュラー音楽に触れる際、容易かつ頻繁に接する機会のあるビジュアル的要素である。

またビジュアル的要素の中には、個々の楽曲やアルバムのコンセプトを何らかの方法で視覚化させているものがある。例えば 1970 年代の後半にイギリスで流行したパンクロックは、音楽形式上、歪んだギターの音や荒々しさを表現するメロディー、反社会的な意味を持つ歌詞などの特徴を持つが、「パンクが過激である」というイメージは、ミュージシャンの逆立てられた髪型、故意に引き裂いた衣装、反社会的・非道徳的な行為を映すジャケット写真といった要素抜きに成立しなかったと考えられる。パンクロックという一音楽ジャンルが、ファッションなどさまざまな文化・社会現象に及ぼした影響を考えると、イメージを特徴付ける上で、ビジュアル的要素の果たす役割は極めて大きいと考えられる。

あるいは日本のポピュラー音楽を考える上で重要な「アイドル」は、顔や身体（スタイル）の要素が非常に重要視される人々である。「アイドル」については、彼らが容貌の良い若い男女であり、メディアの露

出が非常に重要視される、すなわち「彼ら／彼女らはテレビにたくさん出ているから人気がある」というようなとらえられ方が定着している。今回の発表は、ポピュラー音楽における音楽とビジュアル的要素のつながりを、以上のような具体例をもとに考察した成果である。

本発表ではインスタレーションの形式を用い、各種ポピュラー音楽がビジュアル的要素とどのようにつながっているのかを分析・提示する。空間には四つのテーマ別展示（①ジャケットの変遷とジャケットが音楽作品にもたらす作用②私たちが知っている/私たちが聴いているアーティストは本当に歌っているだけなのか？　③ビジュアル的要素が反映される音楽作品の販売戦略　④人は音楽の何に惹かれるのだろうか？　）を設置する。また空間についてはこちらで①→④と順路を設定し、四つの展示をその順路通りに辿ることにより、ポピュラー音楽を体験するという行為にどのようにビジュアル的要素が含まれているのかという点が順に解き明かされる仕組みになっている。

発表者氏名：山﨑優、高橋麻理子、佐野奈々美、桝林佳生子、上田瑞季、丸谷拓人、横山亮太朗
所属ゼミ：森村・川村ゼミ
タイトル：『Se’e’cret』
発表概要：精神分析家であるラカンは眼差しについてこう言いました。「絵においてはつねに眼差しという何かが確実に現れる」[1]と。

絵を見ている私たちだけが眼差しを送っているだけではなく、絵の向こうからも眼差しがあると言うのです。そこから、私たちはこのように思いました。普段何気なくしている「見る」こととはなんなのだろう、と。

「見ること」は私たちの生活の一部です。視覚から得られる情報は他の器官に比べて圧倒的に多く、私たちは「見ること」でいろいろなことを思ったり感じたりすることができます。絵を見て美しいと感じたり、光を見て眩しいと思ったり。しかし、「見ること」とは、そんなに単純なことなのでしょうか。

見るための目があって、その対象物があって、そちらに視線を向けて、はじめて物を見ることができるのです。さらに言えば、私たちが目を持って物を見ているように、他の人々も同じように目を持ち、何かを見ています。私たちがふとした瞬間に誰かを見るとき、その人もまた私たちを見ているかもしれません。

普段当たり前のようにしている「見ること」と、その奥深さを今回私たち森村ゼミは発表していきます。私たちのインスタレーションを是非覗いて、それを感じていただければ幸いです。

[1]Lacan,J. Miller,J.A.(Eds.) Les quatre concepts fondamentaux de la psychoanalyze 1963-1964 （『精神分析の四基本概念』 小出浩之、鈴木國文、新宮一成、小川豊昭共訳 岩波書店, 2000 年）

発表者氏名：新崎椋司、米川昌杏、濱口彩華、西山梨菜、武田花梨、小松玲菜、福原知佳、栗原邑珠、今井奏、土方日向、小林采未、坂井桜、玉井瑛理、中西 真由佳、福田愛、山口万柚子、青木優里香、礒野志保、河田智大、若宮樹、和泉亜里紗、阿部早也香
所属ゼミ：稲垣ゼミ
タイトル：Renatus　～モノの機能～
発表概要：私たちが生きる現代社会、それはまさに大量生産・大量消費の社会である。欲しいものがあったとき、お金を出せばすぐに手に入るし、東京という大都市にいたら徒歩圏内で必要なものが大方揃ってしまうかもしれない。普段やんわりと何の気なしに過ごしていたら、どれだけそのモノが私たちにとって効果を発揮していたとしても、それは道端にある落とし物のような存在にもなり得てしまう。つまり、社会はモノで溢れている。

しかし、そのモノからたったひとつの機能を取り去るだけで、途端にモノは実用性を失ってしまう。では、実用性を失ったモノには、価値はないのだろうか。

たとえば、煙草は全世界共通で成人した大人がリラッ

クスや一服するために嗜好されている商品で、本来、フィルターと反対側に火をつけて煙を吸って嗜むものだが、火をつけずに水の入った灰皿に浸された水浸しの煙草があったら、煙草は煙草としての機能を完全に失ってしまう。そんなとき、私たちはもうひとつの視点から社会を、いや、世界を見なければならない。すると、私たちは、この水浸しの煙草というモノが新しい価値を得ていることに気がつく。すなわち、モノが製品から芸術作品へと生まれ変わる瞬間を目撃するということである。そのモノは芸術作品へと生まれ変わったことでデザイン性が加えられたり、2020 年に東京オリンピックを控えた日本が呼びかけを始めた完全禁煙に対する意図の投げかけになるかもしれない。

モノからひとつの機能を奪ったことで見えてくる世界がある。そのことに気づく瞬間に、私たち人間は、そのモノの存在価値を思い知らされることになる。

発表者氏名：吹原春海、土井友貴、笠原亜実、長島のぞみ、守谷香菜子、渡辺実鈴、青木璃紗、清田美江、沢田奈美絵、繁永実侑、柴田彩生、渋沢朋広、長谷川智咲、福田光、宮部太貴
所属ゼミ：粟飯原ゼミ
タイトル：パンアフリカニズムについて 〜世界はアフリカだ〜（Bar AFRIKA）
発表概要：【パンアフリカニズムについて】
Bar AFRIKA　〜世界はアフリカだ〜
法政大学、外堀校舎には変わったバーがある。
その名も「Bar AFRIKA」
ここで働くスタッフは世界の様々な国の出身だ。
ジャマイカ、アメリカ、フランス、ブラジル、南アフリカ、ナイジェリア・・・・世界中の様々な国から来たスタッフはアフリカ製の色鮮やかな布を巻き、ある思いを胸に働いている。
「世界はアフリカだ。」
育った環境も、場所も違うメンバーが共有する一つの思い。
店内は薄暗く、飾っているもの全て手作り感満載なチープなお店だが、その装飾ひとつひとつに意味が込められている。
是非、足を運んで、見て聞いてみて欲しい。

「歴史・人物」「音楽」「宗教」「ブラックパワー・ネグリチュード」
と４つの観点から、パンアフリカニズムとは何か、体感してもらえるような空間をバー形式で製作した。

「歴史・人物」では、パンアフリカ会議の歴史の紹介、そして「アフリカ回帰」を唱えた W.E.B.デュボイス(W.E.B. Dubois)等の７人の人物の紹介を行う。
「音楽」ではボブ・マーリー (Bob Marley)、フェラ・クティ (Fela Kuti)、タリブ・クウェリ (Talib Kweli)、の３人の歌手のメッセージを彼らの歌を通して紹介する。
「宗教」では、ブードゥー、カンドンブレ、サンテリアという南米のある地域の宗教を紹介する。
「ブラックパワー、ネグリチュード」では、それぞれアメリカ、フランスで起こった運動、思想について紹介する。

本日、少しでもパンアフリカニズムについて知っていただき、その長い歴史に、関わっていた人々に、思いを寄せていただければ嬉しいです。